

沙流川水系河川整備基本方針

沙流川水系の流域及び河川の概要

令和 6 年 3 月

国土交通省 水管理・国土保全局

目 次

1. 流域の自然状況	1
1-1 河川・流域の概要	1
1-2 地形	5
1-3 地質	6
1-4 気候・気象	7
2. 流域及び河川の自然環境	10
2-1 流域の自然環境	10
2-2 河川及びその周辺の自然環境	18
2-3 特徴的な河川景観や文化財等	25
2-4 河川環境を取り巻く背景	32
2-5 自然公園等の指定状況	33
3. 流域の社会状況	35
3-1 土地利用	35
3-2 人口	39
3-3 産業と経済	41
3-4 交通	44
3-5 関係ある法令の指定状況	45
4. 水害と治水事業の沿革	48
4-1 既往洪水の概要	48
4-2 治水事業の沿革	61
5. 水利用の現状	66
5-1 水利用の現状	66
5-2 渇水被害及び渇水調整	68
6. 河川流況及び水質の現状	69
6-1 河川流況の現状	69
6-2 河川水質の現状	73
7. 河川空間の利用状況	76
7-1 河川敷等の利用の状況	76
7-2 河川の利用状況	78
7-3 内水面漁業	80
8. 河道特性	81
8-1 河道の特性	81
8-2 河床変動の経年変化	84
9. 河川管理	86
9-1 河川管理区間	86
9-2 河川管理施設	87

9-3 砂利採取.....	87
9-4 水防体制.....	88
9-5 危機管理への取り組み.....	89
10. 地域との連携.....	94
10-1 地域住民、河川協力団体、市民団体等との協働.....	94
10-2 関係自治体との連携・調整.....	94

1. 流域の自然状況

1-1 河川・流域の概要

沙流川^{さるがわ}は、その流域の源は日高町^{ひだか}の日高山脈襟裳^{えりも}国定公園に指定されている日高山脈に発し、千呂露川^{ちろろ}等を合わせ、日高町市街部に出てさらに溪谷^{びらとり}を流下して平取町^{ぬかびら}に入り、額平川^{ぬかびら}等を合わせ、日高町において太平洋に注ぐ、幹川流路延長 104km、流域面積 1,350km² の一級河川である。

その流域の関係市町村は、日高町、平取町の 2 町からなり、その 2 町の人口は、昭和 55 年（1980 年）と令和 2 年（2020 年）を比較すると、約 2 万 7 千人から約 1 万 6 千人へと減少する一方、高齢化率は約 10%から約 36%へと大幅に増加している。

流域の土地利用は、山林等が約 89%、水田、畑等の農地が約 7%、宅地等が約 4%となっている。流域内は森林資源等に恵まれ、明治以前からのアイヌコタン（集落）による営みとともに、下流では農耕地として明治初期からひらけ、水田、牧畜等が営まれている。また、近年、特に沙流川流域はトマトの一大産地となっており、平成 24 年（2012 年）に商標登録された「びらとりトマト」は JA 平取の主要農作物販売取扱高の約 80%（令和 3 年度（2021 年度）JA 平取町主要農畜産物販売高推移表より）を占めるなど、沙流川流域の重要な特産物となっている。その収穫量は北海道で 1 位、全国で 5 位であり、北海道内のほか関東・関西へ出荷され、東京・横浜市場の約 1 割、大阪・京都市場で約 2 割のシェアを占めている。このほか、日高町と平取町で「国内軽種馬及び繁殖牝馬」の全国シェアは約 20%を占め、全国有数の産地となっている。

また、国道 235 号、国道 237 号、国道 274 号等の基幹交通施設に加え、日高自動車道の整備が進められ、道央と道東を結ぶ交通の要衝となっている。

伝統的なアイヌ文化では、沙流川はアイヌ語のサラが語源で、ヨシ原、湿地等と訳され、一方で、沙流川にはシシリムカという古い呼び名があるといわれており、これはアイヌ語で上流から流されてきた土砂が堆積して河口を閉塞して高台になると解釈される。定期的に起こる土砂の侵食と堆積は、有用な植物が繁茂する環境を整える効果があるとされており、アイヌ文化における伝統的な農法として、河川沿いの肥沃な低平地でピクタイと呼ばれる川洲畑にアワ等の雑穀の栽培が行われていたなど、この地域がアイヌの人々の生活圏として広く利用されてきた。

沙流川沿いには古くからアイヌの人々が先住し、この沙流川流域に住むアイヌの人々をサルンクルと言い、その伝統・文化は今日の流域社会に深く結びついている。「チッサンケ（舟おろしの儀式）」、口承文芸^{こうしょうぶんげい}、アイヌ古式舞踊^{こしきぶよう}等が今日まで受け継がれているとともに、アイヌ文化期等の埋蔵文化財がこれまでに随所で発掘されている。特に、平取町は、豊かで多彩な沙流川流域の自然とあいまってアイヌ文化が比較的濃厚に保全・継承されてきた地域となっている。

また、平取町は、「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が「重要文化的景観」として、平成 19 年（2007 年）7 月に北海道で初めて選定された地域となっている。

さらに平取町では、平成 20 年度（2008 年度）から、「平取地域イオル再生事業」を行って

おり、沙流川流域のアイヌ文化環境を再生・保全していくための施策として「イオル（伝統的生活空間）の森」、「コタン（集落）の再現」、「水辺空間」の3つの柱を軸とした再生・保全の検討・整備が進められている。

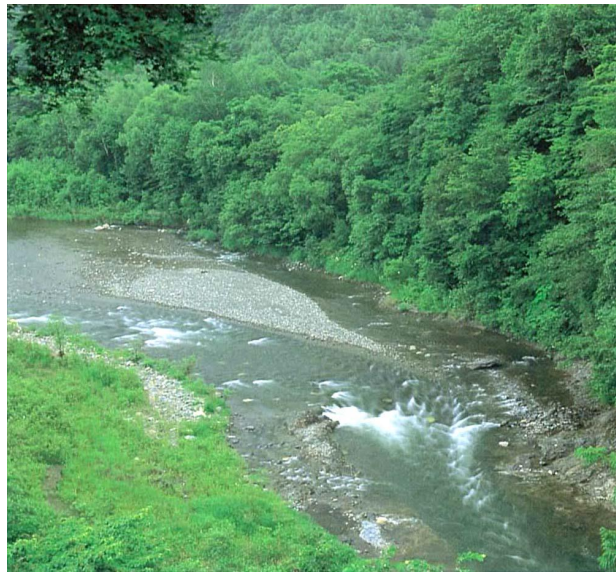
沙流川流域は北海道の太平洋沿岸のみに生息するシシャモの遡上、降海や産卵もみられ、サケやサクラマス（以下、同種で生活史が異なるヤマメを含む）等も遡上するなど、魚類の重要な生息地となっている。上流部では国の天然記念物に指定されているオジロワシの生息や中流部の河畔林、自然裸地等、下流部には汽水域特有のハマニンニク群落が広がるなど、豊かな自然環境に恵まれ、さらに国立公園への指定の手続きが進められている日高山脈襟裳国立公園に位置する流域は、アイヌ文化の保全・継承や地域住民の安らぎと憩いの場となっている。

このように、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。



表 1-1 沙流川流域の概要

※出典：第10回河川現況調査（平成26年基準）、
北海道統計書（R5）、国勢調査（R2）



上流部



中流部



下流部

写真 1-1 沙流川流域

※写真出典：北海道開発局

1-2 地形

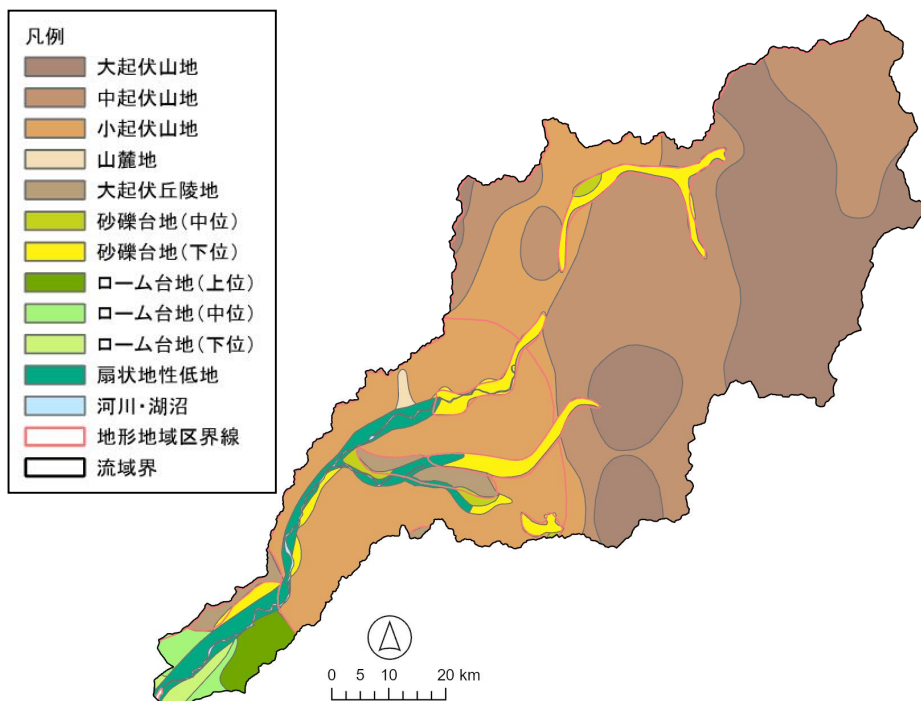
流域の地形について、東は北海道の脊梁をなす日高山脈の 2,000m 級の山が連なり、北及び西は 1,000m 級の山で連なった分水嶺を持っている。流域の形状はほぼ南西～北東に広がり、流域平均幅は約 13km と細長い形状になっている。最上流部の日高山脈は山腹斜面が急峻で、中流部はおおよそ標高 200～400m の範囲にあり、山腹斜面はやや緩やかになるとともに、河岸段丘の発達が顕著である。下流部は、標高 100m 以下となり、山腹斜面はさらに緩くなるとともに、河岸段丘もさらに広く発達し、平取町本町付近から下流部には沖積平野の発達もみられる。

河床勾配は上流部（岩知志ダムより上流）で約 1/130～1/50 と急勾配で、中流部（岩知志ダムから二風谷ダムの間にぶたに）で 1/190 程度であり、下流部（二風谷ダムから河口）で 1/500～1/700 程度の急流河川である。

沙流川の上流部では、急峻な峰々を連ねた日高山系及び輝緑凝灰岩からなる竜門峡のような渓谷と清流からなる景観が連続し、河床は岩盤等で構成されている。

岩知志ダムから二風谷ダムの中流部では、上流部に比べ流れは穏やかで、河岸段丘の発達が顕著であり、河川に沿って農地と国道が連続する。河道は、河床堆積土砂も多くなり瀬や淵がみられるようになる。

二風谷ダムから下流では右岸主体に堤防が続き、周辺では軽種馬や飼育牛の放牧及び野菜栽培等が行われ、牧歌的な田園風景が広がり、良好な自然環境とともに魅力あふれる流域景観資源となっている。河道は、河床部が堆積砂礫からなり、瀬と淵が連続する。



※出典：「国土数値情報（20 万分の 1 土地分類基本調査） 国土交通省」を加工して作成
https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/hyousou_chisitsu.html

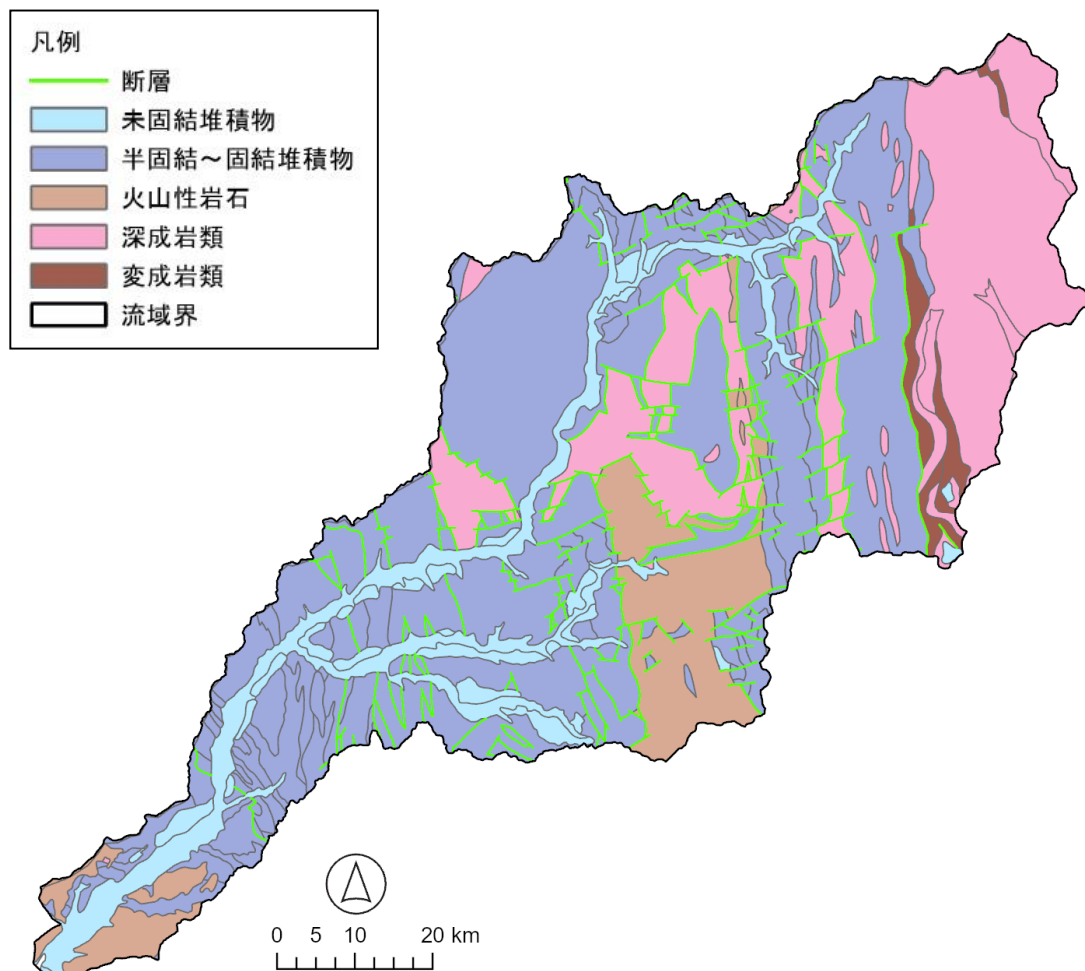
図 1-2 沙流川地形分類図

1-3 地質

流域の地質は、上流部の山間部から下流部の平地部にかけて、白亜紀の砂岩・泥岩や凝灰岩等から第四紀の沖積層・洪積層により構成されている。なお、最上流部の日高山脈には、日高変成帯が分布する。

日高変成帯は、ハンレイ岩・カンラン岩等の深成岩類及び結晶片岩・片麻岩等の変成岩類からなる。古生層である先白亜紀の黒色粘板岩・砂岩の中に珪質岩・輝緑凝灰岩を介在又は互層する日高累層群、白亜紀の砂岩・泥岩を主とする蝦夷層群、輝緑凝灰岩を主に珪質岩・粘板岩等を含む空知層群が分布し、特に振内北部は蛇紋岩体（貫入岩）が分布する。振内付近より下流では、砂岩・泥岩互層を主とする川端層や滝の上層等の新第三紀層が分布する。河口付近には砂・砂礫からなる第四紀層が分布する。

地表は一般に砂礫を混入した砂土壌や植生で覆われているが、川に面する急傾斜地では基岩の露出している箇所が多い。下流部においては、土砂の堆積等で土壌も厚く、表層には火山灰が 5～20cm 程度堆積している。



※出典：「国土数値情報（20 万分の 1 土地分類基本調査） 国土交通省」を加工して作成
https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/hyousou_chisitsu.html

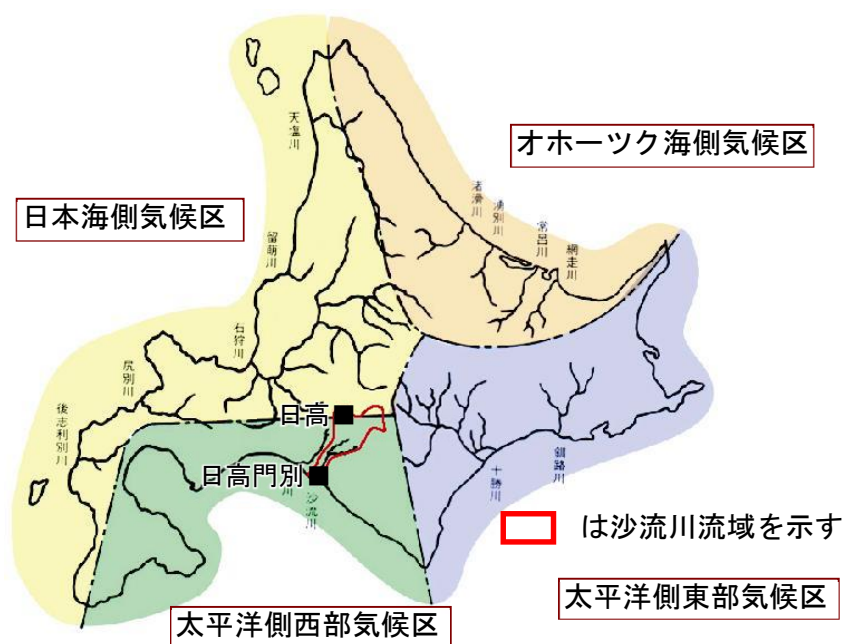
図 1-3 沙流川表層地質図

1-4 気候・気象

北海道の気候は、太平洋側西部気候区・太平洋側東部気候区・日本海側気候区・オホーツク海側気候区の4つの気候区に区分されている。その特徴としては、梅雨期がないこと、春期の気温上昇と降雨により融雪洪水が起こりやすいこと、大雨は夏季末期から秋季の台風と前線の影響によってもたらされることが挙げられる。

流域の気候は、北海道において太平洋側西部気候区に属し、海岸部（日高町）の夏は、沿岸を南下する親潮の影響で、あまり昇温せず海霧を伴う冷涼な日が続く。また冬は、シベリア大陸からの影響が弱い^{もんべつ}ため、積雪量の少ない比較的穏やかな気候となり晴天の日が多く、日照時間は北海道で1,698.8時間と全国平均の1,913.4時間よりも短いものとなっている。風は北海道で平均風速4.0m/sとなっており、全国平均の2.9m/sよりも大きいものとなっている。降水量は8～9月に最も多いことが特徴的である。

年平均気温は日高門別で7.6℃であるが、内陸に入るにしたがい標高が高くなるため低下し、日高では6.3℃である。年平均降水量は、下流に位置する日高門別で約1,000mm、上流に位置する日高で約1,300mmであり、日本の年平均降水量である約1,700mmと比較すると少ない。日高は内陸的で8月の日最高気温平均は25.5℃、1月の日最低気温平均は-13.6℃と寒暖の差が大きい。降雨も台風や低気圧の影響を受け、8月には200mm/月を超える。日高門別では、海岸性で比較的気温差が少なく、8月の日最高気温平均は24.1℃、1月の日最低気温平均は-10.3℃である。降雨は7～9月が120～180mm/月と多いが、これ以外の月は概ね100mm/月以下である。



※出典：「北海道の気候」を基に作成

図 1-4 気候区分図

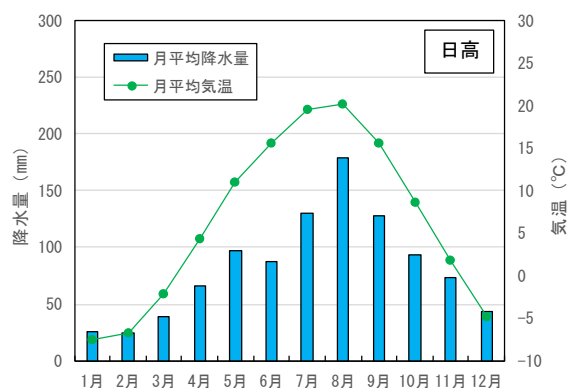
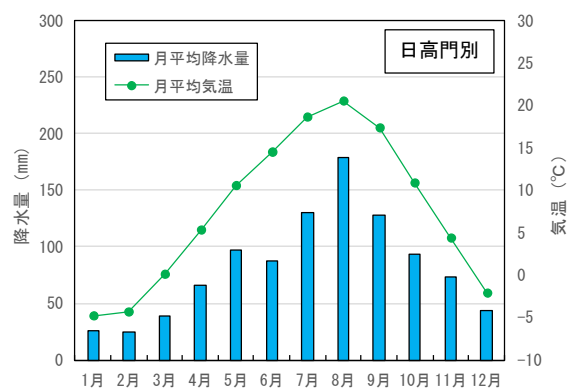
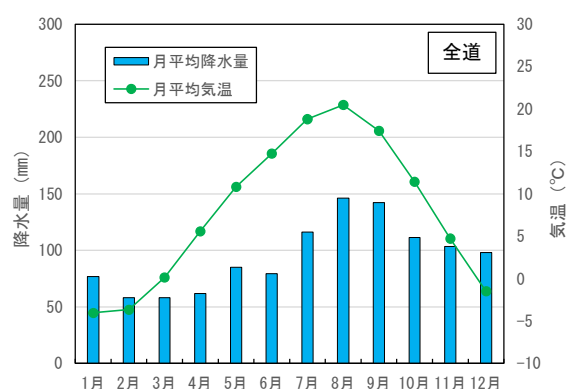
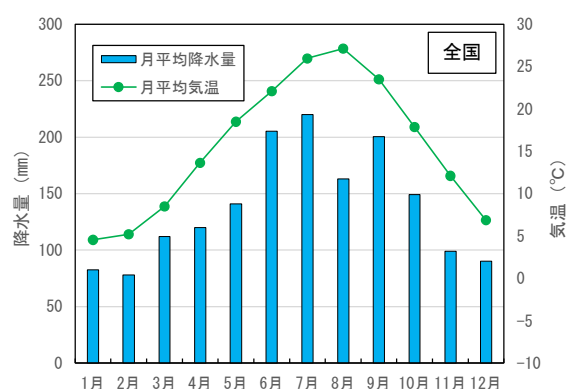
表 1-2 月別気温・降水量

	日高門別				日高			
	降水量 (mm)	平均気温 (°C)	日最高気温 (°C)	日最低気温 (°C)	降水量 (mm)	平均気温 (°C)	日最高気温 (°C)	日最低気温 (°C)
1月	25.2	-4.9	0.0	-10.3	45.4	-7.6	-2.5	-13.6
2月	24.0	-4.3	0.6	-10.0	41.3	-6.8	-1.4	-13.4
3月	38.3	0.1	4.3	-4.6	69.3	-2.1	3.0	-8.0
4月	65.7	5.3	9.9	0.6	100.4	4.3	10.3	-1.4
5月	97.1	10.5	15.0	6.1	115.2	11.0	17.5	4.7
6月	87.0	14.5	18.4	11.1	77.5	15.6	21.6	10.4
7月	130.7	18.6	22.1	15.8	140.3	19.5	24.8	15.4
8月	178.5	20.5	24.1	17.4	224.1	20.2	25.5	15.9
9月	127.3	17.3	21.8	12.8	164.4	15.6	21.5	10.7
10月	93.8	10.9	16.0	5.6	136.0	8.6	14.6	3.2
11月	73.0	4.4	9.1	-0.5	122.9	1.9	6.6	-2.7
12月	43.3	-2.1	2.5	-6.9	73.9	-4.8	-0.3	-9.7

※気象庁の過去の気象データをもとに作成。1991 年～2020 年を平均したもの。

表 1-3 各気象観測値

項目	日高門別	日高	全道平均	全国平均
平均気温 (°C)	7.6	6.3	7.9	15.5
最高気温 (°C)	12.0	11.7	34.2	38.6
最低気温 (°C)	3.1	0.9	-19.0	-6.2
平均風速 (m/s)	2.8	1.5	4.0	2.9
最大風速 (m/s)	13.8	8.7	25.0	24.3
日照時間 (時間)	1,839.3	1,403.0	1,698.8	1,913.4
降水量 (mm)	983.7	1,324.3	1,136.1	1,676.4



※気象庁の過去の気象データをもとに作成。

※全国平均の値は、1991 年～2020 年の各都道府県（県庁所在地）のデータを平均したもの。

・埼玉県は熊谷、滋賀県は彦根のデータによる。

※全道平均の値は、1991 年～2020 年の各支庁所在地のデータを平均したもの。

※日高門別・日高の値は 1991 年～2020 年を平均したもの。

図 1-5 月別降水量

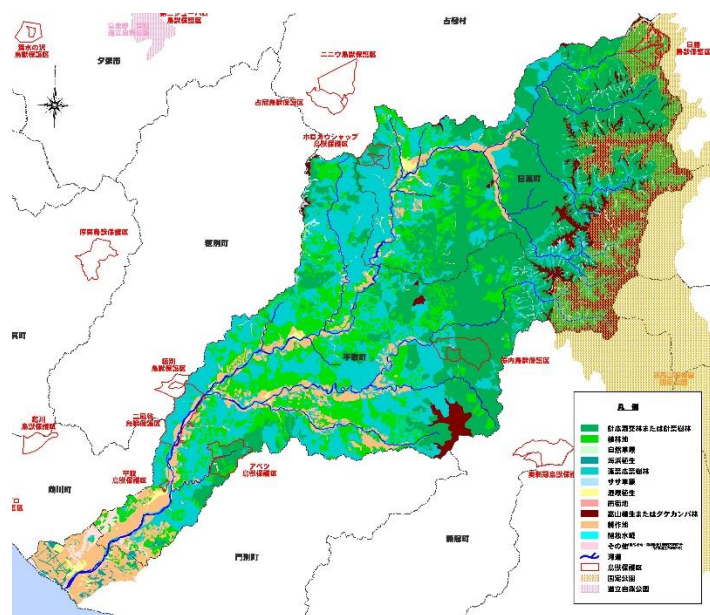
2. 流域及び河川の自然環境

2-1 流域の自然環境

流域の植生は、流域面積の約 83%を占める森林植生に代表され、その分布は、高山帯、亜寒帯・亜高山帯、ブナクラス域自然植生及び代償植生に区分される。標高約 1,000m 以上は高山帯となり、高山低木群落等が分布する。亜寒帯・亜高山帯植生は、これらの群落の下部にあり、標高約 500m～1,000m 程度までの間にエゾマツ-トドマツ群落等が分布する。このうち、日勝峠付近のエゾマツ-トドマツ群落は、「沙流川源流原始林」として天然記念物に指定されている。標高約 500m 以下は、温帯、低山帯で、ブナクラス域自然植生のエゾイタヤ-シナノキ群落や、河川沿いのヤナギ低木群落等が分布する。さらに、上流から下流にかけて、カラマツを主体とする人工林が広く分布する。

河川周辺の植生は、上流では川幅が狭く、水面を樹林地が覆う傾向にあり、中・下流では川幅が広がり、水際に樹林地が分布する。中・下流の堤内地は段丘が発達し、水田・畑地・牧草地等として利用されている。

流域に生息する動物としては、哺乳類ではキタキツネ、エゾシカ等が上流から下流にかけて広く分布する。鳥類は上流ではアカショウビン、カワガラス等溪流や溪畔林に多くみられる種が生息しており、中・下流ではアオジ、カワラヒワ等ひらけた河川沿いに多い種やアオサギ、マガモ等、水面を利用する種がみられる。両生類・爬虫類では、エゾサンショウウオ、エゾアカガエル等、水辺から草原・樹林地を行き来する種が生息し、昆虫類では、上流の高山帯に特別天然記念物のダイセツタカネヒカゲ等、希少な種が生息する。中・下流では、アオゴミムシ等の河川沿いの環境で多くみられる種が生息している。魚類では、上流では絶滅危惧種であるオショロコマが、中・下流では、ギンブナ、ウグイ、フクドジョウ、トミヨ等がみられ、サクラマス等が遡上するほか、北海道の太平洋沿岸のみに分布し北海道レッドデータブックの地域個体群に指定されているシシャモが遡上する。



※出典：現存植生図（第 5 回自然環境保全基礎調査）を基に作成

図 2-1 流域の植生図

(1) 植生

流域の植生は、上流域が山地林及び溪畔林を主体とする樹林地で、エゾマツ-トドマツ群落やエゾイタヤ-シナノキ群落等の自然林が分布する。これらの樹林地は、河川の水際付近まで分布し、林床植物はクマイザサ等が優占する。

中流域には山地斜面に分布する広葉樹を主体とする樹林地、段丘上に分布する畑地、牧草地等の耕作地及び人工林、河川沿いに分布するヤナギ等、河畔林と水際の草原植生が分布する。山地斜面の広葉樹はミズナラ-エゾイタヤ林とカラマツ等、人工林が多く、右岸では水際近くまで分布している。林床はミヤコザサ等が優占する。段丘上の耕作地の多くは牧草地で、イネ科牧草の牧草地が広がっている。河川沿いのヤナギ林は、支流の合流部付近等の砂州上や水面より 1~2m 高い河川沿い低地にみられ、オノエヤナギ等を主体とする高さ 10m 程度の高木林のほか、水際にはタチヤナギを主体とする低木林もみられる。草原としては、砂州上に成立した草本群落为主で、ツルヨシ、クサヨシ、シロバナシナガワハギ等が優占する。

下流域は、流域のほとんどが水田や牧草地で、河川敷地内に比較的自然性の高い環境が分布している。樹林地としては、段丘斜面に立地するミズナラ等の広葉樹林から、河川敷地内の比較的高標高の高い箇所にもみられるヤナギ、ケヤマハンノキによる高木林、水際の低木林まで、その標高や氾濫頻度により群落の高さが異なる。ヤナギ林はオノエヤナギが優占し、林床は比較的まばらでアキタブキ等がみられる。ヤナギ低木林は、水際まで成育しており、ときには沈水する。

高水敷は、本来ヤナギ林が成立できる標高で牧草地として利用されている箇所が多くみられ、その水際側にヤナギ林、ヤナギ低木林等の樹林地や乾性の草原が立地し、さらに湿地や後背水域又は支流との合流部周辺にはヨシ、ツルヨシ群落等の抽水植物群落が分布する。

また、河道内には砂州等の自然裸地が多く分布し、ツルヨシ群落やヤナギ低木林が立地するほか、河口部においては海辺の砂丘地に多い草本群落もみられる。

重要種としては、ヒメドクサ、エゾハリスゲ、クロビイタヤ等が確認されている。



ヒメドクサ



エゾハリスゲ

写真 2-1 植物

(2) 哺乳類

沙流川流域は、森林が多く、日高山脈とも連絡することから、エゾヤチネズミ、エゾアカネズミ、キタキツネ、エゾシカ等が生息する。このうち、エゾヤチネズミ、エゾシカ、キタキツネは中・下流の河川沿いで多く確認されており、これら河川沿い周辺は主要な生息地の一部であると考えられる。

重要種としては、カラフトアカネズミが確認されている。



カラフトアカネズミ

写真 2-2 哺乳類

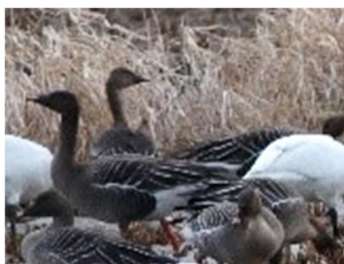
(3) 鳥類

沙流川流域は、上流でアカショウビン、カワガラス等、山地や溪流に多い鳥類がみられる。

中・下流は、水田・畑地・牧草地等の土地利用が進んでいるため、主に河川近傍の水田や畑地等において生息するムクドリ等が頻繁にみられる。

中流の山地の樹林ではエナガ、ハシブトガラが、中～下流の河川沿い樹林ではアオジ、カワラヒワ等が、河川沿いの草原ではヒバリ、ノビタキ、ホオアカ等が、中州等、砂礫地ではコチドリ等の繁殖が確認されている。また、水面や抽水植物群落は、アオサギ、マガモ等の水鳥の餌場等として利用されている。

重要種としては、ヒシクイ、タンチョウ、クマタカ、ハヤブサ、クマゲラ等が確認されている。



ヒシクイ



タンチョウ



クマゲラ

写真 2-3 鳥類

(4) 昆虫類

昆虫類としては、上流域の高山帯では特別天然記念物に指定されているダイセツタカネヒカゲ等、稀種の生息が多く報告されている。中・下流域では、アオゴミムシ等、河原や水域と関連が深い種がみられるほか、樹林地に多いマイマイカブリ北海道亜種等が生息している。

重要種としては、ヒメシロチョウ北海道・本州亜種、エゾアオゴミムシ等が確認されている。



ヒメシロチョウ北海道・本州亜種



エゾアオゴミムシ

写真 2-4 昆虫類

(5) 両生類・爬虫類

両生類・爬虫類としては、エゾサンショウウオ、エゾアカガエル等が生息している。中～下流の後背水域や樋門排水合流部等、流れの緩い箇所ではエゾアカガエルの卵塊が確認されており、これらは本種の主要な生息地であることが考えられる。

重要種としては、エゾサンショウウオが確認されている。



エゾサンショウウオ（幼生）

写真 2-5 両生類

(6) 魚類

上流は溪流で、その河床は主に岩盤であり、絶滅危惧種であるオショロコマ、ハナカジカ等が生息する。中・下流部は、上流に比べると緩やかで、河床は砂利も多くなり、瀬と淵が分布している。淵ではコイ、ギンブナ、ウグイ等、瀬では、フクドジョウ等が生息する。樋門排水の合流部や合流部付近の流れの緩い箇所、砂州沿いのヨシやツルヨシ群落（水際部）等の抽水植物群落あるいは沈水したヤナギ低木林には、ウグイ類の稚魚やトミヨが生息する。

また、サクラマス等が遡上するほか、下流部の細礫・粗砂の河床は沙流川を象徴する魚類であるシシャモの産卵床となっている。

重要種としては、絶滅危惧種であるカワヤツメ、ニホンウナギ等が確認されている。



カワヤツメ



ニホンウナギ

写真 2-6 魚類

(7) 底生動物

上流部では、ヒメヒラタカゲロウ等、清冽で流れが速い環境でみられる種が確認されている。中・下流部では、平瀬においてアカマダラカゲロウ、サホコカゲロウ、キタシマトビケラ等が多く確認され、早瀬においてナミコガタシマトビケラ、キタシマトビケラ等が多く確認されている。淵では、スジエビ、クシゲマダラカゲロウ等が生息する。ワンド、抽水植物、沈水したヤナギ低木林等、流れの緩い箇所では、ヒラマキミズマイマイ、シマイシビル等が生息する。

重要種としては、ヒラマキミズマイマイ等が確認されている。



ヒラマキミズマイマイ

写真 2-7 底生動物

表 2-1(1) 沙流川水系の重要種

区分	No.	種名	文化財 保護法	種の 保存法	環境省 レッドリスト 2020	北海道 レッドリスト	北海道 レッドデータブック 2001
植物	1	ヒメドクサ			VU		Vu
	2	リュウノヒゲモ			NT		
	3	ミズアオイ			NT		Vu
	4	ミクリ			NT		R
	5	ヒメガマ					R
	6	イトヒキスゲ			VU		
	7	エゾハリスゲ			EN		
	8	ヒメウキガヤ					R
	9	ハイドジョウツナギ					R
	10	チドリケマン			VU		
	11	シコタンキンポウゲ			NT		
	12	モメンヅル					R
	13	ヤマタニタデ			VU		
	14	クロビイタヤ			VU		
	15	ノダイオウ			VU		
	16	タチハコベ			VU		
	17	サクラソウ			NT		Vu
	18	キタノコギリソウ			VU		
	19	ヤブヨモギ			VU		
両生類	20	エゾサンショウウオ			DD	N	
哺乳類	21	カラフトアカネズミ				N	
鳥類	22	ヒシクイ	天		VU	N	
	23	マガン	天		NT	N	
	24	ハクガン			CR	N	
	25	シジュウカラガン		内	CR	Vu	
	26	コクガン	天		VU	N	
	27	オシドリ			DD	Nt	
	28	トモエガモ			VU	N	
	29	シノリガモ			LP		
	30	タンチョウ	特	内	VU	Vu	
	31	ヨタカ			NT	Nt	
	32	イカルチドリ				Dd	
	33	セイタカシギ			VU	Nt	
	34	オオジシギ			NT	Nt	
	35	ウミネコ				Nt	
	36	オオセグロカモメ			NT	Nt	
	37	ミサゴ			NT	Nt	
	38	オジロワシ	天	内	VU	Vu	
	39	オオワシ	天	内	VU	Vu	
	40	チュウヒ		内	EN	En	
	41	ハイタカ			NT	Nt	
	42	オオタカ			NT	Nt	
	43	クマタカ		内	EN	En	
	44	アカショウビン				Vu	
	45	クマゲラ	天		VU	Vu	
	46	ハヤブサ		内	VU	Vu	
	47	アカモズ		内	EN	En	
	48	オオムシクイ			DD	Lp	
	49	マキノセンニュウ			NT	Nt	
	50	ホオアカ				Nt	

表 2-1 (2) 沙流川水系の重要種

区分	No.	種名	文化財 保護法	種の 保存法	環境省 レッドリスト 2020	北海道 レッドリスト	北海道 レッドデータブック 2001
魚類	51	シベリアヤツメ			NT	Nt	
	52	カワヤツメ			VU	Nt	
	53	カワヤツメ属			NT(シベリアヤツメ) VU(カワヤツメ)	Nt(シベリアヤツメ、 カワヤツメ)	
	54	ニホンウナギ			EN	Dd	
	55	ジュウサンウグイ				N	
	56	エゾウグイ				N	
	57	ドジョウ類			NT(ドジョウ) DD(キドジョウ)		
	58	シシャモ			LP	Lp	
	59	サクラマス			NT	N	
	60	サクラマス(ヤマメ)			NT	N	
	61	イトヨ(型不明)				N(イトヨ、 陸封型イトヨ)	
	62	エゾハナカジカ				Nt	
	63	スミウキゴリ			LP	Vu	
	64	ジュズカケハゼ			NT		
	65	イソコモリグモ			VU		
陸上昆虫类等	66	カラカネイトトンボ					R
	67	セスジイトトンボ					R
	68	ナツアカネ					R
	69	サザナミヒメカゲロウ					R
	70	カバイロシジミ			NT		
	71	キマダラモドキ			NT	N	
	72	ヒメシロチョウ北海道・本州亜種			EN	Vu	
	73	スゲドクガ			NT		
	74	キスジウスキヨトウ			VU		
	75	エダガタニクバエ					R
	76	ウミズギワゴミムシ			NT	Nt	
	77	セアカオサムシ			NT		
	78	エゾアオゴミムシ				Nt	
	79	イグチケブカゴミムシ			NT	Nt	
	80	キベリクロヒメゲンゴロウ			NT		
	81	キベリマメゲンゴロウ			NT		
	82	エゾコオナガミズスマシ			NT	Nt	
	83	ガムシ			NT		
	84	エゾアカヤマアリ			VU		
	85	テラニシクサアリ			NT		
	86	モンスズメバチ			DD		
底生動物	87	モノアラガイ			NT		
	88	ヒラマキミズマイマイ			DD		
	89	オオコオイムシ					R
	90	オオミズスマシ			NT		
	91	エゾコオナガミズスマシ			NT	Nt	
	92	クビボソコガシラミズムシ			DD		
	93	ガムシ			NT		

< 凡例 >

・文化財保護法

「文化財保護法」(昭和 25 年法律第 214 号)

特:特別天然記念物、天:天然記念物

・種の保存法

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律施行令の一部を改正する政令」
(令和 4 年政令第 12 号)

内:国内希少野生動植物種、特国:特定国内希少野生動植物種、緊:緊急指定種

・環境省レッドリスト 2020

環境省 (2020)「環境省レッドリスト 2020」

EX:絶滅、EW:野生絶滅、CR:絶滅危惧 IA 類、EN:絶滅危惧 IB 類、VU:絶滅危惧 II 類、

NT:準絶滅危惧、DD:情報不足、LP:絶滅のおそれのある地域個体群

・北海道レッドリスト

北海道 (2015)「北海道レッドリスト【両生類・爬虫類編】改訂版 (2015 年)」

北海道 (2016)「北海道レッドリスト【哺乳類編】改訂版 (2016 年)」

北海道 (2016)「北海道レッドリスト【昆虫>チョウ目編】改訂版 (2016)」

北海道 (2017)「北海道レッドリスト【鳥編】改訂版 (2017 年)」

北海道 (2018)「北海道レッドリスト【魚類編 (汽水・淡水)】改訂版 (2018 年)」

北海道 (2019)「北海道レッドリスト【昆虫>コウチュウ目編】改訂版 (2019)」

Ex:絶滅、Ew:野生絶滅、Cr:絶滅危惧 IA 類、En:絶滅危惧 IB 類、Vu:絶滅危惧 II 類、

Nt:準絶滅危惧、Dd:情報不足、N:留意、Lp:絶滅のおそれのある地域個体群

・北海道レッドデータブック 2001

北海道 (2001)「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック 2001」

Ex:絶滅種、Cr:絶滅危機種、En:絶滅危惧種、Vu:絶滅危急種、R:希少種、N:留意種、

Lp:地域個体群

*種まで特定されていない確認種について、候補となる種が全て重要種に該当する場合、それぞれの指定状況を併記した。

2-2 河川及びその周辺の自然環境

(1) 上流部の自然環境

沙流川の源流から日高町日高地区の市街部に至るまでの上流部は、原生林も多く残る森林地帯で、急峻な地形で溪谷と清流からなる景観が連続している。最上流部の河床は岩盤が主で谷底は狭く、樹林が水際まで分布する。やや下流になると、段丘地形がみられ、河相は溪流で、岩盤等で構成され、溪谷等が形成されている。

植生は、山付部の河岸や隣接地にエゾマツ-トドマツ群落、エゾイタヤ-シナノキ群落及び針広混交林等がみられ、哺乳類は、キタキツネ、ヒグマ、エゾシカ等が生息し、鳥類は、クマタカ、オオタカ、ハイタカをはじめアカショウビン、カワガラス等、山地の樹林や溪流に生息する種がみられる。両生類・爬虫類は、エゾサンショウウオが、昆虫類では、高山帯においてダイセツタカネヒカゲ等、希少な蝶類が生息している。魚類は、サクラマスが遡上するほか、絶滅危惧種であるオショロコマやハナカジカ等が生息・繁殖している。

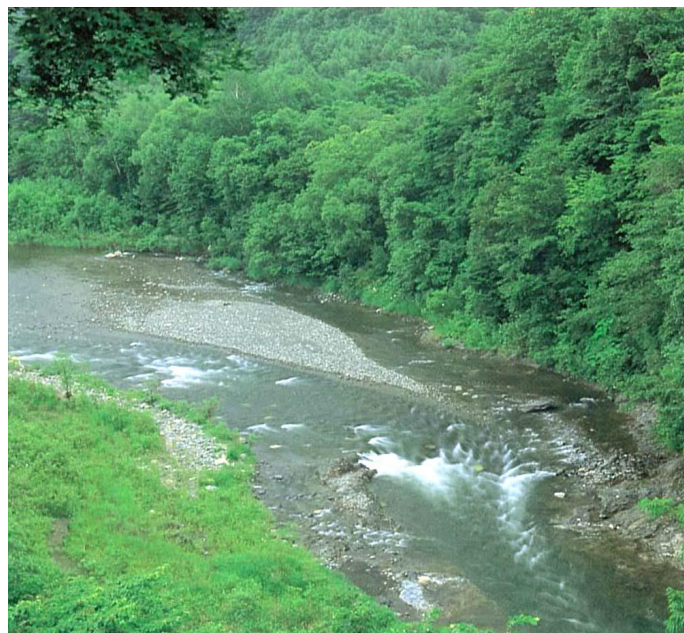


写真 2-8 沙流川上流部

※写真出典：北海道開発局



エゾマツ-トドマツ群落



クマタカ



ハナカジカ

写真 2-9 沙流川上流部の動植物

(2) 中流部の自然環境

日高町日高地区の市街部から二風谷ダムに至るまでの中流部は、河岸段丘の発達が顕著であり、上流部に比べ河床勾配も緩やかになり、流れが穏やかで河床堆積砂利も多く、瀬と淵がみられるようになる。

周辺植生は、段丘上の平地が畑地、牧草地、水田として利用されているほか、山地斜面にはミズナラ林やカラマツ植林が分布する。河道内の植生は、山地斜面にミズナラ・エゾイタヤ林が分布するほか、河川沿い低地にエゾノキヌヤナギ・オノエヤナギ群集、タチヤナギ等からなるヤナギ林やヤナギ低木林が分布する。このほか、砂州上にはクサヨシ、シロバナシナガワハギ等からなる草本群落が見られる。哺乳類は、キタキツネ、エゾシカ等が生息し、鳥類は、オオタカ、ハヤブサをはじめ、樹林ではエナガ等が、草原ではホオジロが、河川等、水域ではカワセミ、カワアイサが生息している。両生類・爬虫類は、エゾサンショウウオ、エゾアカガエル等が林縁部や沢地等で確認されている。昆虫類は、河川周辺に多くみられるアオゴミムシのほか、樹林地に多いマイマイカブリ北海道亜種等もみられる。魚類は、ダム湖ではコイやギンブナが、河川ではフクドジョウやトミヨ等が生息し、サクラマス等が遡上する。

支川の額平川では、サクラマスの遡上が見られ、貴重な産卵床となっている。



写真 2-10 沙流川中流部

※写真出典：北海道開発局



エゾノキヌヤナギ・オノエヤナギ群集



ハヤブサ



サクラマス

写真 2-11 沙流川中流部の動植物

(3) 下流部の自然環境

二風谷ダムから河口に至るまでの下流部は、高位段丘がみられ、右岸側主体に堤防が続き、河口付近は扇状地形で両岸に堤防が設けられている。河床部は、河床堆積砂利が多くなり瀬と淵が連続する。周辺の段丘面は水田・畑地・牧草地として利用されており、自然性の高い植生は、河道付近に多くみられる。

高水敷は、採草地・放牧地として利用されており、その河道側にヤナギ高木林、低木林等の樹林地やオオイタドリ、オギ等の乾性の草地、ヨシ、ツルヨシ群落等の湿性の草地が分布し、アイヌ語のヨシに由来する地名が多くあるが、現在、ヨシの分布は極めて限られている。また、砂州等の自然裸地が多く分布し、河口部においては海辺の砂丘地に多い草本群落もみられる。

哺乳類は、エゾヤチネズミ、カラフトアカネズミ、キタキツネ、エゾシカ等が生息し、鳥類は、オオタカ、ハイタカをはじめ、アオジ、ヒバリ、ノビタキ、コチドリ等が確認されている。また、水面や抽水植物群落は、アオサギ、マガモ等の水鳥が餌場等として利用している。両生類・爬虫類は、エゾアカガエルの成体や卵塊が確認されている。これらが本種の主要な生息地であることが考えられる。昆虫類は、アオゴミムシ等の河原や水域と関連が深い種がみられるほか、樹林地に多いマイマイカブリ北海道亜種等が生息している。

魚類は、淵ではコイ、ギンブナ等、瀬では、絶滅危惧種であるカワヤツメ、ウキゴリ等が生息するほか、ワンド等にはウグイ類の稚魚やトミヨが生息する。

また、沙流川はシシャモ、サクラマス等が遡上するとともに、シシャモのふ化事業やさけ・ます増殖事業が行われ、特に下流部は北海道の太平洋沿岸のみに分布しているシシャモの貴重な産卵床もみられる。



写真 2-12 沙流川下流部

※写真出典：北海道開発局



ツルヨシ群落



オオタカ



シシャモ

写真 2-13 沙流川下流部の動植物

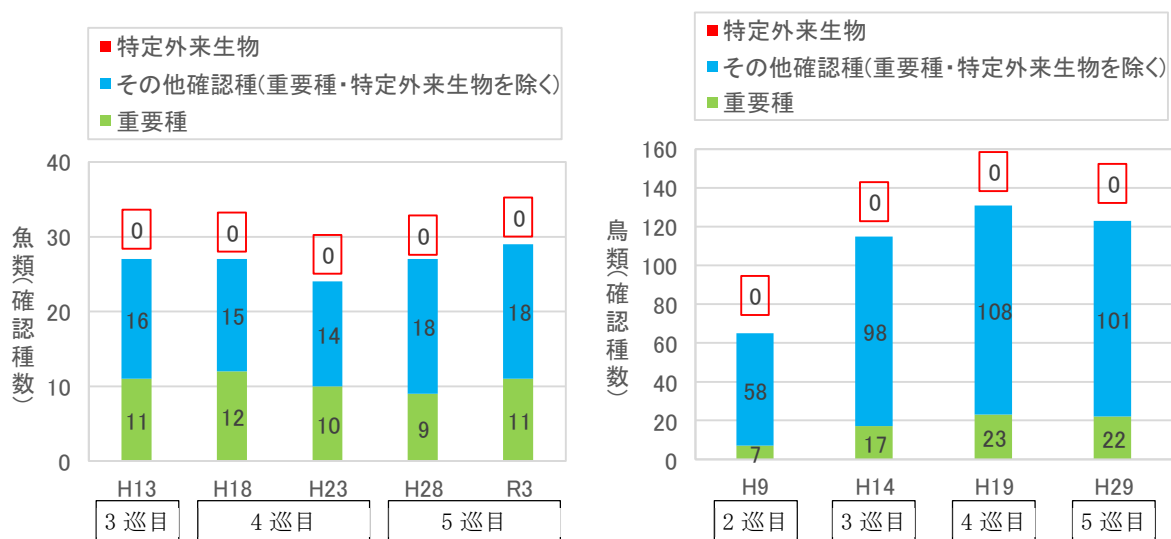
(4) 動植物の生息・生育・繁殖環境等の変遷

① 動植物の確認種数の変遷

魚類は、平成 28 年度（2016 年度）に大規模出水が発生したが、確認種数に大きな変化はみられなかった。

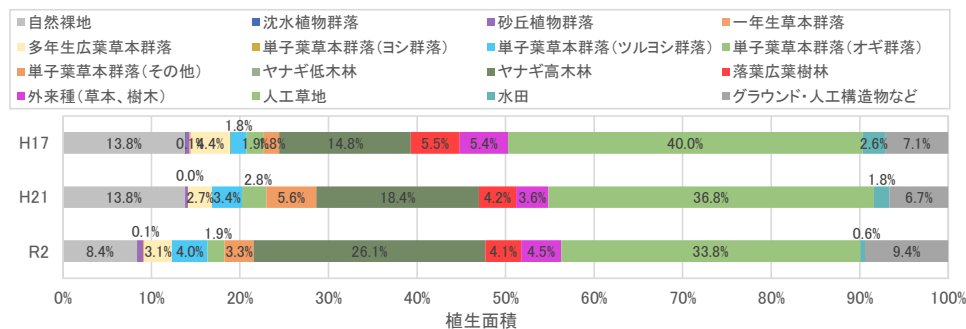
鳥類は、平成 29 年度（2017 年度）は 120 種以上と多くの種が確認されており、平成 9 年度（1997 年度）の確認種数と比較すると 2 倍程度に増加している。

河道内は、近年は自然裸地及び草本群落の減少傾向がみられる。



※出典：河川水辺の国勢調査

図 2-2 生物相の経年変化（左：魚類、右：鳥類）



※出典：河川水辺の国勢調査

図 2-3 河道内の植物群落とその内訳の変遷

② 沙流川の気温、水温の変化

沙流川の代表地点の年平均気温は、日高門別観測所において 45 年間で約 2℃、日高観測所において 44 年間で約 1.5℃、それぞれ上昇している。

年平均水温はいずれの観測所においても 48 年間で大きな変化はみられない。

平取地点の水温の経月変化をみると、概ね最低となる 1 月は 0～1℃で平均 0.2℃、最高となる 8 月は 16～28℃で平均 22.7℃となる。

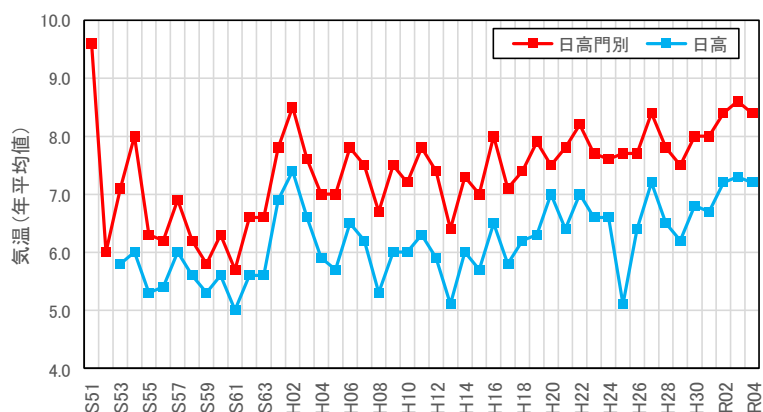


図 2-4 気温（年間平均値）の経年変化

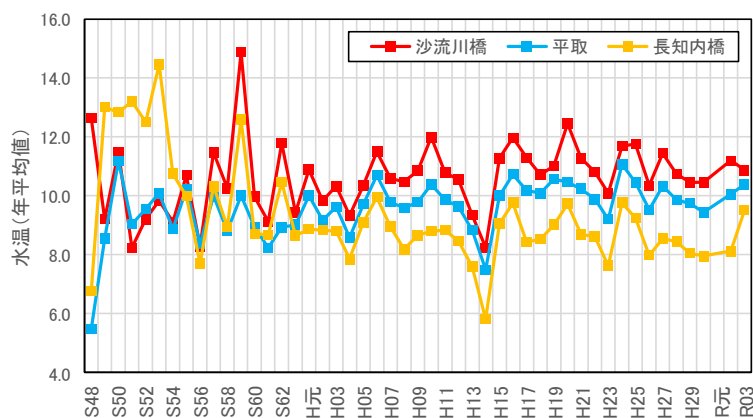


図 2-5 水温（年間平均値）の経年変化

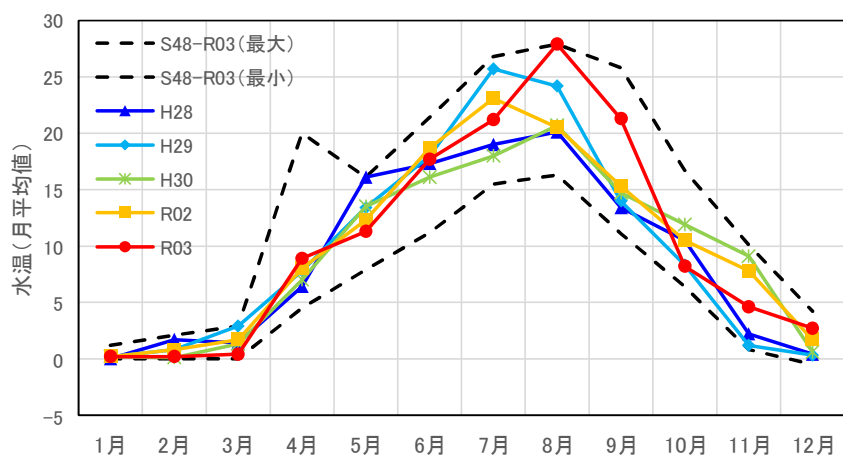


図 2-6 水温（平取地点）の経月変化

(5) 自然環境の現状

① 主要な自然環境要素の変化

沙流川における干潟や自然裸地の面積は、令和 2 年（2020 年）度時点で減少傾向にある。一方で、ワンド・たまりの面積に大きな変化はみられない。

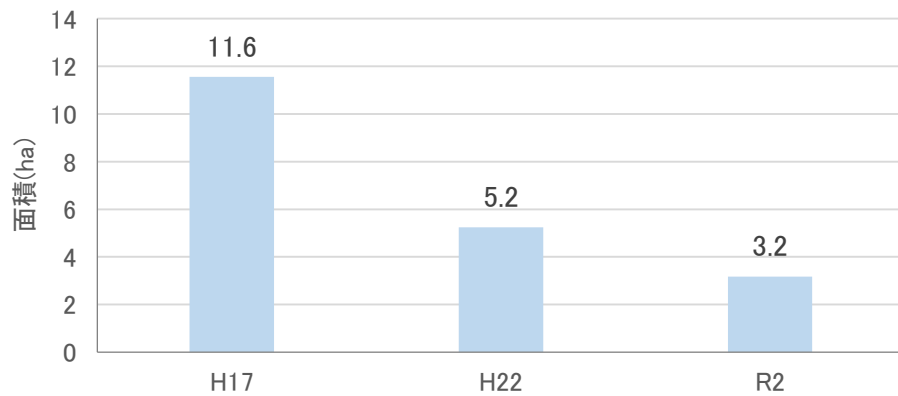


図 2-7 干潟面積の変遷

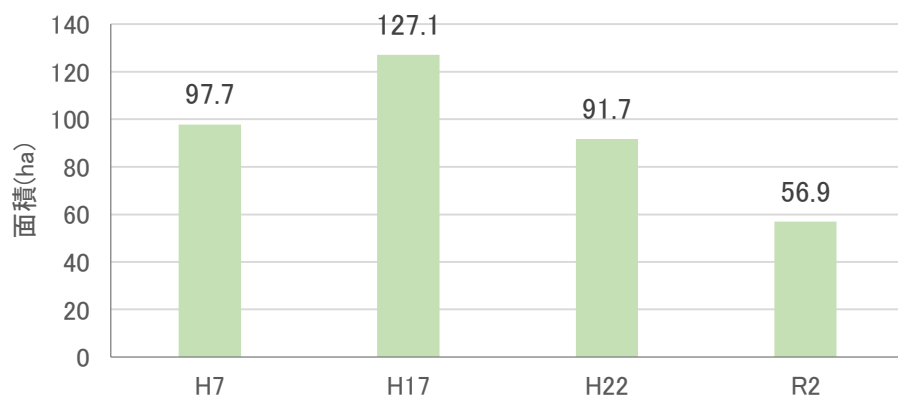


図 2-8 自然裸地面積の変遷

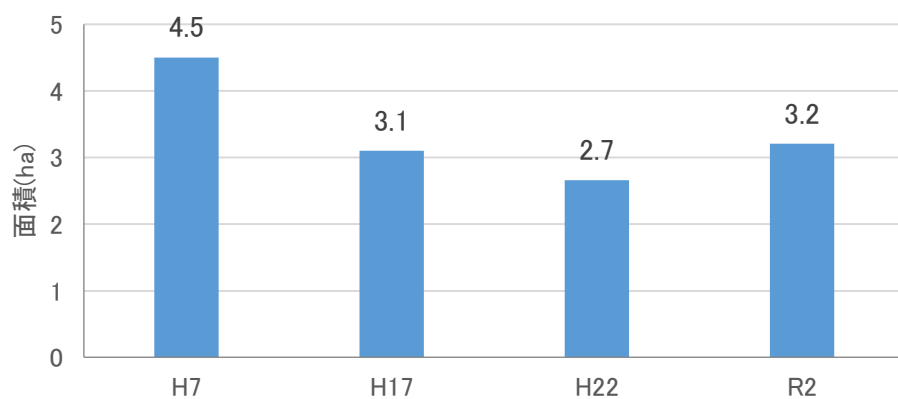


図 2-9 ワンド・たまり面積の変遷

② 外来種の確認状況

沙流川では、特定外来生物に指定されている、植物のオオハンゴンソウ、哺乳類のアライグマ、陸上昆虫類のセイヨウオオマルハナバチが確認されており、在来種やアイヌ文化の保全・継承活動に活用するためのアイヌ有用植物（ガマ・ヨシ等）の生息・生育・繁殖への影響が懸念される。



アライグマ



オオハンゴンソウ



セイヨウオオマルハナバチ

写真 2-14 外来生物

2-3 特徴的な河川景観や文化財等

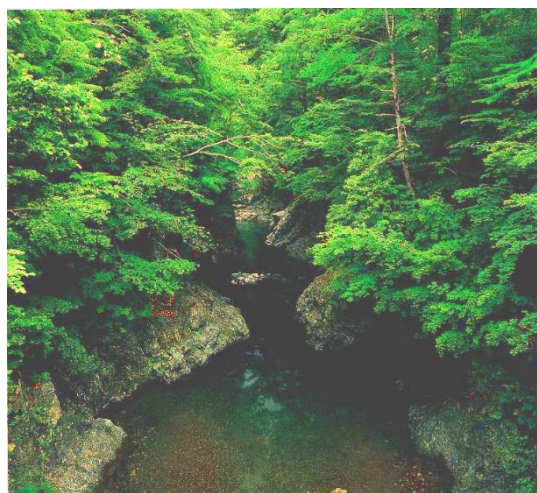
(1) 特徴的な河川景観

中・上流部は、渓谷地形と両側を覆う森林美・幌尻岳・チロロ岳・貫気別山の山岳景勝地等の自然景観と二風谷ダムにより創出された湖景観で構成される。特に、沙流川源流原始林は、日高山脈襟裳国定公園の一部で天然記念物に指定されている。このほか、紅葉や深緑の中を落ちるサンゴの滝、千呂露峡の峡谷や、スズランの群生地等が有名である。

にぶたに湖の右岸には、アイヌの人々の伝説にもなっているオプシヌプリ（穴があいている山）があり、夏至の日の夕方にはオプシヌプリの穴に太陽が沈む光景がみられる。

中・下流部は、朝霧に浮かぶ遠くの山々を背景に牧歌的な田園風景が広がり、このほか優駿の里の広大な牧野景観、市街地の街並み、河口の海岸景観、親水性に富んだ水際空間等で構成される。

また、流域内町村では四季を通じて多彩なイベントが開催され、住民が一体となって観光を盛り上げている。



日高町
緑の回廊・千呂露峡



平取町
スズランの群生地



平取町
オプシヌプリ



日高町
優駿の里

写真 2-15 特徴的な河川景観

※写真出典：北海道開発局

表 2-2(1) 主な観光対象

項目	町村名	名 称	概 要
自然	日高町	沙流川源流原始林	日本有数の清流となった沙流川の源流に広がる北海道冷温地帯上部に当たる代表的な原始林。日勝峠の日高側に位置し、日高山脈襟裳国定公園に属し、国の天然記念物に指定されている。トドマツ・エゾマツ・ダケカンバを交えた森はエゾシカやエゾライチョウ等の動物生息地になっている。一帯は鳥獣保護区にも指定されている。6月の新緑、夏の万緑、秋の紅葉と針葉樹の緑と広葉樹の緑や紅葉のコントラストが美しい。
		北戸蔦別岳	標高1912m。登り約7時間。初めこそ傾斜は緩く踏み後もはつきりしているが、次第に細く急になりコースも荒れてくる。上級者向き。
		チロロ岳	標高1880m。登り約8時間30分。ベンケヌーシ川曲がり沢、二ノ沢コース。2つの沢沿いの踏み跡をトレースする日高らしいコース。上級者向。
		沙流岳	標高1422m。登り30分。登山入門の山。晴れていれば、山頂から樽前山、羊蹄山、十勝連峰、トマムスキー場、十勝平野が、眺められる。
		北日高岳	標高751m。登り2時間。登山入門の山。晴れていれば山頂からタ張岳・十勝連峰を眺めることができる。
		沙流川溪谷	新緑・万緑・紅葉に飾られた沙流川溪谷は見物。轟淵、三岩橋、岩知志ダム付近が特に美しい。
		チロロの巨石	八鉱学園初代理事長栗林元次郎は鉱石収集を趣味とし、日高山脈の鉱石を掘り出すために千栄地区に通い、特にベンケユクトラシナイ浜から200tにおよぶ鉱石をとり沢口まで運んだが、それ以後は運ぶことができず、日高町に寄贈。この石は日本一の巨大な結晶片岩として知られる。地質学的に石英片岩といい、このような岩石は神居古潭帯の蛇紋岩中に見られ、チロロの巨岩も蛇紋岩中から運び出されたものであると思われる。
		さんご溪谷	溪谷&地層ウォッチングが楽しめる片道50分の散策路。このエリアは海底が隆起してでき、リップルマークと呼ばれる波跡の砂岩など珍しい地層が随所に見られる。名称の由来も、サンゴの化石が出土したこと由来。
		サンゴの滝	サンゴ溪谷ウォーキングコースにあり、冬は氷瀑となる。昭和15年に、クロム鉱山の鉱石運搬路造成に伴ってつくられた人工の滝。その後、昭和45年に滝付近から、六射サンゴの化石が発見され「サンゴの滝」と呼ばれるようになった。
		日勝園地	日勝峠の日勝トンネル手前にある穴場の絶景ポイント。広大な十勝平野を一望できる。
	平取町	幌尻岳	標高2,052m。日高山脈襟裳国定公園の中で最も高い山であることから、アイヌ語で「大きい山」を意味する「ポロ・シリ」として親しまれてきた山。毎年夏には一面高山植物のお花畑となる山頂付近のカール状大地や豊富な動植物群、山頂からは幾重にもなる日高山脈の山並みが一望できるなど、魅力あふれる山としてアルピニストたちに大いに人気がある。ポロ(大きい)シリ(山)の名が示すように、日高山脈の最高峰であり、氷河期に侵食によって形成された七つ沼カールなど、自然の驚異を実感できる。同名の山、特に十勝幌尻岳と区別するために日高幌尻岳の名で呼ばれることも。
		芽生すずらん群生地	ここ平取町幌尻岳のふもとの芽生(めむ)の野性すずらん群生地は約15haと日本一の広さを誇っている。現在は鑑賞路の拡幅や写真スポットの整備、ボランティアの方々の協力を得て、環境保全に努め、5月下旬～6月中旬での期間中のみ一般公開。
		にぶたに湖	二風谷ダムの完成で平成10年に誕生したダム湖。湖岸には、歴史上の人物の記念碑が点在する散策路・歴史の散歩道が整備されている。
		二風谷ダム	日高山脈を源とし、大平洋に注ぐ沙流川。その中流域に建設された二風谷ダムには魚道を整備し、ダム上流にも鮭が遡上できるようになっている。
その他自然	日高町	日勝園地展望台	十勝平野を見渡せる日勝峠のかくれた展望台。展望台一帯は日高山脈襟裳国定公園・沙流川源流原始林(国指定天然記念物)・鳥獣保護区に指定されている。トドマツ・エゾマツ・ダケカンバの広がる森林の中を散策できる小道も整備されている。
	平取町	幌尻山荘	幌尻山荘は、幌尻岳の登山道の中継地点(標高950m)にあり、多くの登山者に利用されています。7月から9月の3ヶ月間のみ利用可能。
		沙流郡平取町字芽生町営牧場沙流郡平取町字芽生町営牧場	緑の放牧場が美しく広がるここには、すずらん群生地に隣接し、名物のびらとり和牛が飼育されており、放牧風景もみられます。すずらんのやさしい香りと、詩情豊かな放牧風景は、北海道を代表する風物詩といえる。
公園	日高町	富川さるがわせせらぎ公園	人々に潤いと安らぎを与え、町の雄大な自然の恵み「沙流川」によりいっそう親しみ大切にしていこうと整備されたユニークな公園。
		神楽岡公園	日高神社に隣接する公園で、樹齢70年を超えるエゾヤマザクラをはじめ、町民有志が植えたエゾヤマザクラやエゾムラサキツツジが山全体を桜色に染める。
		富川自然公園	国道235号沿いの桜が立ち並ぶ公園。
	平取町	義経公園	義経神社境内を中心とした自然の豊かな公園。春は桜・ツツジ、秋にはひととき見事な紅葉も楽しめ、展望台からは沙流川、日高山脈の美しい山並みを見ることができる、さわやかで風光明媚な町民憩いの公園。
観光拠点	日高町	道の駅「樹海ロード日高」	札幌と道東を結ぶ国道274号と、旭川方面と浦河方面を結ぶ国道237号の分岐点にあり、峠の出入り口にあたる場所として多くの方々の憩いの場となっている道の駅。
	平取町	山の駅ほろしり館	国道237号振内市街地にある観光案内施設で、地場産品の販売や写真・絵画の展示なども行っている。地域情報の発信基地として、観光案内・サービス施設・トイレ・駐車場・バスターミナル機能を備えた休憩施設。施設内では、平取町の特産品を販売している。
温泉	日高町	門別温泉 とねっこの湯	たっぷりのお湯が湧出する豊かなかけ流しの天然温泉。まるでコーヒーのような色をしたナトリウム塩化物泉の大浴場と露天風呂、月替わりで効果が楽しめる薬湯やサウナも完備。
		沙流川温泉 ひだか高原荘	スキー場に近接し、自然の中でゆったりとくつろげる温泉宿泊施設。名物山女魚料理をはじめ、四季おりおりの味覚が食卓にあがる。夜は澄みきった空気の中美しい星空を仰ぐのがおすすめ。
	平取町	びらとり温泉 ゆから	銘石を配した露天風呂や身体芯まで温まる炭酸泉が好評。施設内にはアイヌ文化の特色である伝統的工芸品やアイヌ文様が随所に装飾され、また、レストランでは特産の「びらとり和牛」や「びらとりトマト」など地元食材を使った料理を提供。

※出典：北海道ひだか観光ナビ、日高町ウェブサイト

平取町ウェブサイト、二風谷アイヌ文化博物館ウェブサイト

表 2-2(2) 主な観光対象

項目	町村名	名 称	概 要
歴史・文化	日高町	日高町立門別図書館郷土資料館	開架、閉架あわせて10万冊の図書収蔵スペースのほか、大昔のもんべつ、沙流川と自然など10テーマで構成する常設展示室、AVコーナーを擁する生涯学習の拠点。
		日高山脈博物館	日高山脈に関するあらゆる資料が展示されている自然史博物館。登山史・登山インフォメーション、日高山脈の地質、岩石、日高山脈の自然の紹介など。道の駅に隣接。
		目曲久助の入地跡	日高地域開祖の碑。明治38年9月、岩手県人目曲久助がこの地に居を構え、日高地域開拓の基礎を築いた。「爾來春国秋雨六十余年、住時の苦難を偲び、町民相計りこの碑を建立する」。
	平取町	平取町アイヌ文化情報センター（二風谷工芸館）	平取町におけるアイヌ文化振興の拠点。館内には2013年に北海道で初めて経済産業省の「伝統工芸品」に指定された、「二風谷イタ」（盆）と「二風谷アットゥシ」（樹皮の反物）をはじめとする工芸品や、一般の書店では手に入りづらい書籍も販売されている。ご希望の方には、木彫や刺繍を体験することができる。
		萱野茂 二風谷アイヌ資料館	萱野茂氏が館長として、40年にわたって収集したアイヌ民具をはじめ、世界の先住民族の民具や絵画など計千点以上を展示。暮らしに息づく思想や信仰をも知ることができる大変興味深い資料館。
		二風谷アイヌ文化博物館	独特の外観が目を引き「二風谷アイヌ文化博物館」は、貴重なアイヌ文化を正しく受け継ぎ、未来へと伝えていくことをコンセプトとして建設された。館内は3つのブースにわけられ、人間と神と自然(大地)が一体となって営まれるアイヌの暮らしと文化をそれぞれの側面から伝え、視覚・聴覚をフルに使って楽しめるよう工夫されている。民具や祭事品などの展示資料のほか、文字がなく口承文化として伝えられるユカラ「英雄事詩」もビデオステージで実際に聞くことが出来る。
		平取町アイヌ工芸伝承館 ウレシパ	伝統を受け継ぐ工芸家に加えて、工芸の経験有無にとらわれずに、誰もが工芸体験ができる。伝統的な男の手しごと、女の手しごとのスペースのほか、レーザー加工機などの最新の機器や日曜大工の機器も揃っており、様々なプログラムを体験できる。
		二風谷コタン空間	二風谷コタンには、アイヌ文化関連施設が集約している。中には、平取町立アイヌ文化博物館や沙流川歴史館、平取町アイヌ文化情報センター等の施設の他、多くのチセ(家)が復元されている。アイヌ文化を学び、体験することが出来る空間。
		オブシヌプリ	沙流川を代表するアイヌ伝承地。国道237号カンカン退避所から見て沙流川対岸の山は、アイヌの神様オキクルミが技くらべの時に、ヨモギの矢で岩山を射抜いたという穴がある。昔は本当に丸い穴になっていたが、いつしか崩落して凹みになってしまったと言われている。夏至の日を中心に前後の数日間、オブシヌプリの凹みに沈む夕日を見ることが出来る。町内外からたくさんの方が集まる。
		義経神社	北海道に数々の伝説を残したといわれる源義経公の御神像が安置されている歴史ある神社。毎年8月には例大祭が行われる。境内を中心に公園として整備され、春は桜やツツジが咲き、秋は見事な紅葉となる名所。風光明媚な場所、公園内には義経資料館も。
		義経資料館	源義経公が平泉の戦いを逃れ弁慶ら主従共々北海道へ渡ってきたという北方伝説の内容と全国に残っている義経伝説100選も展示しており、英雄義経公を知る貴重な資料館。
		旧マンロー邸	英国人考古学者・人類学者のニール・ゴードン・マンロー博士は、アイヌの生活風俗研究のために二風谷に移住し、研究の傍ら医者としての奉仕活動に生涯を捧げた。昭和17年の永眠後、住宅兼病院であったここは記念館として保存され、現在北海道大学へ寄贈され、北方文化の研究に活用されている。
		沙流川歴史館	沙流川流域の自然と歴史に関する学習機会の場を提供するため、二風谷ダム建設工事や治水、利水及び沙流川流域の自然等の資料・情報を収集・保存・展示している。
		振内鉄道記念館	旧国鉄富内線の歴史を伝える資料を展示。公園内にはD51 蒸気機関車や客車が展示されており、ライダーハウスとしても利用できる。
		金田一京助歌碑	国語学者である金田一京助がアイヌ語研究のため来町した際に詠んだ詩を記念の碑にしたもの。「物を云わじ声を出さじ石はただ全身をもって己を語る」という詩が刻まれている。萱野茂二風谷アイヌ文化資料館前の静かな林の中にある。
レクリエーション	日高町	門別競馬場	北海道営の地方競馬「ホッカイドウ競馬」を開催する競馬場。地方競馬場の中でも最大級のコース規格を有する。
		日高沙流川オートキャンプ場	日高山脈のふもと、沙流川沿いに広がるキャンプ場。敷地面積は22万平方メートルもあり、川遊びや森林浴が堪能できます。オートサイト103、フリーテントサイト100。バーベキューハウス、バンガロー、炊事棟などもあり。ドッグランも完備しており、ペット同伴の利用も可能。
		日高国際スキー場	日高地方唯一の本格派スキー場。変化に富んだコースをダイナミックに滑ることができる。スノーボードも利用可能で、初心者用、上級者用のコースがある。また、ソリコースもあり、小さな子供も楽しめる。シーズン中は、スキー大会などの各種イベントも開催。リフト4基。
		国立日高青少年自然の家	日高青少年自然の家では、豊かな自然と充実した施設で、自然体験やスポーツ・アウトドア活動、クラフトなどの体験活動や各種研修を行なうことができる。活動に必要な用具の貸し出しや研修室、食堂も完備しており、学校利用の他、成人の利用も可能で家族やサークル、企業研修でも利用できる。
		とねっこ広場	「星の夢」と題されたオブジェが目を引き「とねっこ広場」は「とねっこ館」に隣接しており、ジョギングが楽しめる敷路やイベント広場などに訪れた人を和ませる癒しの空間。
		日高移住生活体験ハウス	移住・季節移住を検討していただくための生活体験設備。四季折々の自然が実感できる。郊外の本造中2階建(第1ハウス)、市街地にほど近い平屋建(第2～6ハウス)の6棟があり、全棟水洗トイレ・ユニットバス完備。TV・冷蔵庫・洗濯機・ガスコンロ・電子レンジ等が配備され、オプションでインターネットが使える。第1～4ハウスはペット同伴可。
		ひだからエコウォーク	日高地域の歴史や自然を町民ガイドと巡るガイドツアー。開拓の歴史を学べるほか、希少な日高翡翠に巡り会えるかも。
		O-K RANCH	日高管内で唯一のウエスタンスタイルの乗馬施設。トレッキング、レッスン、エンデュランス。
		北のうまや	日高町千栄地区で乗馬が楽しめる施設。安価な値段設定で大自然を感じながら気軽に馬と触れ合える。
		アラビアンホースプランテーション井上牧場	道の駅「樹海ロード日高」より車で10分、キャンプ場や温泉も近い外乗り専門の乗馬施設。純血アラブの繁殖、育成、訓練をしている牧場。長距離外乗は、標高差約100mの起伏に富んだコースを楽しむ。

※出典：北海道ひだか観光ナビ、日高町ウェブサイト
平取町ウェブサイト、二風谷アイヌ文化博物館ウェブサイト

表 2-2(3) 主な観光対象

項目	町村名	名 称	概 要
レクリエーション	日高町	北海道アウトドアアドベンチャーズ(HOA)	1997年に設立。廃校となった旧千栄小学校をベースに、ユニークで国際色豊かなガイドとともに、ラフティング、ブリッジスイングなどといった大自然のアクティビティを思う存分楽しむことが出来る。
		自然考房 NATURE DESIGNING	少人数対象の自然体験アクティビティやネイチャーガイドの他、団体向けの各種プログラム指導も可能。四季を通じて日高ならではの体験を提供。
		ひだか木もれび農園	週末を家族とともに、土に触れる農作業で汗を流し、日高の自然に親しみ収穫を体験できる。休憩ロビー、あずまやあり。
		つり掘いざわ	日本有数の清流「沙流川」流域で養殖した山女魚や虹鱒を釣って、その場で塩焼きや刺身でたべることができる。
	平取町	とよぬか山荘	2008年に閉校となった学校を利用した宿泊施設。幌尻山荘へのアクセスが最短の宿泊施設となっており、シャトルバスの発着地にもなっているため、天気や沢の水量等登山に関する情報提供や悪天の連泊等フレキシブルに対応。多くの登山者が利用する。
		二風谷ファミリーランド	25ha余りの広大な用地に、キャンプ場・パークゴルフ場やたくさんのアトラクションがあり、自然の中で自由に楽しめる「遊びの自由空間」。
		ニセウ・エコランド	ゆったりとしたスペースを確保し、マイカーやキャンピングカーで、乗り入れることができるキャンプ場を中心に、アウトドアライフを満喫するための快適施設が整う。パークゴルフやフィッシングなどが楽しめるほか、野生ホテルの観賞もできる。
		釣り 仁世宇園	日本一の清流・沙流川の支流ニセウ川で育てたヤマメを釣りほりに放しているため、とても活きが良くおいしい。釣りたての山女魚をその場で調理できる。
イベント	日高町	ひだか樹魂まつり	昭和46年、大きな桂の木に「樹魂竜」をあしらひ街の中を練り歩いたのが、「樹魂まつり」の始まり。大昔から日高山脈に棲むという伝説の竜を守護神として、森の樹木に感謝を捧げ、竜により守られてきた日高の山々の樹木の魂を「樹魂まつり」とおとして後世に受け継いでいる。誰でも参加・体験できるイベントとして多くの人に親しまれ、地場産品を含むうまいもの市、伝統芸能やステージ演目、日高国際スキー場のゲレンデから打ち上げられる大迫力の花火大会など様々な催しが楽しめる。
		日高国際スキー場フェスティバル	日高国際スキー場に道内で活躍するキッチンカーが集い、自慢のグルメを提供するほか、町特産品の販売ブースもある。
		ありがとうフェスティバル	日高国際スキー場来場者への感謝祭。豪華景品が当たる子供宝探、地場産品が当たるありがとう抽選会、子供に大人気のスノーラフティング、キッチンカー等によるうまいもの市など。
		門別ししゃも祭り	日高町の特産である「ししゃも」は10月中旬から下旬にかけ、産卵のために沙流川へ遡上する。「門別ししゃも祭り」は、旬の「ししゃも」を味わえる伝統的なイベント。
	平取町	すずらん観賞会	幌尻岳のふもとの野性すずらん群生地は約15haと日本一の広さを誇る。すずらんは平取町の町花でもあり、初夏の詩情を伝える可愛らしい姿と香りは北海道の野の花の代表の1つとして知られている。また、5月下旬～6月上旬に開催される「すずらん観賞会」では、期間限定で一般開放され小鳥のさえずりを聞きながら初夏の平取町を楽しむことができる。
		幌尻まつり	重厚な音で迫力のある「幌尻太鼓」で幕を開けるこのお祭りは、地元の特産や「びらとり和牛」が味わえるほか、清流で育ったヤマメのつかみ取り大会、各種のユニークなイベントやステージショーが行われ、地元の夏の風物詩と言えるイベント。
		義経神社例大祭	白装束を身にまとい、神輿を担ぐ伝統の義経神社例大祭は、例年8月14日から16日に行われる。神社境内には、子ども相撲や盆踊りなどの行事のほか各種の露店もあり、情緒あふれる平取町の夏のお祭り。
		チブサンケ	アイヌ語でチブサンケとは「舟おろし」を意味し、古来から伝わる技法で作られた舟の進水の儀式。沙流川で行われる伝統行事で、アイヌの人々の生活習慣がしのばれる興味深い行事。例年、アイヌ文化の伝統行事の1つであるチブサンケを体験しようと多くの観光客が参加する。
		びらとり食の祭典	自然や恵みに感謝する食の祭典で、会場には美味しいものやフワフワなど大人も子どもも楽しめる。平取町の特産品である「びらとりトマト」「びらとり和牛」「びらとり黒豚」を存分に味わえる町内最大のイベント。会場にはさまざまな出店のほか、バーベキューコーナー、ステージイベントや特産品の即売など、活気あふれるお祭り。
		全道PKグランプリ	雪上のグラウンドで行うPK合戦。小学生から大人まで男女問わず気軽に参加ができ、冬の一日を満喫できるイベントとして毎年100チーム以上が参加する平取町に定着したイベント。昼食には、びらとり和牛を炭焼きバーベキューで賞味することができ、優勝チームには、特選びらとり和牛が贈られる。
その他	平取町	縁結び夫婦石	昭和48年、49年頃に沙流川上流の、それぞれ別の場所で発見された二つの石は、もともととは一つの大きな石。数千年の歳月を経て一体となったことから縁結びのご利益のある「縁結び夫婦石」として奉られるようになった。
		JA平取町野菜直売店	平取町の新鮮な野菜を販売している直売所。特産品であるトマトジュースをはじめ、平取産米・青果物・苗ものなどを取り扱っている。全国への発送もできる。
		びらとりハム	2021年4月オープン注目店。ハム・ソーセージの工場直営店。びらとりハムで作るハム・ソーセージは、厳選された良質な北海道産豚肉を使用し、本場ドイツ仕込みの製法と職人によって充分に時間と手間をかけ美味しさを引き出した。ボリューム満点のあらびきフランクやボロニアソーセージのほか、ジューシーなベーコンブロックもおすすめ。

※出典：北海道ひだか観光ナビ、日高町ウェブサイト
平取町ウェブサイト、二風谷アイヌ文化博物館ウェブサイト

(2) 文化財・史跡

沙流川流域に存在する歴史的に重要な文化財、史跡は下表に示す通り、国指定で 10 件、道指定が 2 件、町指定が 1 件である。

平取町は、「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が文化財の価値として特に重要な「重要文化財的景観」として、平成 19 年（2007 年）7 月に北海道で初めて選定された地域となっている。

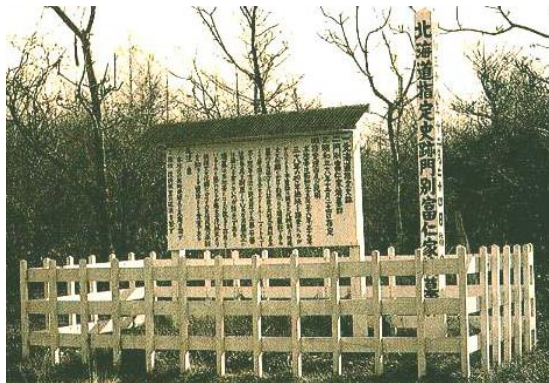
表 2-3(1) 沙流川流域の指定文化財の現況

種類	名 称	所在及び指定年月日	概 要
国指定	【重要無形民族文化財】 アイヌ古式舞踊	平取町 昭和 59 年 1 月 29 日	アイヌの人々によって伝承されてきた芸能で、特に信仰と芸能と生活が密着不離に結びついているところに特色があり、芸能史的な価値が高い。
	【重要有形民族文化財】 北海道二風谷及び周辺地域の アイヌ生活用具コレクション	平取町 平成 14 年 2 月 12 日	萱野茂氏が二風谷を中心に収集された資料で、由来が比較的明確であり、生活用具が諸分野の全般にわたって網羅的に収集されており、伝統的な暮らしの全容や地域の特徴を知ることができる。
	【登録有形文化財】 北海道大学文学部二風谷研究室（旧マンロー邸）	平取町 平成 12 年 4 月 28 日	考古学・人類学者でもあった英国人医師 N.G. マンロー博士の旧邸宅兼診療所。現在は北海道大学へ寄贈され、北方文化の研究等に活用されている。
	【登録有形文化財】 飯田家住宅座敷棟	日高町 平成 26 年 12 月 19 日	明治 44 年(1911 年)、皇太子（後の大正天皇）行啓時の宿所として旧門別町に建てられた座敷二室と東面廊下の主体部を移築し、増築された。建物の軸部にヒノキの良材をふんだんに使い、折上格天井、トコ、付書院、建具、鍔金具等の内部造作は善美を尽くした気品ある意匠となる。
	【登録有形文化財】 飯田家住宅主屋	日高町 平成 27 年 11 月 17 日	明治 30 年代、豪商飯田信三隠居所として旧門別本町の現在地に建てられた。明治 42 年(1909 年)には、韓国皇太子宿所として 15 畳と 10 畳和室の和室を増築している。和式を基本としながらも応接用の洋間や洋窓を配するなど、和洋の意匠を取り混ぜた上質な住宅である。
	【史跡】 シベチャリ川流域チャシ跡群 及びアップツチャシ跡	日高町 平成 9 年 12 月 2 日	寛文 9 年(1669 年)のシャクシャインの戦いの砦として、重要な役割を果たしたといわれる新ひだか町シベチャリ川流域にある静内真歌のシベチャリチャシ跡、静内入船のホイナシリチャシ跡、同流域の静内目名のメナチャシ跡、静内農屋のオチリシチャシ跡、静内豊畑のルイオピラチャシ跡の 5 か所と日高町厚別川上流にある正和のアップツチャシ跡。
	【名勝】 ピリカノカ 幌尻岳（ポロシリ）	平取町 平成 25 年 10 月 17 日	ポロシルンカムイ（ポロシリのカムイ）の居城があるカムイミンタラ（カムイの庭）として神聖視される日高山脈の最高峰。山上にはト（沼）があり、白熊や海獣、へび、海鳥等の伝承がある。このトは、山頂付近の状況から七つ沼カールを指すと推定される。

表 2-3 (2) 沙流川流域の指定文化財の現況

種類	名 称	所在及び指定年月日	概 要
国 指 定	【名勝】 ピリカノカ オキクルミのチャシ及びムイ ノカ	平取町 平成 26 年 3 月 18 日	人文神オキクルミが降臨し、居城を構えたと伝えられる岩山。かつてはオキクルミの聖地として崇められ、付近の住民が通行するときは遠慮しながら歩いたとも言われている。隣接する丘陵の崖面にはオキクルミの妹(妻)がカムイの世界へ帰るときに忘れて行ったとされるムイノカ(箕・形象)がある。
	【天然記念物】 沙流川源流原始林	日高町 昭和 45 年 12 月 4 日	トドマツ、エゾマツを主とし、ダケカンバを交えた本道における冷温帯上部の代表的原生林。エゾシカ、エゾライチョウ等の動物の生息地。
	【重要文化的景観】 アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観	平取町 平成 19 年 7 月 16 日	アイヌ文化の諸要素を現在に至るまでとどめながら、開拓期以降の農林業に伴う土地利用がその上に展開することによって、多文化の重層としての様相を示す極めて重要な文化的景観である。
道 指 定	【有形文化財】 二風谷遺跡群出土品	平取町 平成 24 年 3 月 19 日	出土品は、北海道の 15 世紀から 17 世紀における生活実態を示すことから、その学術的価値は高く、当該期における北海道の歴史を考える上で指標となる。
	【史跡】 門別富仁家盛土墳墓群	日高町 昭和 38 年 12 月 24 日	約 2,000 年前の墓で、直径 1～1.5m、深さ 1 m 前後の円形。墓穴の中に遺体は手足を折り曲げた形で葬られていた形跡がある。肉体はほとんど土にかえっているが、首飾りはシベリア産コハクといわれ、その経緯については興味深い。
町 指 定	【天然記念物】 芽生すずらん群生地	平取町 平成 8 年 4 月 1 日	15 ヘクタールの広さを有するスズランの自生地であり、保護すべき優れた自然遺産である。

※出典：北海道教育庁日高教育局ウェブサイト



門別富仁家盛土墳墓群・北海道指定史跡(旧門別町史) 沙流川源流原始林

写真 2-16 沙流川流域の指定文化財

※写真出典：鶴川沙流川治水史

(3) 工芸品

沙流川流域で製作される伝統的工芸品は、下表に示す通り、2品である。

表 2-4 沙流川流域の伝統的工芸品

種類	名 称	所在及び指定年月日	概 要
織物	二風谷アットゥシ	平取町 平成 25 年 3 月 8 日	沙流川流域に古くから伝わり、江戸時代には沙流川流域の物産として他地域との取引が行われていた。 二風谷アットゥシは、着物や小物類等に使用され、百年以上前に使用されていた道具とほぼ同様の道具が現在も使用されている。
木工品・竹工品	二風谷イタ	平取町 平成 25 年 3 月 8 日	二風谷イタは百年以上前から沙流川流域にすむアイヌの人々によって受け継がれてきた。19 世紀半ばには、この地域から半月盆や丸盆が献上されたという記録が残っている。

2-4 河川環境を取り巻く背景

河川の利用については、軽種馬が基幹産業であり大規模経営がなされていることから、高水敷の広い空間を採草放牧地として広く活用しているところである。また、沙流川流域の日高町の市街地周辺においては、自然のうるおいとやすらぎを得られる貴重なオープンスペースとして、広場・公園・緑地等、多目的に利用されている。

また、沙流川の河川空間は、アイヌ文化伝承の場、河川敷、牧場風景を望むフットパスツアー等で利用されており、特に、二風谷ダム周辺では、アイヌ伝統文化であるチャサンケが毎年行われ、流域内はもとより、多くの観光客が来訪している。

さらに、平取町では、地域に息づく歴史・文化を川から発信するための「平取町かわまちづくり」が進められ、文化伝承の場やフットパス等、広域の水辺空間を一体とした活用が推進されている。また、下流域の日高町門別地区では、高水敷にせせらぎ公園やパークゴルフ場が整備され、多くの利用者が訪れているほか、毎年10月に町を代表する特産品である「シシャモ」が味わえる人気のイベントである「門別ししゃも祭り」が開催されている。

このように沙流川流域では、各地域の特色を活かし、まちづくりと一体となった整備や河川利用がなされ、環境学習や体験イベントといった水辺空間の利用を通じて、沙流川の魅力や川を軸としたアイヌの歴史・文化をはじめとした発信・継承等、河川空間、水辺空間を活用した新たな取組も積極的に行われている。

また、地域連携を深めるための情報交換、人的交流の促進を目的として、河川に精通する団体等により、河川の維持、河川環境保全等の河川管理につながる活動が自発的に行われるなど、様々な住民活動が展開されている。流域における代表的な活動としては、地域住民や町内会、行政機関とともに年2回実施している「河川清掃活動」等が挙げられる。



フットパスツアー



河川清掃活動



チャサンケ



環境学習

写真 2-17 河川環境を取り巻く背景

※写真出典：北海道開発局

2-5 自然公園等の指定状況

沙流川流域には、自然環境に恵まれた地域が多く存在しており、これらの保護・保全・管理が図られている。

沙流川流域における自然公園等の法令指定状況は、以下のとおりである。

(1) 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律に基づく鳥獣保護区

3ヶ所で鳥獣保護区が指定されている。

表 2-5 各種保護地区指定一覧

(鳥獣保護区等区域)

整理番号	市町村	鳥獣保護区名	区 域	存続期間	備 考
67	日高町	日勝	沙流郡日高町に所在する国有林野日高北部森林管理署 68 林班、69 林班（ロ小班を除く）及び 70 林班から 72 林班までの区域 [特保]道指定日勝鳥獣保護区のうち、国有林野日高北部森林管理署 69 林班い、ろ及びイ小班の区域	H22. 10. 1 ～H42. 9. 30 (H22. 9. 28 第 673 号 [特保 第 674 号])	森林鳥獣生息地 877ha [特保 135ha]
68	日高町	ホロカウシヤップ	沙流郡日高町に所在する国有林日高北部森林管理署 14 林班から 18 林班までの区域 [特保]道指定ホロカウシヤップ鳥獣保護区のうち、国有林日高北部森林管理署 15 林班の区域	R4. 10. 1～ R24. 9. 30 (R4. 9 告知予定)	森林鳥獣生息地 562ha [特保 62ha]
69	平取町	平取	沙流郡平取町本町 112 番 2、17、116 番 26、6、35 から 37 まで、39 から 47 まで、50、118 番 1 から 5 まで、119 番 1、2、120 番 1、4、15 及び平取町道本町公園線の区域	R3. 10. 1～ R13. 9. 30 (R3. 9. 28 第 631 号)	身近な鳥獣生息地 54ha

※出典：令和 4 年度鳥獣保護区等位置図 別冊編（北海道）

(2) 国指定天然記念物

名称：沙流川源流原始林

日高市街から、東北東に約 30km の地点の両側一帯に位置する。トドマツ、エゾマツを主とし、ダケカンバ等も交える。北海道の冷温帯上部の代表的原生林。エゾシカ、ナキウサギも生息している。

(3) 国定公園

名称：日高山脈襟裳国定公園

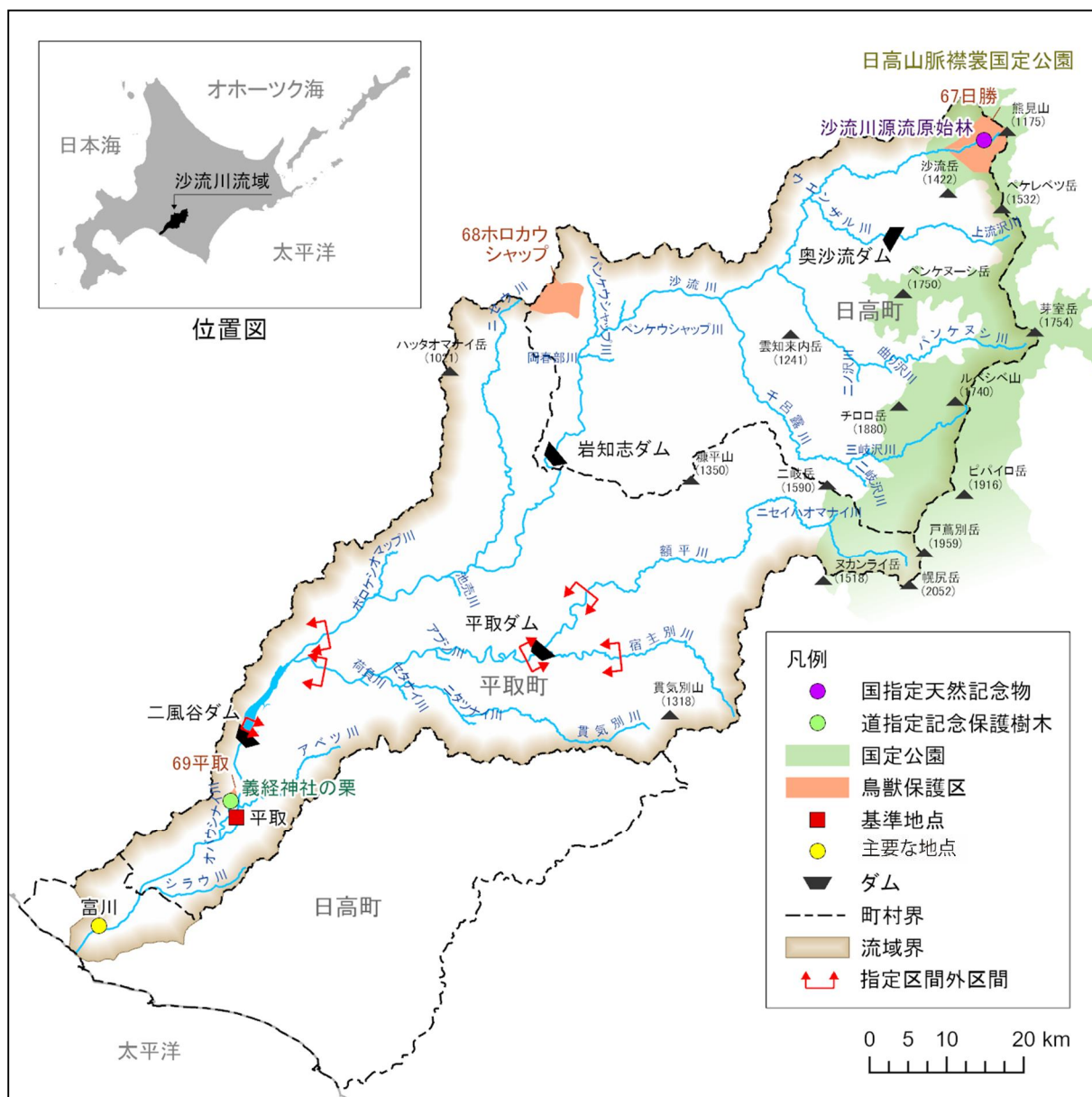
日高山脈襟裳国定公園（昭和 56 年（1981 年）10 月 1 日）は、北海道中南部の標高 1,500～2,000m 級の峻険な褶曲山脈である日高山脈と襟裳岬一帯の面積約 103,447ha の範囲で、高山植物や針葉樹林及びダケカンバ林等、自然性の高い植生が分布し、エゾヒグマ、エゾナキウサギ、高山チョウのカラフトルリシジミ等、多くの野生動物が生息している。

(4) 道指定 記念保護樹木

義経神社の栗

信仰対象の有無：信仰対象あり。

保護制度指定：自然環境保全地域



※国土数値情報（河川・湖沼・海岸線・行政区域・自然公園地域・鳥獣保護区）（国土交通省）を加工して作成
 ※出典：令和4年度鳥獣保護区等位置図 別冊編（北海道）
 記念保護樹木一覧（北海道環境生活部自然環境局）

図 2-10 沙流川流域における自然環境概要図

3. 流域の社会状況

3-1 土地利用

北海道統計書によると、平野部の主な利用は、平取町においては、田、畑、日高町では、田・畑のほか牧場に利用されている。

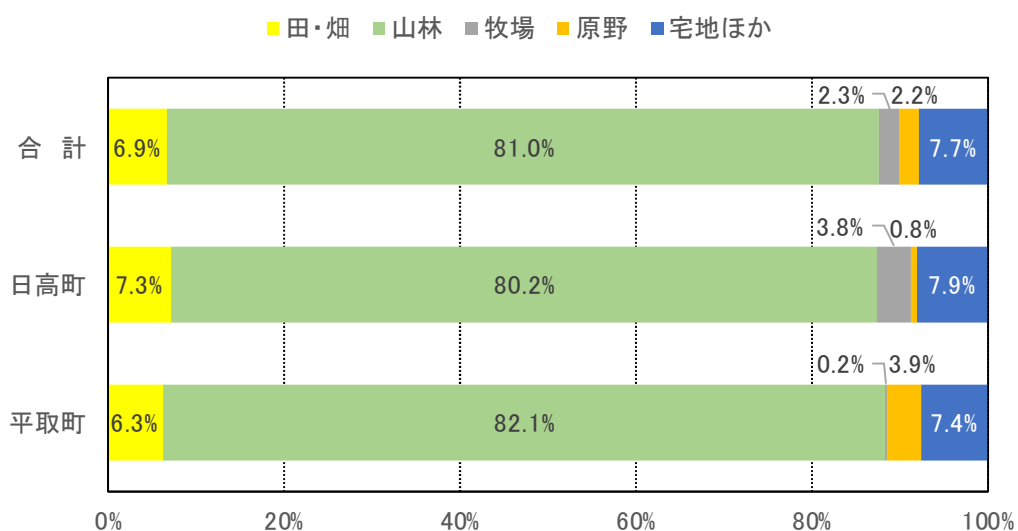
国土数値情報によると、沙流川流域の土地利用状況は以下の通りであり、山林の占める割合が約 89%で最も多く、続いて水田・畑等の農地が約 7%となっている。

表 3-1 日高町・平取町における土地利用状況

(単位:km²)

区 分	田	畑	宅地	池沼	山林	牧場	原野	雑種地	その他
日 高 町	16.59 (1.7%)	55.36 (5.6%)	8.75 (0.9%)	0.08 (0.0%)	795.80 (80.2%)	37.83 (3.8%)	8.34 (0.8%)	9.05 (0.9%)	60.35 (6.1%)
平 取 町	19.49 (2.6%)	27.66 (3.7%)	3.91 (0.5%)	0.10 (0.0%)	610.20 (82.1%)	1.48 (0.2%)	29.20 (3.9%)	5.30 (0.7%)	45.74 (6.2%)

※出典：北海道統計書（R5）（平成 29 年～令和 3 年値）



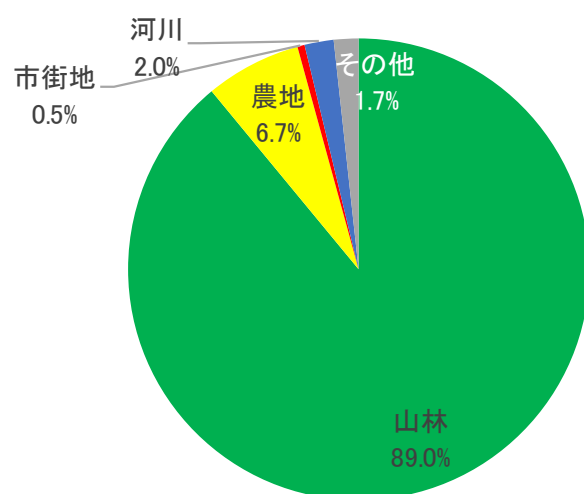
※出典：北海道統計書（R5）（平成 29 年～令和 3 年値）

図 3-1 日高町・平取町における土地利用状況

表 3-2 地目別土地利用の割合（沙流川流域）

	山林	農地	市街地	河川	その他
昭和51年	88.9%	6.4%	0.5%	1.5%	2.8%
平成9年	87.7%	7.3%	0.6%	1.6%	2.8%
平成21年	88.2%	6.9%	0.5%	1.7%	2.7%
平成28年	89.0%	6.7%	0.5%	2.0%	1.7%

※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（S51、H09、H21、H28）



※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（H28）

図 3-2 地目別土地利用の割合

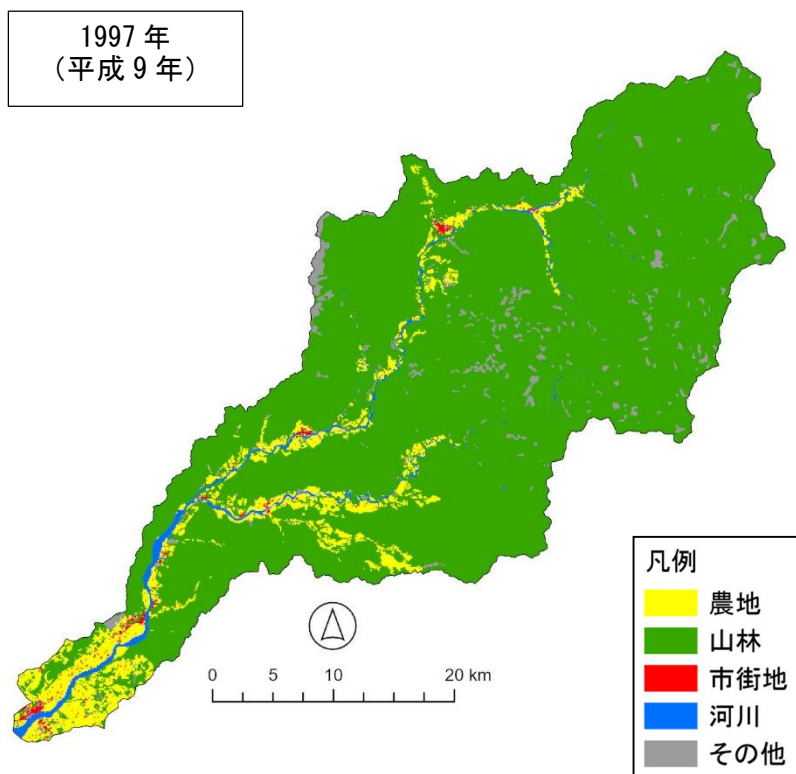
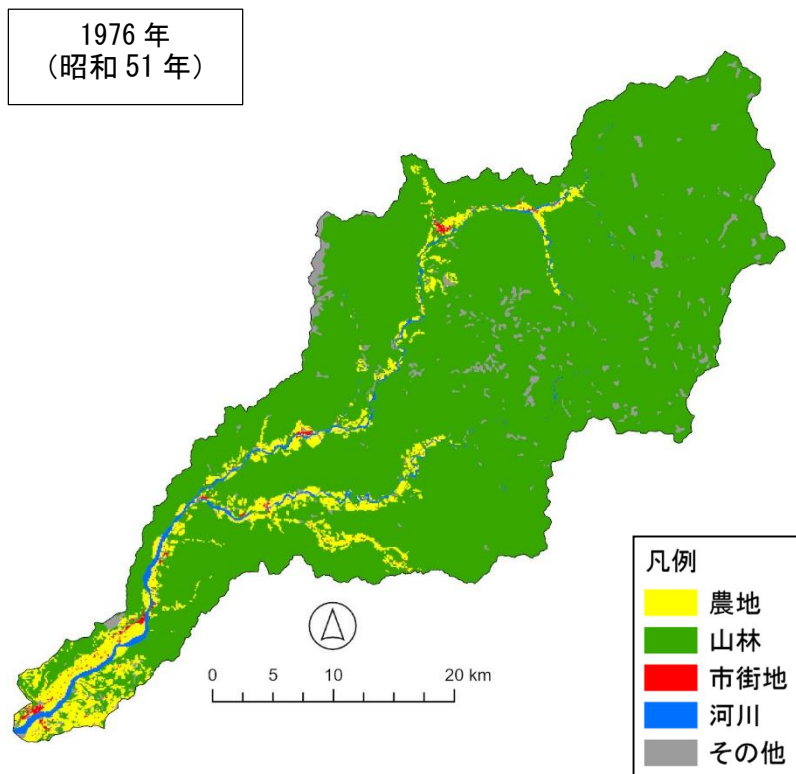


図 3-3 (1) 沙流川流域の土地利用の変遷

※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（S51、H09）

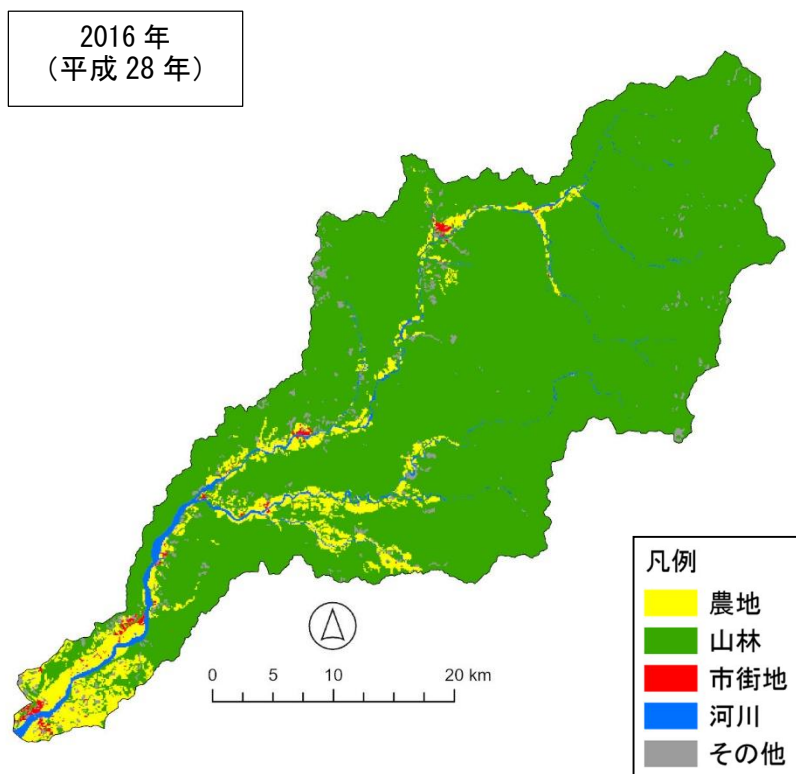
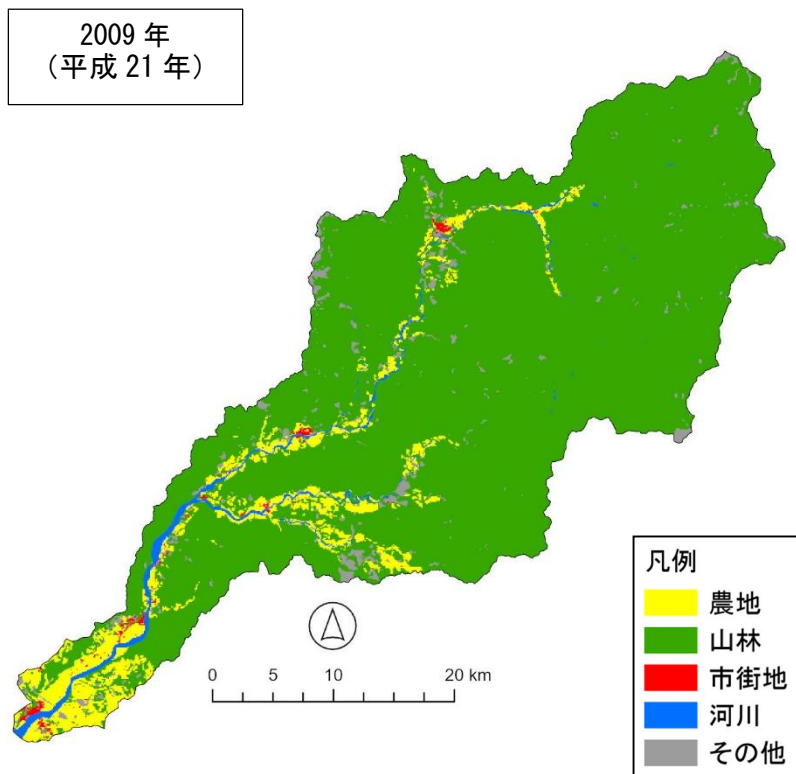


図 3-3 (2) 沙流川流域の土地利用の変遷

※出典：国土数値情報土地利用細分メッシュ（H21、H28）

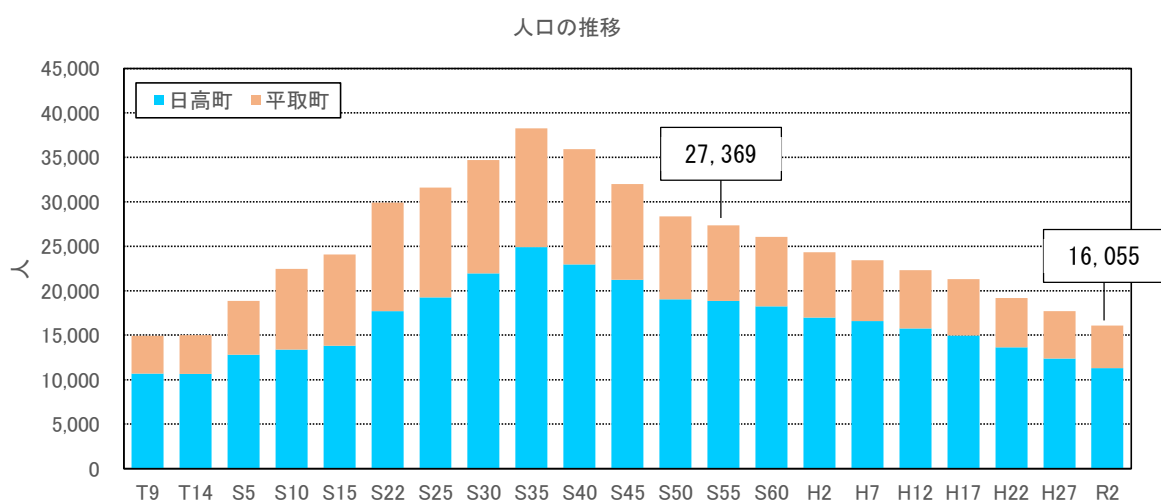
3-2 人口

流域の関係市町村は日高町・平取町の2町からなり、その流域にかかる2町の人口は、昭和55年（1980年）と令和2年（2020年）を比較すると、約2万7千人から約1万6千人へと減少し、高齢化率は10.0%から35.8%へと大幅に上昇している。

表 3-3 流域にかかる2町の概要

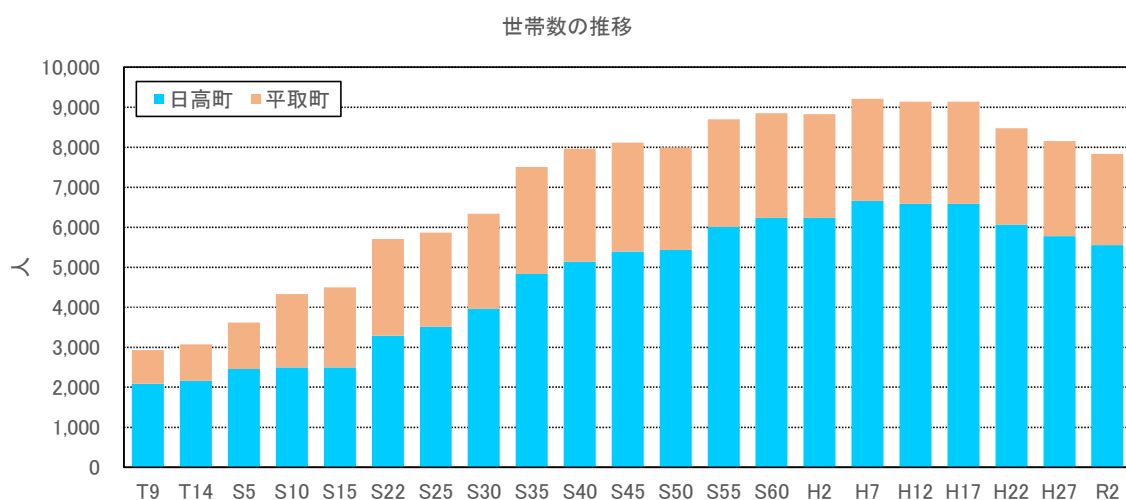
区 分	2町合計	日高町	平取町	流域内
面 積 (Km ²)	1,735	992	743	1,350
総 人 口 (人)	16,055	11,279	4,776	13,027
世 帯 数 (世帯)	7,840	5,552	2,288	5,771
人 口 密 度 (人/km ²)	18	11.4	6.4	9.6

※各町の集計は北海道統計書（R5）による、人口はR2国勢調査人口を採用。流域内は河川現況調査。



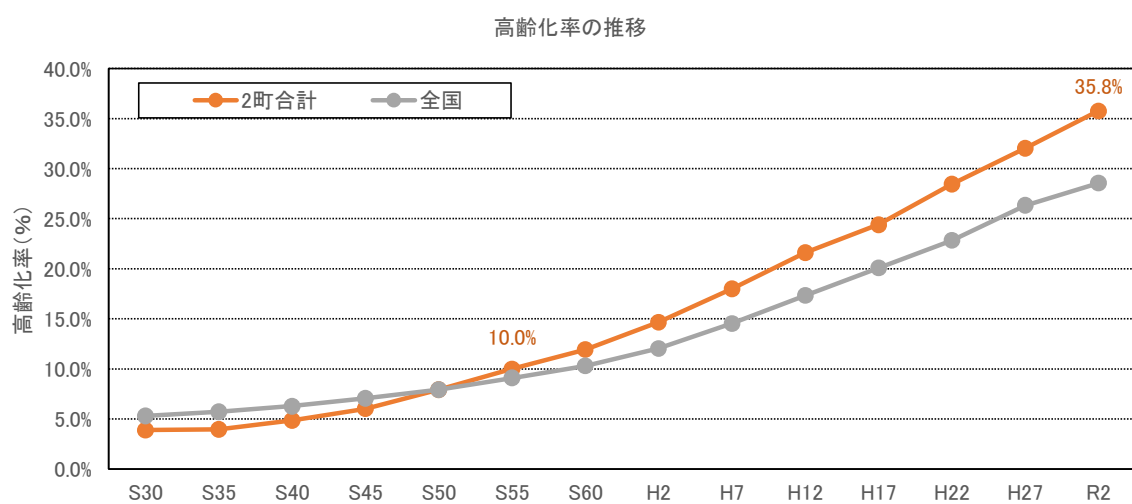
※出典：国勢調査

図 3-4 人口の推移



※出典：国勢調査

図 3-5 世帯数の推移



※出典：国勢調査

図 3-6 高齢化率の推移

3-3 産業と経済

沙流川の最上流部に位置する日高町の町勢は、戦後に鉄道や道路の整備等により拡大し、農業と豊かな森林資源を背景に林業や林産加工業等を中心として発展した。近年はこの農林業人口が減少しているが、国道の整備による商店街近代化や豊かな自然環境を生かした観光関連産業に力が注がれている。

平取町・日高町を支える第一次産業の就業者は全就業者の3割を占め、その大半が農業従事者である。近年、平取町はトマトの一大産地となっており、平成24年（2012年）に商標登録された「びらとりトマト」は農作物販売取扱高の約80%を占めるなど、平取町における重要な特産物となっている。その収穫量は全道で1位、全国で5位であり、北海道内のほか関東・関西へ出荷され、東京・横浜市場の約1割、大阪・京都市場で約2割のシェアを占めている。また、日高町と平取町の国内軽種馬及び繁殖牝馬の全国シェアは約20%を占め、全国有数の産地となっている。さらに、沙流川はシシャモやサクラマス等が遡上するなど、魚類の重要な生息地で豊かな自然環境に恵まれている。

表 3-4 日高町、平取町における産業別就業者数

区 分	日高町		平取町		2町合計	
	人口 (人)	構成比 (%)	人口 (人)	構成比 (%)	人口 (人)	構成比 (%)
第1次産業	2,044	33.1%	923	33.8%	2,967	33.3%
第2次産業	734	11.9%	412	15.1%	1,146	12.9%
第3次産業	3,396	55.0%	1,397	51.1%	4,793	53.8%
計	6,174	100.0%	2,732	100.0%	8,906	100.0%

※出典：第130回北海道統計書（R5）による（R2 国勢調査人口）

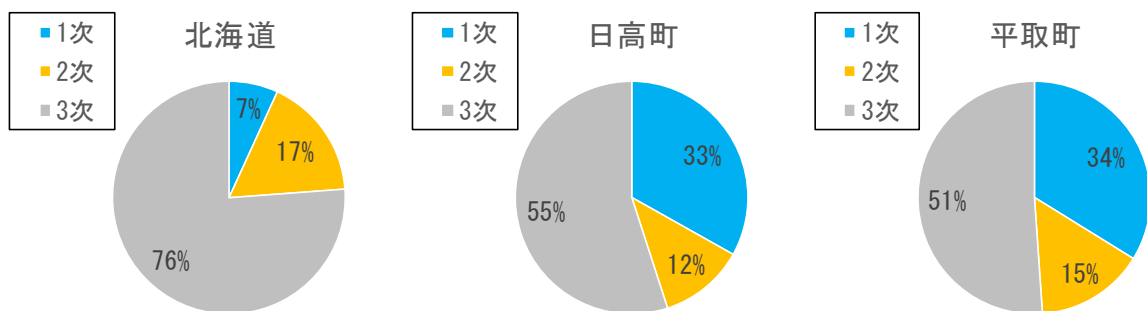


図 3-7 産業別就業者数の割合（令和 2 年度国勢調査）

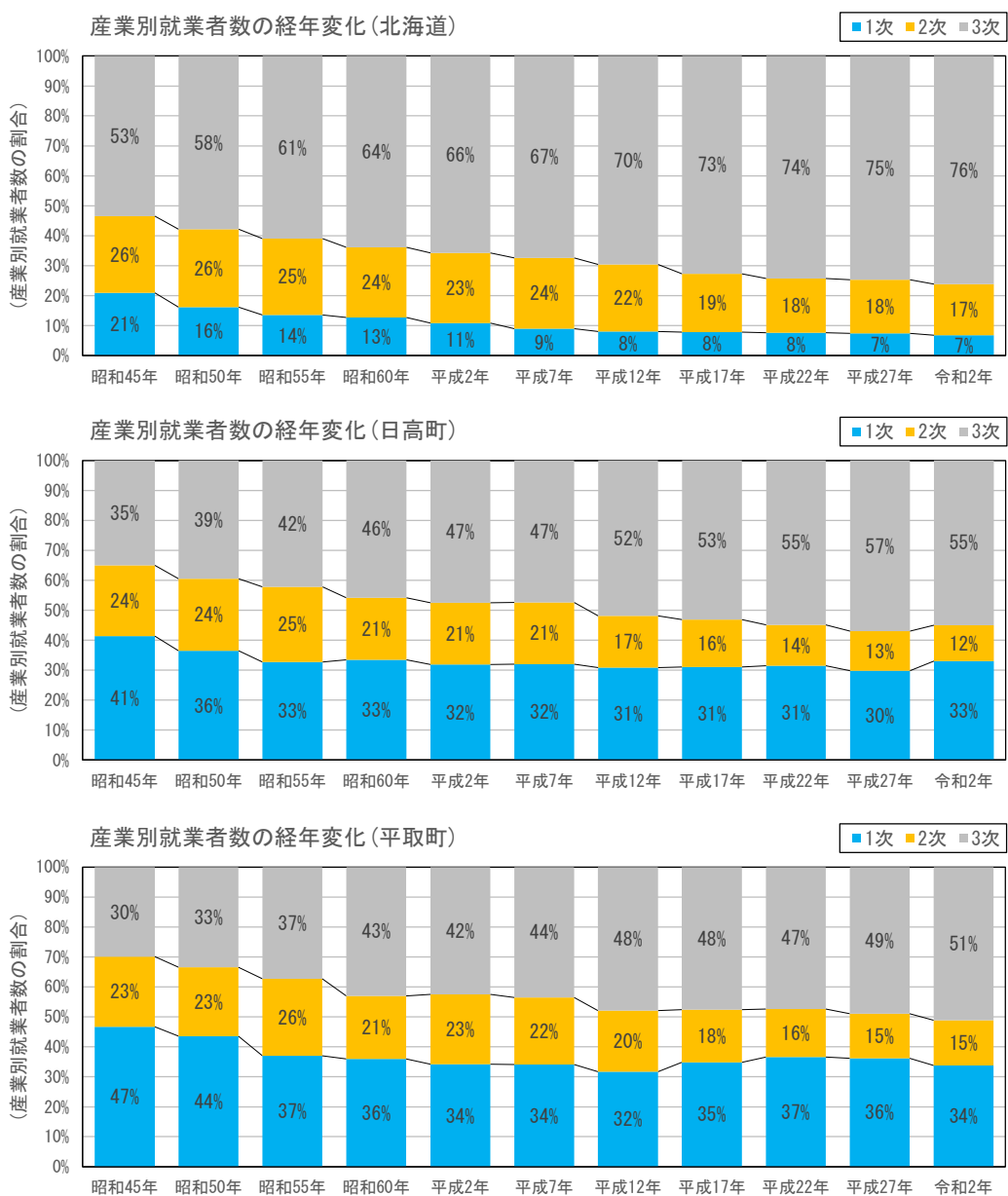


図 3-8 産業別就業者数の経年変化（昭和 45 年～令和 2 年度国勢調査）

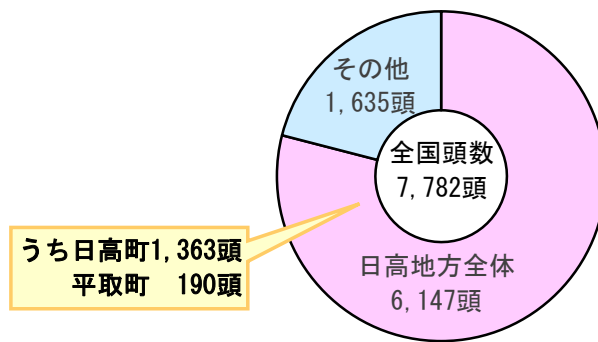


図 3-9 軽種馬の地域別生産頭数（令和 4 年 12 月）

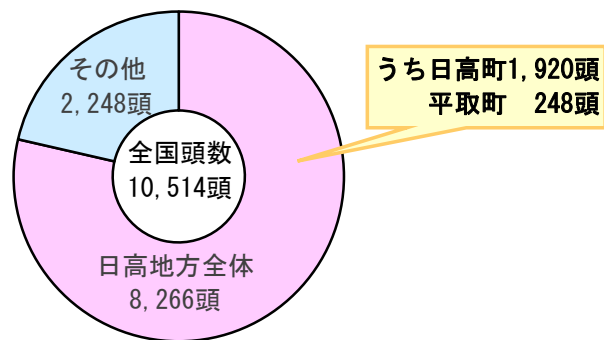


図 3-10 軽種馬の繁殖牝馬飼育頭数（令和 4 年 12 月）

3-4 交通

沙流川流域内には、国道3路線（235号・237号・274号）が走り、道央・道東・道南を結ぶ幹線機能を有している。特に、道央札幌・千歳・苫小牧と道東十勝地区との連絡ルートとして重要で、産業流通及び生活交通ルートとして利用されている。

また、高規格幹線自動車網を構成する日高自動車道の整備が進められ、昭和63年度（1988年度）から事業に着手し、平成10年（1998年）に苫小牧東IC～厚真IC間、平成15年（2003年）に厚真IC～鶴川IC間、平成18年（2006年）に鶴川IC～日高^{とみかわ}富川IC間、平成24年（2012年）に日高富川IC～日高門別IC間、平成30年（2018年）に日高門別IC～日高厚賀ICが開通しており、その先の区間についても、早期の開通に向けて順次整備が進められている。

鉄道については令和3年（2021年）にJR日高線鶴川～様似間が廃線となったが、現在は苫小牧から襟裳までを結ぶ日高地域広域公共バスが運行しており、苫小牧から各方面へのアクセスが可能となっている。



※国土数値情報（高速道路時系列・道路データ・河川・湖沼・海岸線・行政区域）（国土交通省）を加工して作成

図 3-11 沙流川流域における道路・鉄道網位置図

3-5 関係ある法令の指定状況

(1) 第9期北海道総合開発計画

第9期北海道総合開発計画では、2050年の北海道の将来像として、高い食料供給力、魅力的な観光資源、豊富な再生可能エネルギーといった他で代替できない価値を最大化し、現下の課題解決を先導するとともに、デジタル技術の活用や交通ネットワークの形成等により、これら北海道の価値を生み出す地方部の定住環境の維持にも取り組む必要がある。

このため、2050年までを見据えた北海道開発の展開の方向を示した上で「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」、「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり」を目標としている。

第9期北海道総合開発計画の構成



前文 第9期北海道総合開発計画の策定に当たって	
第1章 計画策定の意義 第1節 北海道開発の経緯 1. 北海道開発の歴史 2. 第8期北海道総合開発計画の経緯 第2節 第9期北海道総合開発計画の意義	第3章 計画推進の基本方針 第1節 計画の期間 この計画の期間は、2024年度からおおむね10年間とする 第2節 計画の主要施策 第3節 計画の進め方 1. リアルとデジタルのハイブリッドによる北海道型地域構造の保持・形成 2. 計画の実効性を高めるための方策 (1) 官民の垣根を越えた「共創」 (2) 社会変革の鍵となるDX・GXの推進 (3) フロンティア精神の再発揮 (4) 戦略的・計画的な社会資本整備 3. 計画のマネジメント
第2章 計画の目標 第1節 我が国を取り巻く状況 1. 人口減少・少子高齢化と人口動態の変化 2. 気候変動と自然災害の激甚化・頻発化 3. 社会を変えるデジタル技術 4. 国際情勢の変化 第2節 北海道の資源・特性 1. 広大な大地 2. 食料供給力 3. エネルギー・資源 4. 自然環境・文化 5. 地理的特性・寒冷地技術 第3節 2050年の北海道の将来像 1. 国の課題解決のために果たすべき役割 2. 将来像 3. 将来像を支える社会基盤 4. 将来像を実現するために進むべき方向性 第4節 第9期北海道総合開発計画の目標 目標1「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」 目標2「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり」	第4章 計画の主要施策 第1節「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」に係る主要施策 1. 食料安全保障を支える農林水産業・食関連産業の持続的な発展 2. 観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくり 3. 地球温暖化対策を先導するゼロカーボン北海道の実現 4. 地域の強みを活かした成長産業の形成 5. 自然共生社会・循環型社会の形成 6. 北方領土隣接地域及び国境周辺地域の振興 7. アイヌ文化の振興等 第2節「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり」に係る主要施策 1. デジタルの活用による生産空間の維持・発展 2. 多様で豊かな地域社会の形成 3. 北海道型地域構造を支え、世界を見据えた人流・物流ネットワークの形成 4. 生産空間を守り安全・安心に住み続けられる強靱な国土づくり

1

図 3-12(1) 北海道総合開発計画の概要

第9期北海道総合開発計画 主要施策1

「他で代替できない北海道の価値」を最大化し、現下の国の課題解決を先導

食料安全保障

全国約24%の食料生産（カロリーベース）
生産量全国一の農畜産物・水産物
小麦、ばれいしょ、たまねぎ、生乳等
ホタテ、タラ、サケ・マス、ホッケ等

観光立国の再興

感染症拡大前の直近5年間で
来道外国人旅行者数 164万人増
（平成26年137万人⇒令和元年301万人）
都道府県魅力度 15年連続全国一

2050カーボンニュートラル

全国一の再生可能エネルギー賦存量
洋上風力、陸上風力、太陽光、
森林吸収、バイオマス、
ブルーカーボン、中小水力

北海道のポテンシャルを活かし、我が国の豊かな暮らしを支える
～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道～

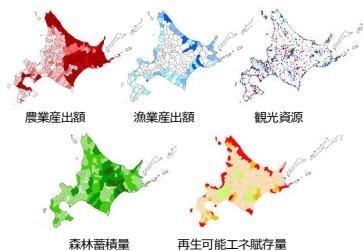


図 3-12 (2) 北海道総合開発計画の概要

第9期北海道総合開発計画 主要施策2

北海道の価値を生み出す生産空間の定住環境を維持

北海道の価値を生む「生産空間」の分布



北海道の生産空間の構造的課題【定住環境の厳しさ＝二重の疎】



+ 積雪寒冷の厳しい気候、千島海溝地震の切迫

北海道の価値を生み出す北海道型地域構造の維持
～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり～

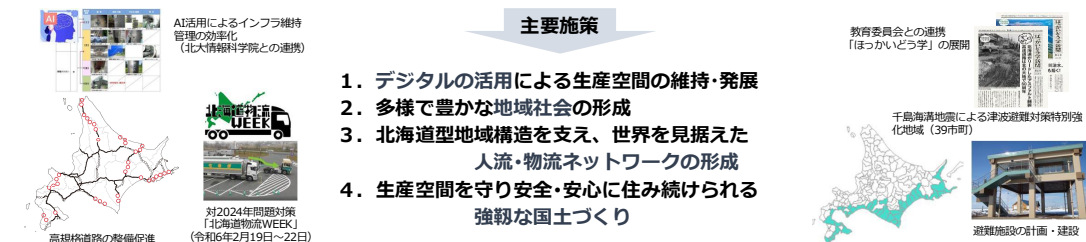


図 3-12 (3) 北海道総合開発計画の概要

(2) 地域プロジェクト及び都市計画

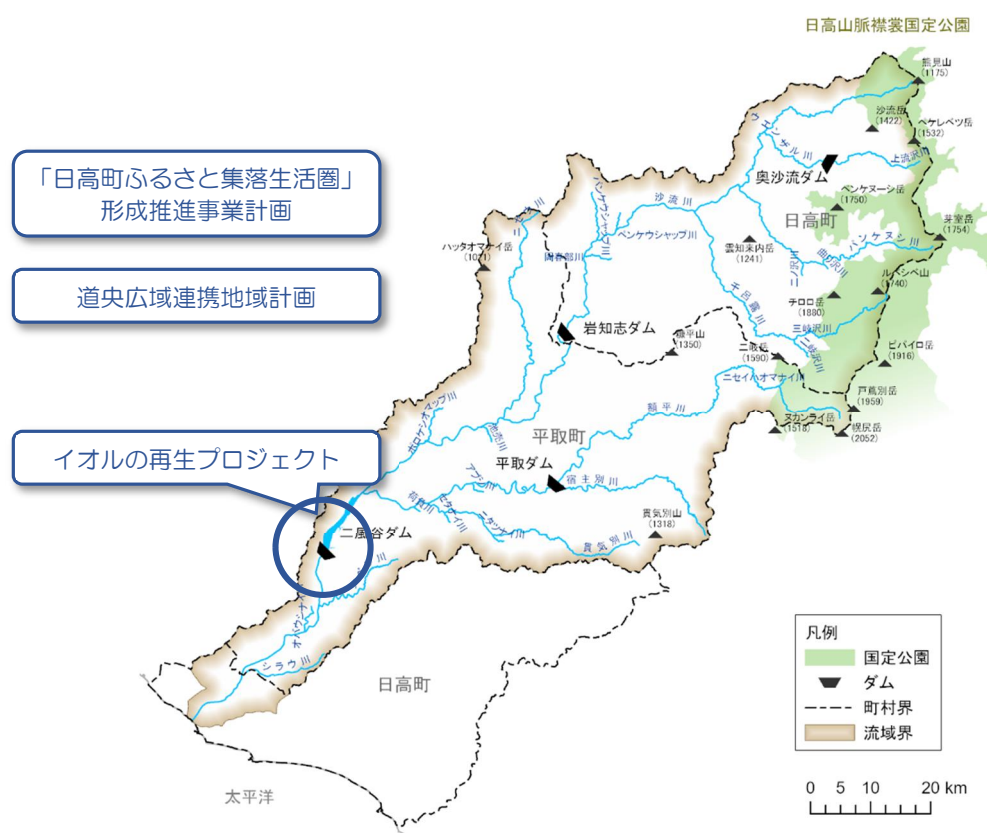
沙流川流域に関連する地域プロジェクトは、イオルの再生プロジェクト、「日高町ふるさと集落生活圏」形成推進事業計画、道央広域連携地域計画がある。また、日高町では都市計画区域が指定されている。

平取町では都市計画区域は指定されていない。

表 3-5 沙流川流域に関連する地域プロジェクト

プロジェクト名	概要	事業主体
イオル（アイヌの伝統的な生活の場）の再生プロジェクト	豊かな自然環境の中で育まれてきたアイヌ文化を総合的に継承するため、人材の養成を急ぐとともに、文化伝承の基盤となるイオル（アイヌの伝統的な生活の場）を再生し、必要な自然素材が持続的に採取（採捕）できる体制づくりをすすめ、関連施設を活用し、その確保過程や加工等、行程の実践、工芸技術の伝承や体験交流活動を推進し、「アイヌ文化の里」づくりをめざす。	国、北海道、平取町
「日高町ふるさと集落生活圏」形成推進事業計画	国の地方創生事業のもと、住民会議をたちあげ、道の駅を中心とした7つのゾーンに分類化し、医療、介護、福祉、観光、移住、交通等の議題に対し4つのグループ編成で各ゾーン連携のあり方や可能性、それらの実現や進め方等の討議を重ね計画を策定した。	国、日高町
道央広域連携地域計画	「ひだか」製品のブランド力の向上や消費拡大、移住・定住やワーケーション等を推進し、地域産業の振興や人材の確保・育成を図る。また、全国一の軽種馬生産地としての牧場風景、ユネスコ世界ジオパークのアポイ岳、日高山脈や襟裳岬等の豊かな自然環境、アイヌ文化等の地域資源を活かし、「ひだか」の魅力発信や体験型観光の推進、広域観光の展開を図る。	国、北海道、平取町、日高町

※出典：北海道・平取町・日高町 HP より



※国土数値情報（河川・湖沼・海岸線・行政区域・自然公園地域）（国土交通省）を加工して作成

図 3-13 沙流川流域の地域プロジェクト

4. 水害と治水事業の沿革

4-1 既往洪水の概要

沙流川における過去の洪水は、台風及び前線に起因するものが多く、内水被害、無堤地区での浸水等により人家や農作物等に多大な被害をもたらしてきている。

表 4-1 既往の主要洪水の概要

発生年月日	原因	雨量 (mm)	平取地点 流量(m ³ /s)	被害等
明治 31 年 9 月 6 日	台風	不明	不明	日高支庁管内の沙流・静内・新冠の 3 群に被害、家屋全壊 102 戸、同半壊 19 戸、同流失 61 戸、同浸水 351 戸、田被害 8ha、畑同 2,535ha、平取死者 29 人、門別死者 29 人、佐留太小学校流失
大正 11 年 8 月 24～25 日	台風	門別 140	不明	日高支庁管内死者 38 人、負傷者 13 人、家屋流失 228 戸、同浸水 1,136 戸、田浸水 1,043ha、畑同 2,763ha
昭和 10 年 8 月 29～30 日	台風	浦河 55	不明	日高支庁管内死者 1 人、負傷者 62 人、家屋全壊 140 戸、同半壊 241 戸、同流失 76 戸、床上浸水 155 戸、床下同 152 戸、非住家全壊 112 戸、同半壊 232 戸、同流失浸水 292 戸、護岸決壊 2 カ所、道路流失損壊 13 カ所、橋梁同 4 カ所
昭和 30 年 7 月 3 日	低気圧 前線	日高 85	不明	沙流川上流平取町二風谷地区・ヌタツプ地区・去場地区・紫雲古津地区、下流門別平賀地区・富川地区・富浜地区氾濫、平取町被害死者 1 人、家屋半壊 5 戸、同流失 12 戸、同浸水 72 戸、氾濫面積 1,927.9ha
昭和 36 年 7 月 24～26 日	低気圧 前線	74	2,920	平取町被害家屋全壊 1 戸、半壊 5 戸、流失 20 戸、床上浸水 63 戸、床下浸水 224 戸、氾濫面積 221ha、門別町床上浸水 2 戸、床下浸水 26 戸
昭和 37 年 8 月 2～4 日	台風 9 号	189	3,470	平取町被害死者 1 人、負傷者 2 人、家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、流失 4 戸、床上浸水 60 戸、床下浸水 99 戸、氾濫面積 590ha、門別町被害床上浸水 58 戸、床下浸水 87 戸、氾濫面積 270ha
昭和 41 年 8 月 17～19 日	低気圧 前線	117	2,180	—
昭和 50 年 8 月 22～24 日	台風 6 号 前線	120	2,241	平取町被害家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、床下浸水 5 戸、氾濫面積 30ha、門別町被害死者 1 人、床上浸水 2 戸、床下浸水 53 戸、氾濫面積 38ha
昭和 56 年 8 月 5 日	台風 12 号 前線	150	1,159	平取町被害床上浸水 3 戸、床下浸水 31 戸、門別町被害死者 1 人、負傷者 5 人、家屋全壊 27 戸、半壊 13 戸、一部破損 19 戸、床上浸水 173 戸、床下浸水 491 戸
平成 4 年 8 月 7～9 日	台風 10 号	170	3,308	平取町被害床上浸水 9 戸、床下浸水 40 戸、門別町被害家屋半壊 1 戸、一部破損 2 戸、床上浸水 41 戸、床下浸水 43 戸
平成 9 年 8 月 9～10 日	低気圧 前線	137	1,951	門別町被害床上浸水 2 戸
平成 13 年 9 月 11～13 日	台風 15 号 前線	198	1,994	平取町被害床下浸水 2 戸、門別町被害床上浸水 2 戸、床下浸水 54 戸
平成 15 年 8 月 8～10 日	台風 10 号 前線	307	5,121	平取町被害家屋全壊 3 戸、床上浸水 45 戸、床下浸水 25 戸、門別町被害死者 3 人、重傷 1 人、家屋全壊 7 戸、半壊 6 戸、一部破損 16 戸、床上浸水 34 戸、床下浸水 147 戸
平成 18 年 8 月 18～19 日	前線	311	2,959	平取町被害床上浸水 2 戸、床下浸水 25 戸、日高町被害重傷 1 人、家屋全壊 1 戸、一部破損 1 戸、床上浸水 11 戸、床下浸水 81 戸
平成 28 年 8 月 22～23 日	台風 9 号	136	2,349	日高町被害一部損壊 1 戸、床上浸水 18 戸、床下浸水 20 戸

注 1) 大正 11 年の雨量は門別 1 日雨量、昭和 10 年は浦河 2 日雨量、昭和 30 年は日高 1 日雨量、昭和 36 年は平取 1 日雨量、昭和 37 年以降は平取上流での流域平均 24 時間雨量。

注 2) 平取地点流量は、平取流量観測所の実測流量値。ただし昭和 36 年は洪水報告書記載の痕跡水位からの計算値。平成 13 年、15 年、18 年、28 年の平取地点流量は二風谷ダムによる洪水調節後流量。

注 3) 明治 31 年～昭和 30 年の被害等は「鵲川沙流川治水史」による。昭和 36 年～平成 15 年の被害等は「北海道災害記録」による、平取町と旧門別町の値。平成 18 年、平成 28 年の被害は洪水報告書（室蘭開発建設部）による速報値。

注 4) 北海道災害記録による被害等は集計上、支川、内水被害等を含む。旧門別町の被害については流域外も含む。

注 5) 平成 18 年に日高町と門別町が合併し「日高町」となったが、表内は旧名のまま記載した。

(1) 明治 31 年 9 月 6 日洪水

明治 31 年（1898 年）9 月の大水害は、多年にわたる住民の辛苦粒々たる努力も空しく根底から破壊する結果をもたらした。

まず、幌去では浸水畑地 46.6ha のうち将来耕作の見込みのないものが 36ha、長知内では土壌流亡、又は、砂利をかぶったもの 31ha で、将来耕作の見込みがあるのはわずかに 2ha、貫気別では土壌流失によって川状になり、また、砂礫に変わったものは 50ha、復旧の見込みのあるものは 20ha、荷負では 50ha が河原と化して復旧の見込みはなかったが、36ha は泥をかぶったが砂礫がなく、一兩年経過すれば耕作可能な状態であった。二風谷は土壌流亡し川状、あるいは砂礫に変わったものは 147ha、平取では水勢がことに激しく、流失建物 5 戸、全壊 3 戸、総反別 182ha は一大礫地に変わり、将来再墾の見込みのあるものは、わずかに 20 分の 1 にすぎなかった。荷葉の本村では流失家屋 7 戸、同馬屋 6 棟、物置 5 棟、行方不明男女 12 人、馬 4 頭という被害を出し、完全に流亡した耕地は約 51ha、そのほかのものも砂礫を流して今後数年は再墾の見込みがなく、同サルバでは流失家屋 8 戸、同壊家 2 戸、厩流失 5 棟、流豚 27 頭、田畑 222ha すべて流失といった状態であった。沙流川の下流に至るほど水量水勢ともに激しく、耕地・建物はおろか人命まで奪う凄惨さであった。

(2) 大正 11 年 8 月 24～25 日洪水

『北海道凶荒災害誌』によると、大正 11 年（1922 年）の洪水は、「8 月 18～19 日頃から小低気圧の発生が頻繁となり、ついで 24 日に至って、台風の襲来あり、それが 24 日深夜から 25 日にわたって本道の南東海岸を過ぎ」とあるが、これは、18～19 日に発生した小低気圧によって湿潤な天候となり、20 日には、まず、第 1 次的なやや多量の降雨があって、以後断続して毎日降雨が続き、24 日には台風の影響を受けた雷雨を加えて再び大量の雨が降り、ついに水害が誘発されたのである。

特に、門別の惨状は厳しく、当時の新聞は「風は咽ぶ門別の惨状」、「門別死屍累々、五十四個の死体漂着」の見出しで報じている。加えて季節も秋冷を過ぎて寒冷に向かい、「食うに食なく着るに衣なく」という状況であった。

(3) 昭和 10 年 8 月 29～30 日洪水

昭和 10 年（1935 年）の洪水も大正 11 年（1922 年）洪水と同様に、南洋海上で発達した台風が国土東海岸を北上し、北海道南縁をかすめて北東に去ったものである。北海道を通過した時の気圧は、742 耗程度であり、かなりの勢力を持ったものであることが推察される。しかしながら、比較的風速が弱いという本道の台風の特性的ため、風速は 16m 程度と推測され典型的な雨台風となった。この時の状況は、日高町史には次のように記されている。

『降り続く雨によって村中の河川が氾濫し、橋梁、道路等の破損、流失は 24 件に及び、いたるところで交通は途絶した。また田畑の浸水は実に 108 町歩におよび、収穫皆無の農家が 14 戸、三分作は 29 戸であった。村では食料、稲苗、肥料、医療等すべてにわたって救済をほどこし、また決壊道路や流失橋の復旧に国庫補助をあおぐなど、村の立て直しに奔走した』

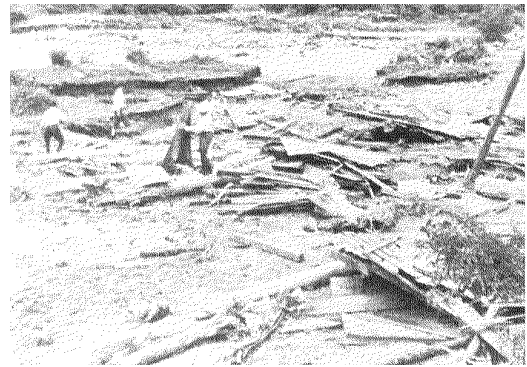
(4) 昭和 30 年 7 月 3 日洪水

沿海州の低気圧から本道西方に延びた前線が通過したため、日高の雨量は 85mm に達した。このため、沙流川上流部の平取町二風谷地区・去場地区・紫雲古津地区が氾濫し、下流部の門別町平賀地区・富川地区・富浜地区が氾濫した。

被害は平取町で死者 1 人、家屋半壊 5 戸、同流失 12 戸、同浸水 72 戸で氾濫面積 1,927.9ha に及んだ。

の様子は「日高村五拾年史」に、次のように記されている。

『しのつく雨の降り続きにまんじりとしなかった四日の朝まだき、住民はごうごう遠雷のような音に夢破られ、戸外に飛び出した時は沿岸低地の住家周辺は刻々水が迫り、田畑は水浸しになっていた。貫流沙流川の奔流は見る間に水嵩昂まり、荒れ狂う濁流の咆哮は所嫌わず堤防、道路を噛みくだき根こそぎの流木は荒波に揉まれて木の葉のように舞ながら、立木をなぎ倒し橋梁を撃破して押し流していった…。かくてこの水勢は大小兩岸の増水を併呑し岩石橋を跡方もなく葬り、沙流川発電所取入口を埋め水路を破壊し、伊藤吊橋を軽く流して余勢をかり右左府橋左岸寄りを中断して三岡橋、三岩吊橋、落成間もない日高橋を押し流していった。大自然の脅威は瞬く間に本流全橋梁を流失し…。』



三島集落家屋流失の跡・昭和 30 年 7 月
(日高村五拾年史)



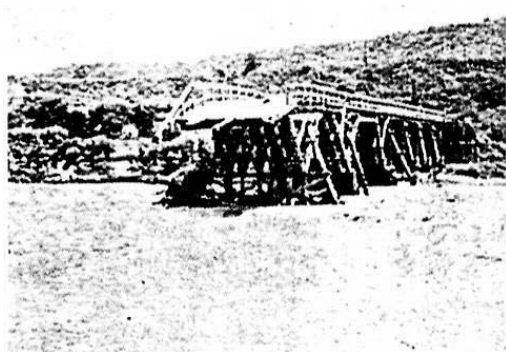
平取大橋の流失・平取町
(昭和 30 年 7 月)

写真 4-1 昭和 30 年 7 月 3 日洪水

※写真出典：鶴川沙流川治水史

(5) 昭和 36 年 7 月 26 日洪水

満州の低気圧を伴った不連続線による雨は夜半すぎ本道の西海上に小さな低気圧が発生し、とみに湿った暖気をさそって雨量も多くなり、沙流川水系上流部の豊糠では 24 日から 3 日間の総雨量が 273mm に達した。このため、平取町の紫雲古津地区・ヌタツプ地区・二風谷地区・門別町富川地区・富浜地区の各所で氾濫し、平取町の被害は家屋全壊 1 戸、半壊 5 戸、流失 20 戸、床上浸水 63 戸、床下浸水 224 戸で、氾濫面積は 221ha であった。また、門別町では床上浸水 2 戸、床下浸水 26 戸の被害が生じた。



流出した振内橋・広報びらとり
(昭和 36 年 7 月)



必死の護岸作業を行う自衛隊員・広報びらとり
(昭和 36 年 7 月)

写真 4-2 昭和 36 年 7 月 26 日洪水

※写真出典：鶴川沙流川治水史

(6) 昭和 37 年 8 月 4 日洪水

台風 9 号の接近にともない本道は 2 日夕方から全道的に大雨となる。その後、台風 9 号は日本海を縦断し、4 日夜半すぎに北海道へ上陸、各地の大雨による被害はさらに広がった。この台風 9 号により、沙流川水系平取の雨量は 108.3mm に達し、沙流川上流の平取町紫雲古津地区・ヌタツプ地区・オユンベ地区、下流の門別町富川左岸地区・富川右岸地区の各所で氾濫した。被害は平取築堤が溢水・二風谷築堤が決壊するに及び、平取町では死者 1 名、負傷者 2 名、家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、流失 4 戸、床上浸水 60 戸、床下浸水 99 戸、氾濫面積 590ha となった。さらに門別町では家屋床上浸水 58 戸、床下浸水 87 戸、氾濫面積 270ha に及んだ。



越水寸前の去場築堤

※写真出典：北海道開発局



平取築堤での水防活動

※写真出典：北海道開発局



平取橋より上流を見る

※写真出典：昭和 37 年（1962）8 月上旬 直轄河川の洪水報告

写真 4-3 昭和 37 年 8 月 4 日洪水

(7) 昭和 50 年 8 月 24 日洪水

日本海を北上した台風 6 号と寒冷前線の影響で、23 日から 24 日の早朝にかけ日高地方に大雨が降り、沙流川水系の振内では、8 月 19 日から 20 日にかけて台風 5 号と同月の 22 日から 24 日にかけての台風 6 号による影響で 19 日から 24 日の雨量は 140mm になった。このため沙流川上流の平取町紫雲古津地区・荷菜去場地区・平取地区、下流部の門別町河口左岸地区・富川地区の各所で内水氾濫があった。被害は平取町が家屋全壊 1 戸、半壊 1 戸、床下浸水 5 戸、氾濫面積 30ha で、門別町では死者 1 名、床上浸水 2 戸、床下浸水 53 戸、氾濫面積 38ha であった。



沙流川左岸・旧門別町富浜地区洪水
(昭和 50 年 8 月)

※写真出典：鶴川沙流川治水史

写真 4-4 昭和 50 年 8 月 24 日洪水

(8) 昭和 56 年 8 月 5 日洪水

オホーツク海より渡島半島を越えて日本海に達した前線及び台風 12 号の影響により、3 日夜半から降り出した強い雨のため、浦賀測候所では 8 月 5 日 2 時 35 分、大雨洪水警報、雷雨強風波浪濃霧注意報を発表した。強い雨はその後も降り続き、5 日夜半までに日高 179mm、平取 290mm、富川 350mm に達し、沙流川水系平取観測所では警戒水位を 15cm 超えて 24.25m に達した。このため沙流川水系の平取で紫雲古津地区の内水氾濫、門別町では富川地区・河口左岸地区・河口右岸地区の各所で氾濫した。被害は平取町で床上浸水 3 戸、床下浸水 31 戸、門別町では死者 1 名、負傷者 5 名、家屋の全壊 27 戸、半壊 13 戸、一部破損 19 戸、床上浸水 173 戸、床下浸水 491 戸に達した。



河口右岸 表町樋門 洪水時の河川の状況



富川地区 富川橋 洪水時の河川の状況

写真 4-5 昭和 56 年 8 月 5 日洪水

※写真出典：昭和 56 年 8 月洪水 鶴川沙流川洪水報告書

(9) 平成 4 年 8 月 9 日洪水

九州地方を縦断し日本海を北上してきた中型で並みの強さの台風 10 号は、秋田市の西北西約 100km の位置で温帯低気圧に変わり東北地方北部から本道南岸を通過した。これにより 8 日夕方より降り出した強い雨のため、室蘭地方気象台は、8 月 9 日 11 時に胆振東部に大雨洪水警報を発令した。また、浦河測候所は、8 月 9 日 13 時に日高全域に大雨・洪水警報を発令した。その後、強い雨が継続的に 9 日夜半まで降り続き、降り始めからの総雨量は、富川 214mm、平取 205mm に達した。このため、沙流川水系平取観測所では警戒水位を 2.80m 越えた 26.90m に達した。これによって、平取町では、床上浸水 9 戸、床下浸水 40 戸、門別町では、家屋半壊 1 戸、一部破損 2 戸、床上浸水 41 戸、床下浸水 43 戸等の被害が生じた。



さるがわせせらぎ公園付近出水状況



さるがわせせらぎ公園被災状況



コンカン川樋門付近出水状況



沙流川河口 出水状況

写真 4-6 平成 4 年 8 月 9 日洪水

※写真出典：平成 4 年 8 月 9 日洪水 鶴川沙流川洪水報告書（速報版）

(10) 平成 13 年 9 月 11 日洪水

北海道は9日から本州より伸びる気圧の谷の中に入った状態が続き、秋雨前線が10日から北海道付近に停滞した。11日にかけて前線は太平洋沿岸に南下したが台風15号から湿った暖湿気流が入って、前線活動が活発化した。

室蘭地方気象台は、11日6時00分に日高地方に「大雨・洪水警報」また、6時20分には胆振地方に「大雨・洪水警報」を発令した。

降り始めからの総雨量は、沙流川水系日高（開）263mm、平取（開）316mm、富川（開）292mmに達する大雨となった。

このため、沙流川水系富川観測所では警戒水位を1m46cm上回る5.96m、平取観測所では警戒水位を1m54cm上回る25.64mに達した。

この洪水により、平取町では床下浸水2戸、門別町では床上浸水2戸、床下浸水54戸の家屋被害が発生した。



旧門別町せせらぎ公園浸水状況(河川公園)

※写真出典：北海道開発局

写真 4-7 平成 13 年 9 月 11 日洪水

(11) 平成 15 年 8 月 10 日洪水

サハリン方面を通過した低気圧に伴う寒冷前線が 8 日から 9 日朝にかけて北海道を通過しまとまった雨が降った。その後、前線は北海道の南海上に停滞した。

一方、大型で強い台風 10 号は、8 日夜四国の室戸市付近に上陸した後、9 日は本州を縦断して、三陸沖沿岸から太平洋に抜けた。この台風から送りこまれる暖湿気流の影響で北海道の南海上に停滞していた前線は 9 日朝から活動が活発となり、強い雨が降り始めた。

室蘭地方気象台は 9 日 11 時に胆振・日高地方全域に「大雨・洪水警報」を発令した。

台風は 9 日夜遅くには北海道に近づき 10 時午前 2 時過ぎ襟裳岬付近を通過して十勝・釧路地方の海岸沿いを北東へ進み、10 日 6 時に根室の北で温帯低気圧に変わった。

降り始めからの総雨量は沙流川水系では、仁世宇（開）394mm、日高（開）360mm、岩知志（開）371mm。このため、沙流川水系富川観測所では計画高水位を 60cm 上回る 7.66m、平取観測所では計画高水位を 74cm 上回る 28.29m に達した。

今回の降雨の特徴は、前線と台風による雨のため降雨継続時間が長く、さらに、台風 10 号が接近した 9 日 14 時から 10 日 0 時の間、1 時間に 20～60mm の雨が 5 時間位と強い雨が連続したことが挙げられる。

平取町宿主別では、総雨量 433mm、また、平取町旭では最大 1 時間雨量 75mm と、まさに記録的な雨量となった。

この洪水により、平取町では全壊 3 戸、床上浸水 45 戸、床下浸水 25 戸の家屋被害が発生し、門別町では死者 3 人、重傷 1 人の人的被害及び全壊 7 戸、半壊 6 戸、一部破損 16 戸、床上浸水 34 戸、床下浸水 147 戸の家屋被害が発生した。



沙流川富川地区浸水状況下流から望む



二風谷ダム下流から放流状況



沙流川橋出水状況

※写真出典：北海道開発局

写真 4-8 平成 15 年 8 月 10 日洪水

(12) 平成 18 年 8 月 18 日洪水

8 月 17 日には朝鮮半島から宗谷海峡にかけて前線が停滞しており、この前線が次第に東進して 8 月 18 日から 19 日にかけて北海道付近に停滞した。九州地方に上陸した台風 10 号の影響で太平洋高気圧の縁を回って暖かく湿った空気が前線に向かって流れ込み、前線の活動が活発になった。このため、前線付近では強い雨雲が次々に発生・発達し、雷を伴って胆振・日高地方から上川中部・南部、北見地方にかけて断続的に強い雨を降らせた。

室蘭地方气象台は 18 日午前 2 時に胆振全域に、午前 4 時に日高全域にそれぞれ「大雨・洪水警報」を発表した。

18 日 6 時頃から前線は日高地方に停滞し、12 時頃にかけて発達した雨雲が次々と日高西部に流れ込んだ。前線は昼過ぎには襟裳岬付近まで南下して一旦弱まったが、18 時以降、再び北上し日高西部にかかり始めた。18 時から 24 時にかけて渡島半島方面から発達してきた雨雲が胆振東部から日高西部に流れ込み、再び雨の降り方が強まった。19 日午前 3 時以降は前線が東進して活動が弱まり、強い雨雲も日高地方から網走方面へと移った。

降り始めからの雨量は、仁世宇（気象庁）425 mm、振内（開）390 mm、二風谷ダム（開）357 mm、上貫気別（開）377 mm、日高（開）334 mm 等、中流域を中心に雨量が多くなった。

この洪水により、平取町では床上浸水 2 戸、床下浸水 25 戸の家屋被害が発生し、日高町では重傷 1 人の人的被害及び全壊 1 戸、一部破損 1 戸、床上浸水 11 戸、床下浸水 81 戸の家屋被害が発生した。



日高町富川地区浸水状況



コンカン川樋門出水状況

写真 4-9 平成 18 年 8 月 18 日洪水

(13) 平成 28 年 8 月洪水

台風第 7 号は、8 月 16 日、日本の南を北西に進み、17 日、暴風域を伴いながら、速度を速めて三陸沖を北上した。この台風は、17 日 17 時半頃、襟裳岬付近に上陸した後も北へ進み、21 時に温帯低気圧に変わった。また、16 日 21 時から 18 日にかけて、北海道付近に前線が停滞した。

このため、胆振・日高地方では、16 日から 17 日にかけて、台風と前線の影響により大気の非常に不安定な状態が続き、広い範囲で大雨となった。また、海上を中心に非常に強い風が吹き、海はうねりを伴い大しけとなった。

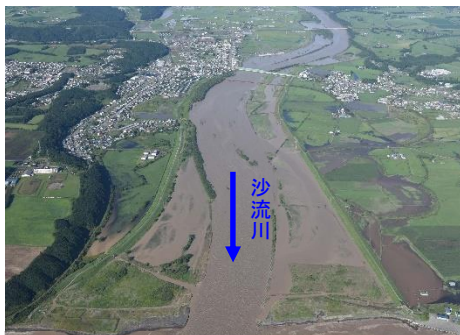
北海道付近には、8 月 19 日から 23 日にかけて、前線が停滞した。台風第 11 号は、21 日、東北地方の太平洋沿岸部を北上し、23 時過ぎに釧路市付近に上陸した後、温帯低気圧に変わった。また、強い台風第 9 号は、22 日 12 時に千葉県の館山市付近に上陸した後も、暴風域を伴いながら北上を続け、23 日 6 時頃、日高地方の新ひだか町付近に上陸した。この台風は、12 時にオホーツク海で温帯低気圧に変わった。

このため、胆振・日高地方では、19 日から 23 日にかけて、前線と台風の影響により大気の非常に不安定な状態が続き、広い範囲で長期間にわたる大雨となった。特に、台風第 9 号の接近・上陸により、23 日明け方は、胆振東部から日高西部・中部を中心に非常に激しい雨が降り、新ひだか町静内では、昭和 51 年（1976 年）の統計開始以来最大となる 1 時間雨量 65.0mm を観測した。ダム管理所・平取・富川では 24 時間で 170mm を超過する統計開始以来 6 番目の降雨を観測した。

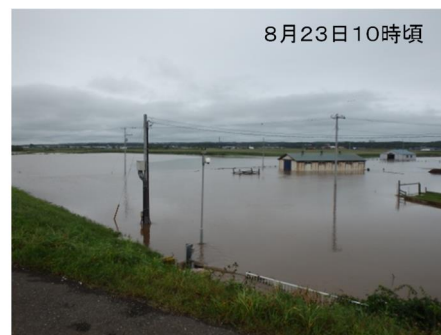
大型で非常に強い台風第 10 号は、8 月 29 日、本州の南を北東に進み、30 日、進路を北西に変えて、18 時前に岩手県大船渡市付近に上陸した。この台風は、その後も暴風域を伴いながら北西に進み、夜遅くに北海道にかなり近づいた後、31 日 0 時に日本海北部で温帯低気圧に変わった。

このため、胆振・日高地方では、30 日夕方から非常に強い風が吹き、海はうねりを伴った大しけの状態が 31 日にかけて続いた。風のピークは 30 日夜遅くで、白老等、観測開始以来の極値を更新した地点があった。また、局地的な大雨となり、大滝では、観測史上最大となる 1 時間雨量 70.0mm を、ウエンザルでは、観測史上最大となる 24 時間降雨 356mm を観測した。

この洪水により、日高町では一部損壊 1 戸、床上浸水 18 戸、床下浸水 20 戸の家屋被害が発生した。



日高町富川地区出水状況



沙流川 (KP1.0 付近) 内水被害状況

写真 4-10 平成 28 年 8 月洪水

4-2 治水事業の沿革

沙流川流域一帯は、地味肥沃・気候温順のため、農林業適地として入植も明治初期から始まり、逐次開発が進められた。開発が進む中で、明治 31 年（1898 年）9 月、大正 11 年（1922 年）8 月の大洪水等の出水による被害も大きかったが、計画的な治水事業は行われず、第二期拓殖計画の河川費による額平川合流点から河口までの部分的な低水路工事が着手されるにとどまっていた。

沙流川水系の治水事業は、昭和 9 年（1934 年）の河川法の一部改正により準用河川となり、部分的な低水路工事に着手し、その後、昭和 25 年（1950 年）に基準地点平取における計画高水流量を $3,900\text{m}^3/\text{s}$ と決定し、二風谷から河口までの区間について堤防整備、河道掘削等の改修工事を進めてきた。

その後、昭和 38 年（1963 年）に前述の計画高水流量を踏襲して沙流川総体計画を策定し、昭和 43 年（1968 年）に一級水系に指定された後、昭和 44 年（1969 年）に工事実施基本計画を策定した。昭和 37 年（1962 年）8 月及び昭和 50 年（1975 年）8 月洪水並びに流域の発展に伴う氾濫域内人口及び資産の増大に鑑み流域の安全度向上のため、昭和 53 年（1978 年）3 月に基準地点平取において基本高水のピーク流量を $5,400\text{m}^3/\text{s}$ 、計画高水流量を $3,900\text{m}^3/\text{s}$ とし、 $1,500\text{m}^3/\text{s}$ を洪水調節施設で調節する工事実施基本計画に改定した。この計画に基づき、堤防整備及び護岸の工事、沙流川総合開発事業（二風谷ダム、平取ダム建設）等を実施してきた。

その後、平成 9 年（1997 年）の河川法改正に伴い、沙流川水系河川整備基本方針を平成 11 年（1999 年）12 月に策定した。その基本高水のピーク流量、計画高水流量については、既往洪水等から妥当性を検証の上、工事実施基本計画を踏襲し、基準地点平取において基本高水のピーク流量を $5,400\text{m}^3/\text{s}$ とし、洪水調節施設で $1,500\text{m}^3/\text{s}$ を調節し、計画高水流量を $3,900\text{m}^3/\text{s}$ とした。平成 10 年（1998 年）には二風谷ダムが完成した。

平成 14 年（2002 年）7 月には、河川整備計画の目標流量を基準地点平取で $4,300\text{m}^3/\text{s}$ とし、沙流川水系河川整備計画【直轄管理区間】を策定した。この計画に基づき、流下能力が不足している箇所では河道掘削を実施するとともに、沙流川総合開発事業として平取ダムの建設を進めることとした。

その後、平成 15 年（2003 年）8 月の洪水では、観測史上最大の大雨により、計画高水流量を大きく超える大洪水が発生し、全川にわたって計画高水位を上回り、大きな浸水被害が発生するなど、社会及び地域経済に甚大な影響を与えたことから、平成 17 年（2005 年）11 月に河川整備基本方針を改定した。基準地点平取において、基本高水のピーク流量を $6,600\text{m}^3/\text{s}$ とし、洪水調節施設で $1,600\text{m}^3/\text{s}$ を調節、計画高水流量を $5,000\text{m}^3/\text{s}$ に見直した。

平成 19 年（2007 年）3 月には、河川整備計画の目標流量を基準地点平取で $6,100\text{m}^3/\text{s}$ とし、沙流川水系河川整備計画【直轄管理区間】を変更した。この計画に基づき、河道掘削や平取ダムの建設を進めるとともに、平成 15 年（2003 年）の出水を踏まえ、二風谷ダムと平取ダムの治水機能強化を図る容量再編事業を行うこととした。令和 4 年（2022 年）には平取ダムが完成した。

平成 27 年（2015 年）9 月関東・東北豪雨を受けて、平成 27 年（2015 年）12 月に策定された「水防災意識社会再構築ビジョン」に基づき、平成 28 年（2016 年）8 月に「^{むかわ}鵜川・沙流川減災対策協議会」を組織し、「水防災意識社会」の再構築を目的に国、道、町村等が連携・協力して、減災のための目標を共有し、ハード対策とソフト対策を一体的・計画的に推進してきた。

特に、平取町では、多機関連携型タイムラインの北海道のモデル地区として平成 28 年（2016 年）1 月に「水害タイムライン検討会」を開催し、平成 29 年（2017 年）5 月に「沙流川平取地区水害タイムライン試行版」が完成し、下流域の日高町富川地区でも平成 30 年（2018 年）3 月に「沙流川日高町富川地区水害タイムライン試行版」が完成した。その後、流域全体で水害に備える「沙流川流域水害タイムライン」として令和 2 年（2020 年）12 月に統合し、タイムラインを活用した防災訓練を実施している。さらに、流域内外の密接な連携及び水防技術の向上を図るために「鵜川・沙流川合同総合水防演習」や「北海道地区水防技術講習会」を実施している。

また、河川管理者、ダム管理者及び関係利水者により、令和 2 年（2020 年）5 月に沙流川水系（沙流川）治水協定が締結され、流域内にある 4 基の既存ダムの有効貯水容量を洪水調節に最大限活用し、下流域の浸水被害の軽減を図る取組を進めている。

さらに、気候変動の影響による水害の頻発化・激甚化を踏まえ治水対策を抜本的に強化するため、鵜川・沙流川流域治水協議会を設置し、令和 3 年（2021 年）3 月に「沙流川水系流域治水プロジェクト」を策定・公表し、河川整備に加え、あらゆる関係者が協働し、浸水リスクが高いエリアにおける土地利用規制・住まい方の工夫、農業水利施設の活用等による流域の貯留機能の向上、水害リスク情報の提供及び迅速かつ的確な避難と被害最小化を図る取組等を組み合わせ、浸水被害の軽減を図る治水対策を推進している。

このプロジェクトにおける主な地域の取組として、日高町では公共施設等の建設時に屋上等を活用した避難場所の設置等を検討すること、平取町では GIS 位置情報等を活用した要配慮者支援を推進することなどが挙げられる。また、両町とも、被害軽減のためのハザードマップ、マイ・タイムラインの作成による水害リスクの周知等の取組により、流域における浸水被害の軽減を図ることとしている。

日高町においては、平成 18 年（2006 年）には、日本海溝・^{ちしま}千島海溝周辺海溝型地震防災対策推進地域に指定された。令和 4 年（2022 年）には、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に係る地震防災対策の推進に関する特別措置法が改正され、日高町が日本海溝・千島海溝地震防災対策特別強化地域指定されている。また、令和 2 年（2020 年）4 月には「日高町強靱化計画」が策定された。令和 3 年（2021 年）7 月には、北海道防災会議地震火山対策部会地震専門委員会において、太平洋沿岸における最大クラスの津波による浸水想定が公表された。

砂防事業については、昭和 40 年（1965 年）から北海道により砂防工事に着手しており、土砂災害の防止や土砂流出抑制等、重要な役割を果たしている。また近年は、下流への土砂供給に配慮した透過型砂防堰堤の整備も進めている。



二風谷ダム



平取ダム

写真 4-11 治水事業

※出典：北海道開発局

■沙流川水系工事実施基本計画、河川整備基本方針の変遷

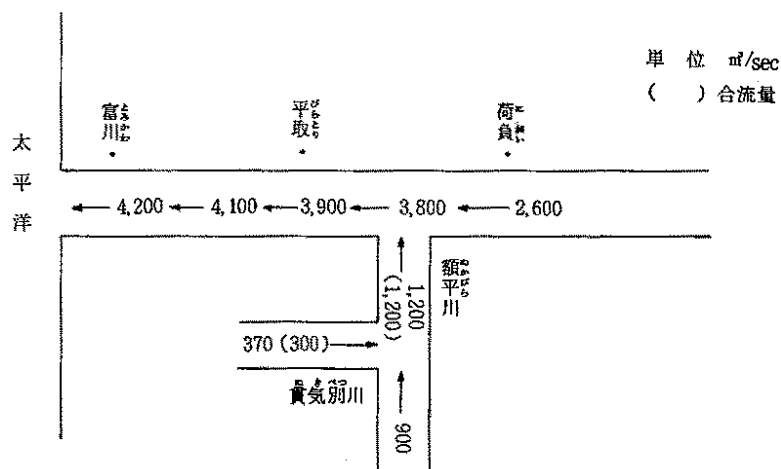


図 4-1 沙流川水系工事実施基本計画(昭和 44 年 3 月)における計画高水流量配分図

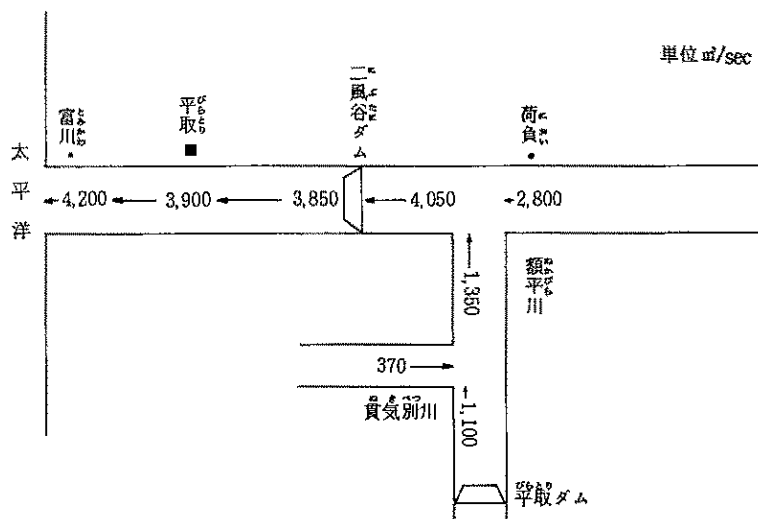


図 4-2 沙流川水系工事実施基本計画(昭和 53 年 3 月)改定における計画高水流量配分図

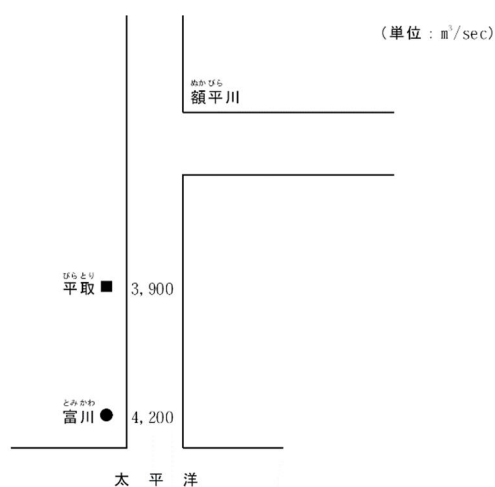


図 4-3 沙流川水系河川整備基本方針(平成 11 年 12 月)における計画高水流量配分図

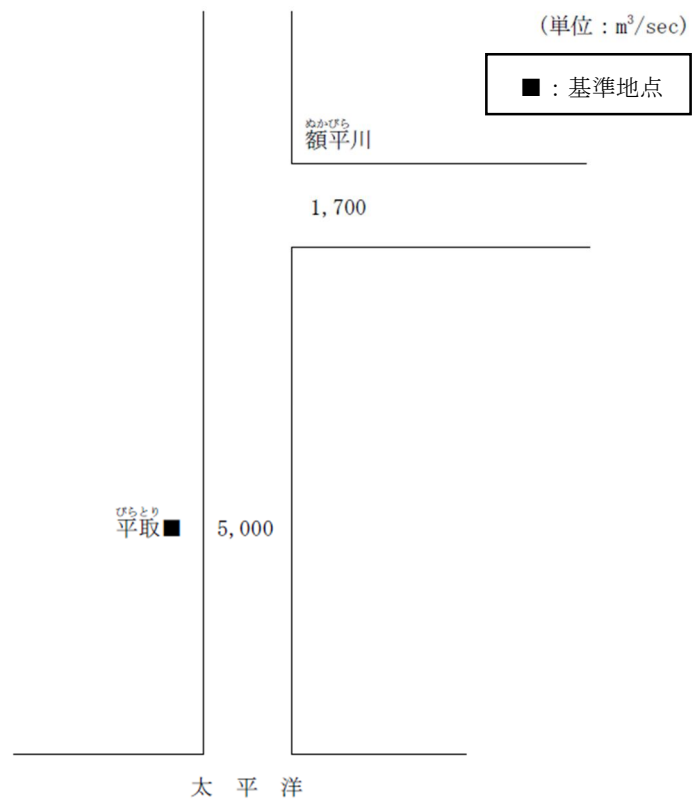


図 4-4 沙流川水系河川整備基本方針(平成 19 年 3 月)における計画高水流量配分図

5. 水利用の現状

5-1 水利用の現状

沙流川水系における利水の現況は、許可利水権として 110 件あり、河川水の利用については、開拓農民による農業用水の利用に始まり、現在は約 2,230ha に及ぶ農地のかんがい用水に利用されている。水力発電としては、昭和 33 年（1958 年）に完成した岩知志発電所を始めとする 5 箇所の発電所により、道内へ総最大出力 68,700kw の電力供給が行われている。水道用水等としては、日高町、平取町に対して供給が行われている。

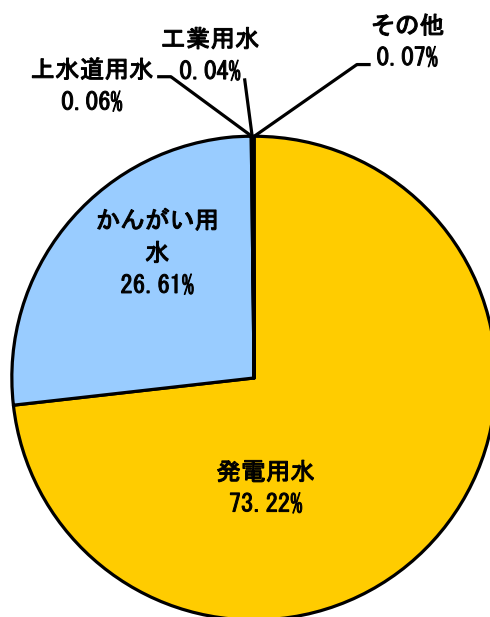


図 5-1 沙流川水系の目的別水利用割合図

表 5-1 沙流川水系水利用現況（法定河川内の許可水利）

目 的	件 数	取水量 (m ³ /s)
発電用水	6	94.5
かんがい用水	95	34.3
上水道用水	3	0.1
工業用水	2	0.1
その他	4	0.1
計	110	129.1

参考文献：一級水系水利権調書（北海道開発局）令和 5 年 3 月現在

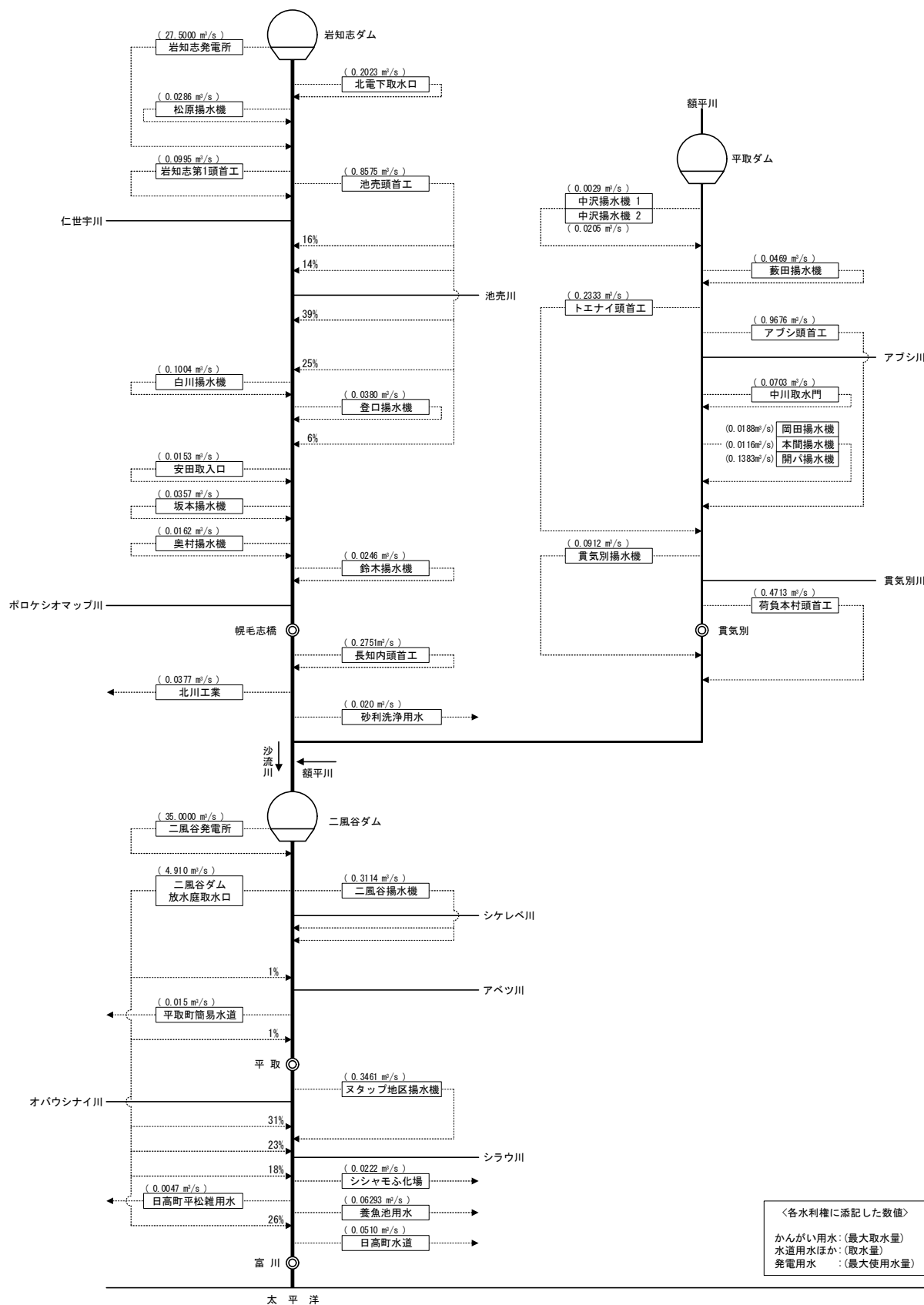


図 5-2 沙流川水利模式図

参考文献：一級水系水利権調査（北海道開発局）令和5年3月現在

5-2 渇水被害及び渇水調整

沙流川水系において、過去に大きな渇水被害はない。また、過去に渇水調整は行っていない。

6. 河川流況及び水質の現状

6-1 河川流況の現状

平取地点における流況は表 6-1 のとおり、昭和 33 年（1958 年）～令和 3 年（2021 年）までの 64 年間の平均で、低水流量約 $17.0\text{m}^3/\text{s}$ 、渇水流量約 $9.8\text{m}^3/\text{s}$ となっており、概ね 10 年に 1 回程度の渇水流量は約 $7.1\text{m}^3/\text{s}$ である。また、富川地点における流況は表 6-2 のとおり、昭和 39 年（1964 年）～令和 3 年（2021 年）までの 58 年間の平均で、低水流量約 $21.1\text{m}^3/\text{s}$ 、渇水流量約 $12.0\text{m}^3/\text{s}$ となっている。二風谷ダム完成（平成 9 年（1997 年））以降の平均では、平取地点の低水流量約 $18.9\text{m}^3/\text{s}$ 、渇水流量約 $11.3\text{m}^3/\text{s}$ 、富川地点の低水流量約 $22.5\text{m}^3/\text{s}$ 、渇水流量約 $13.3\text{m}^3/\text{s}$ となっており、概ね 10 年に 1 回程度の渇水流量は平取地点で約 $10.0\text{m}^3/\text{s}$ 、富川地点で約 $10.7\text{m}^3/\text{s}$ である。

表 6-1 平取地点における流況表

年	データ数	欠測数	流量 (m ³ /s)						年平均
			最大	豊水	平水	低水	渇水	最小	
昭和33年	365	—	377.56	61.08	31.32	16.95	10.90	6.95	47.56
34	365	—	506.70	64.16	33.75	12.32	7.89	4.04	48.85
35	366	—	290.00	29.00	21.80	18.60	6.40	4.10	29.23
36	365	—	1,115.70	63.80	39.60	17.20	7.60	2.80	54.13
37	365	—	1,345.00	83.80	26.60	12.50	8.50	7.60	65.87
38	—	365	—	—	—	—	—	—	—
39	366	—	362.00	62.82	33.03	22.43	11.54	9.26	47.38
40	365	—	347.54	62.36	29.49	17.82	11.25	8.99	50.72
41	365	—	792.78	72.41	39.73	20.80	11.86	9.40	63.30
42	365	—	268.64	52.14	29.19	18.93	10.12	7.95	40.02
43	366	—	305.85	55.23	32.74	16.28	9.99	8.59	45.10
44	365	—	249.82	63.50	29.56	17.52	9.39	6.65	47.32
45	365	—	628.83	58.10	24.36	14.22	11.60	7.72	56.81
46	365	—	333.40	59.33	35.21	16.66	6.89	5.81	48.72
47	366	—	256.02	80.62	40.65	15.51	8.76	7.48	57.41
48	365	—	1,341.70	74.66	37.26	11.48	6.92	5.07	69.03
49	365	—	1,020.72	79.17	41.13	12.92	7.82	3.12	64.81
50	365	—	1,445.09	71.16	36.24	13.57	7.89	6.87	66.12
51	366	—	273.97	55.79	27.40	15.25	9.63	7.12	43.32
52	361	4	431.72	55.58	24.51	14.68	7.85	5.59	43.71
53	364	1	303.13	46.44	24.58	16.98	8.58	4.87	38.40
54	365	—	404.49	69.36	39.31	17.13	9.54	4.90	51.32
55	366	—	372.74	52.24	25.45	15.38	9.84	7.18	43.41
56	365	—	687.99	72.73	35.54	19.29	8.23	5.50	61.42
57	365	—	293.45	54.61	27.64	16.27	8.34	6.99	47.49
58	365	—	217.04	35.37	22.31	15.85	8.77	6.30	30.18
59	366	—	123.04	27.41	13.60	9.56	7.06	5.34	21.36
60	365	—	201.50	40.90	20.65	9.93	7.01	5.22	32.06
61	365	—	321.74	40.48	21.13	13.03	7.70	6.86	37.50
62	365	—	402.85	51.11	24.32	14.57	9.19	7.96	45.21
63	366	—	216.10	42.13	21.34	12.39	8.44	6.80	33.91
平成01年	365	—	484.02	65.14	37.98	17.32	8.25	6.72	51.42
02	365	—	345.40	64.79	34.33	18.54	9.38	7.63	48.98
03	365	—	196.56	45.85	25.74	16.60	9.34	7.40	38.28
04	366	—	877.44	77.51	44.53	18.16	9.24	6.92	65.50
05	365	—	328.62	58.87	27.09	17.26	11.79	8.76	44.31
06	365	—	541.33	53.59	24.01	15.03	6.70	4.75	43.97
07	365	—	332.63	82.03	41.21	19.15	8.65	7.07	57.51
08	366	—	260.36	56.55	32.40	15.52	8.57	6.52	45.54
09	365	—	853.50	68.96	41.32	16.74	9.82	8.17	60.73
10	365	—	489.31	60.71	32.52	19.24	11.66	11.14	53.39
11	347	18	927.74	54.60	35.70	22.55	10.25	9.72	55.88
12	366	—	626.57	64.12	33.72	18.31	11.98	11.34	58.00
13	365	—	1,165.56	60.18	34.16	17.22	12.89	11.67	53.97
14	365	—	273.66	43.58	28.72	18.14	10.86	9.87	38.45
15	365	—	2,083.08	49.21	34.17	14.82	10.54	9.92	49.94
16	366	—	316.25	51.47	30.24	19.22	10.60	9.18	45.76
17	365	—	537.15	58.96	28.96	18.27	11.65	9.94	46.89
18	364	1	682.54	56.46	31.13	18.62	11.28	10.18	51.30
19	365	—	263.73	45.14	23.17	14.59	11.23	10.26	38.72
20	366	—	288.31	33.90	21.85	13.82	10.01	9.14	29.41
21	365	—	386.03	63.86	38.82	23.98	12.87	11.58	53.29
22	360	5	1,067.94	75.38	41.13	23.98	12.06	11.29	66.01
23	359	6	530.22	68.30	40.45	18.56	11.17	10.64	56.59
24	366	—	340.97	56.60	25.89	12.35	11.02	9.07	43.85
25	365	—	295.20	75.05	43.95	16.37	10.02	10.02	57.29
26	365	—	258.26	45.89	29.00	15.85	10.56	9.16	36.75
27	365	—	201.50	51.87	31.24	19.47	10.93	9.51	43.20
28	364	2	1,285.38	73.63	44.10	28.37	11.59	11.05	67.65
29	365	—	184.02	65.33	30.92	18.27	11.02	11.02	44.20
30	364	1	492.83	81.98	51.23	27.73	10.97	9.78	65.22
平成31年	365	—	287.94	41.81	26.45	17.87	12.62	12.13	37.02
02	366	—	467.61	49.27	30.76	19.21	12.05	12.03	42.36
03	364	1	376.03	63.39	28.21	15.52	10.76	10.22	48.34
最大値			2,083.08	83.80	51.23	28.37	12.89	12.13	69.03
平均値			528.33	58.75	31.66	17.03	9.81	8.04	48.75
最小値			123.04	27.41	13.60	9.56	6.40	2.80	21.36
二風谷ダム完成以降(H10～) 最大値			2,083.08	81.98	51.23	28.37	12.89	12.13	67.65
二風谷ダム完成以降(H10～) 平均値			576.16	57.95	33.19	18.85	11.27	10.41	49.31
二風谷ダム完成以降(H10～) 最小値			184.02	33.90	21.85	12.35	10.01	9.07	29.41
近年64年間(S33～R03) 第6位			216.10	40.90	21.85	12.39	7.06	4.87	33.91
近年50年間(S47～R03) 第5位			201.50	40.90	21.85	12.39	7.70	5.07	33.91
近年40年間(S57～R03) 第4位			201.50	40.48	21.34	12.39	7.70	6.30	32.06
近年30年間(H04～R03) 第3位			258.26	43.58	24.01	14.59	8.65	6.92	37.02
近年24年間(H10～R03) 第2位			201.50	41.81	23.17	13.82	10.02	9.14	36.75
近年20年間(H14～R03) 第2位			201.50	41.81	23.17	13.82	10.02	9.14	36.75
近年10年間(H24～R03) 第1位			184.02	41.81	25.89	12.35	10.02	9.07	36.75

出典：国土交通省 水文水質データベース

表 6-2 富川地点における流況表

年	データ数	欠測数	流量 (m ³ /s)						
			最大	豊水	平水	低水	渾水	最小	年平均
昭和39年	366	—	366.27	66.83	36.90	24.36	11.95	9.69	50.78
40	365	—	355.07	64.80	32.39	20.20	11.76	9.18	54.58
41	365	—	813.43	78.32	43.64	21.68	12.38	9.64	67.49
42	365	—	283.40	57.01	33.08	21.27	10.75	8.40	43.81
43	366	—	321.54	60.32	34.62	20.76	10.57	9.04	49.37
44	365	—	264.12	70.22	32.32	18.62	9.98	6.99	51.38
45	365	—	669.78	61.28	27.28	17.07	12.24	7.86	61.17
46	365	—	356.30	64.71	38.69	17.43	7.06	5.97	53.03
47	275	91	278.73	91.56	59.49	35.61	15.15	11.40	73.42
48	365	—	829.34	84.52	38.79	15.93	11.30	7.81	67.32
49	365	—	846.59	93.81	41.56	16.91	11.39	0.00	70.69
50	365	—	1,439.86	67.76	36.23	19.74	12.11	9.67	68.88
51	—	366	—	—	—	—	—	—	—
52	365	—	467.26	54.45	28.13	17.27	9.94	7.81	46.85
53	365	—	366.21	48.90	25.10	18.30	9.27	5.31	40.06
54	357	8	428.66	76.09	43.47	22.77	11.00	8.97	59.23
55	—	366	—	—	—	—	—	—	—
56	365	—	837.97	81.62	40.20	20.81	8.13	5.56	69.34
57	365	—	403.84	58.46	33.19	18.20	11.18	7.28	51.77
58	364	1	253.12	40.27	25.72	17.96	11.78	7.83	34.94
59	—	366	—	—	—	—	—	—	—
60	365	—	242.76	45.83	23.84	12.64	8.17	5.75	36.81
61	365	—	369.28	50.90	26.27	17.14	9.26	7.51	45.60
62	365	—	451.73	62.80	29.90	19.85	10.57	9.38	52.49
63	—	366	—	—	—	—	—	—	—
平成01年	365	—	578.74	69.09	40.76	22.01	9.63	8.68	56.75
02	365	—	394.80	60.33	35.79	21.46	10.15	7.65	50.91
03	349	16	224.59	50.18	32.31	20.92	11.50	7.27	42.43
04	—	366	—	—	—	—	—	—	—
05	365	—	377.84	55.14	30.07	19.98	13.58	12.12	45.39
06	365	—	694.36	57.82	26.18	17.31	11.39	9.00	46.39
07	362	3	411.36	86.52	45.37	21.64	10.33	9.58	62.15
08	—	366	—	—	—	—	—	—	—
09	365	—	1,054.98	70.09	44.61	20.87	11.57	10.13	65.69
10	365	—	689.68	65.20	36.42	22.68	11.95	11.38	59.97
11	365	—	988.82	55.17	35.28	21.38	11.63	8.73	56.43
12	366	—	697.14	67.05	32.66	19.72	11.40	10.18	59.16
13	365	—	1,263.60	64.33	36.86	20.13	10.84	10.18	56.96
14	365	—	324.70	52.04	35.25	22.93	11.37	10.70	45.67
15	365	—	2,377.39	57.92	37.66	16.00	10.72	10.42	54.22
16	366	—	326.38	57.67	32.97	20.22	15.05	13.28	49.66
17	365	—	665.77	64.79	33.30	19.88	13.73	10.52	53.48
18	359	6	1,875.84	68.66	35.61	20.75	12.74	12.74	66.01
19	365	—	297.41	47.19	25.80	17.61	13.52	11.08	41.41
20	366	—	332.95	35.22	22.36	14.05	10.17	9.13	31.23
21	365	—	479.42	71.35	41.70	24.83	15.02	12.19	59.92
22	365	—	1,264.88	85.65	44.43	27.53	14.77	14.02	77.15
23	364	1	577.06	79.38	45.25	20.84	11.87	10.36	65.74
24	366	—	398.89	61.82	29.53	15.16	12.12	10.86	49.94
25	365	—	398.64	81.55	46.11	20.19	12.45	12.45	63.37
26	365	—	279.74	47.81	31.41	18.94	12.54	11.47	39.80
27	365	—	243.38	54.74	34.62	22.52	12.94	11.68	47.97
28	366	—	1,516.19	78.99	48.45	30.26	13.00	11.74	76.42
29	353	12	221.40	75.50	36.40	22.23	13.27	12.25	50.68
30	364	1	532.09	87.65	49.39	30.10	13.38	12.53	69.11
令和01年	365	—	321.27	44.46	29.94	20.10	14.08	13.43	39.07
02	365	1	558.03	69.50	42.28	30.12	15.49	13.84	58.11
03	274	91	485.92	91.65	63.36	42.27	24.90	21.74	79.06
最大値			2,377.39	93.81	63.36	42.27	24.90	21.74	79.06
平均値			605.74	65.29	36.40	21.14	11.98	9.85	55.18
最小値			221.40	35.22	22.36	12.64	7.06	0.00	31.23
二風谷ダム完成以降 (H10～) 最大値			2,377.39	91.65	63.36	42.27	24.90	21.74	79.06
二風谷ダム完成以降 (H10～) 平均値			713.19	65.22	37.79	22.52	13.29	11.95	56.27
二風谷ダム完成以降 (H10～) 最小値			221.40	35.22	22.36	14.05	10.17	8.73	31.23
近年58年間 (S39～R03) 第5位			253.12	47.19	25.80	16.00	9.27	5.97	39.80
近年50年間 (S47～R03) 第5位			253.12	47.19	25.80	16.00	9.63	7.27	39.80
近年40年間 (S57～R03) 第4位			243.38	45.83	25.80	16.00	10.15	7.51	39.07
近年30年間 (H04～R03) 第3位			279.74	47.19	26.18	16.00	10.72	9.13	39.80
近年24年間 (H10～R03) 第2位			243.38	44.46	25.80	15.16	10.72	9.13	39.07
近年20年間 (H14～R03) 第2位			243.38	44.46	25.80	15.16	10.72	10.36	39.07
近年10年間 (H24～R03) 第1位			221.40	44.46	29.53	15.16	12.12	10.86	39.07

出典：国土交通省 水文水質データベース

平取地点の流況経年変化

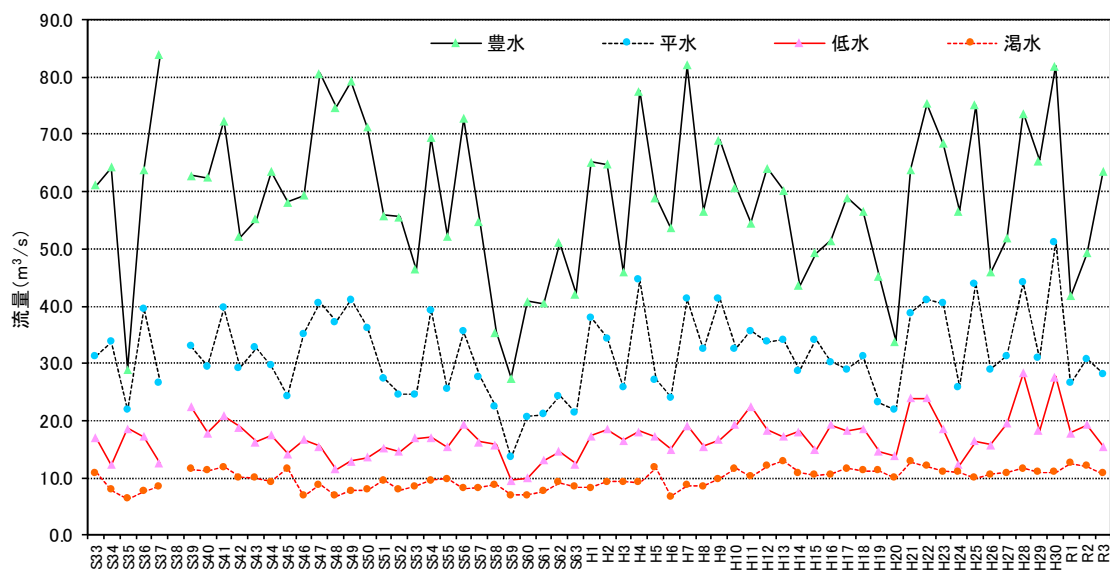


図 6-1 平取地点流況経年変化図

富川地点の流況経年変化

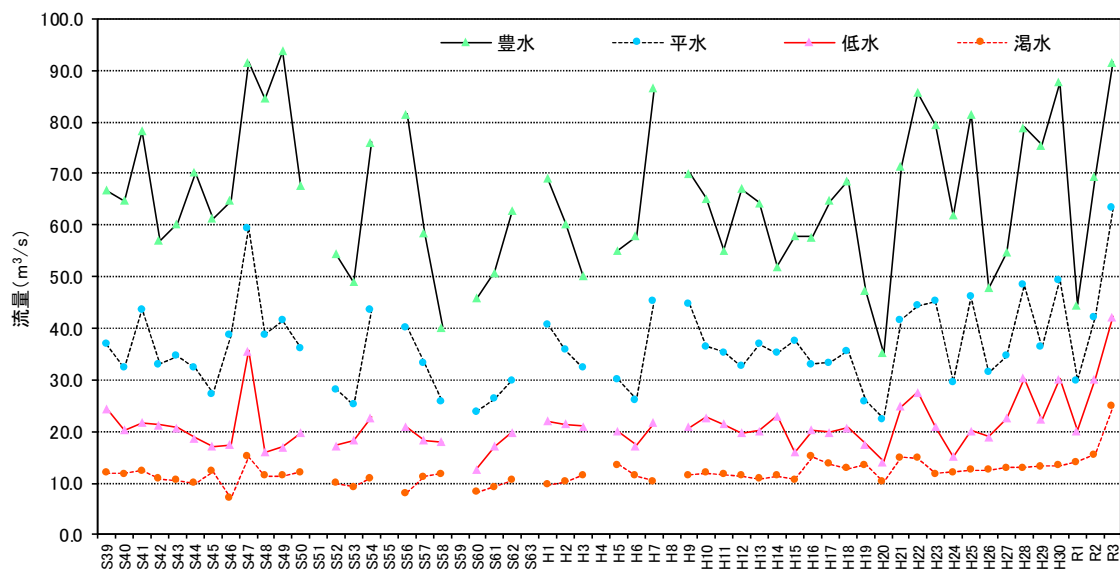


図 6-2 富川地点流況経年変化図

※出典：国土交通省 水文水質データベース

6-2 河川水質の現状

沙流川水系では、表 6-3 及び図 6-3 に示すように水質環境基準が指定されており、千呂露川合流点から上流側は AA 類型、千呂露川合流点から額平川合流点までは A 類型、額平川合流点から下流は B 類型に指定されている。

沙流川水系の水質は、図 6-4 に示すように、近年は水質環境基準値を満足している。

表 6-3 環境基準の類型指定状況（昭和 47 年 4 月 1 日北海道告示）

水域の範囲	類型	達成期間	環境基準地点名
沙流川上流 「千呂露川合流点から上流（千呂露川を含む）」	A A	イ	千呂露橋
沙流川中流 「千呂露川合流点から額平川合流点まで（額平川を含む）」	A	イ	長知内橋
沙流川下流 「額平川合流点から下流」	B	イ	沙流川橋

（注）イ：直ちに達成

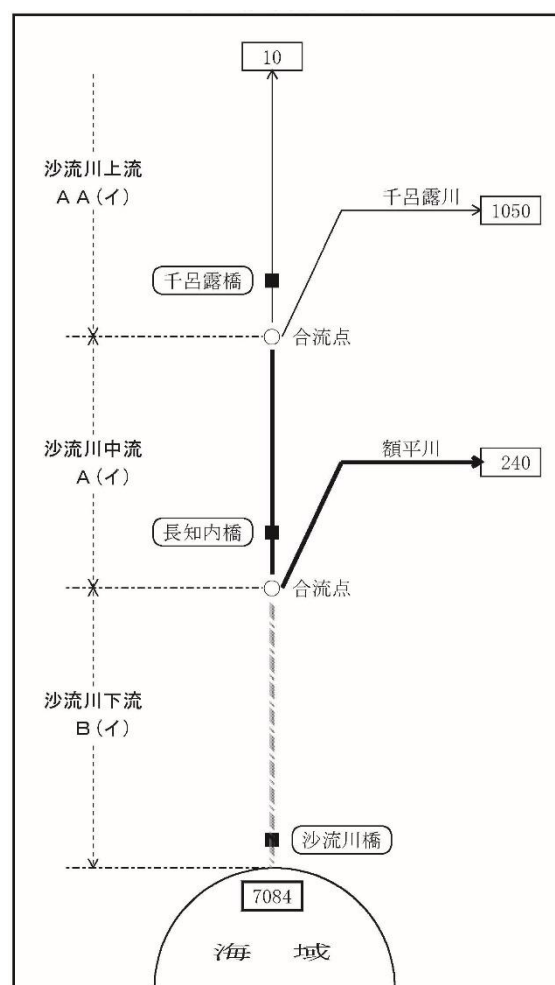
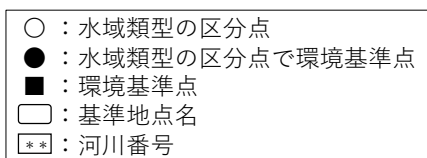


図 6-3 沙流川水系水質環境基準地点および類型指定区間

※出典：北海道 河川類型指定状況模式図 平成 27 年 3 月

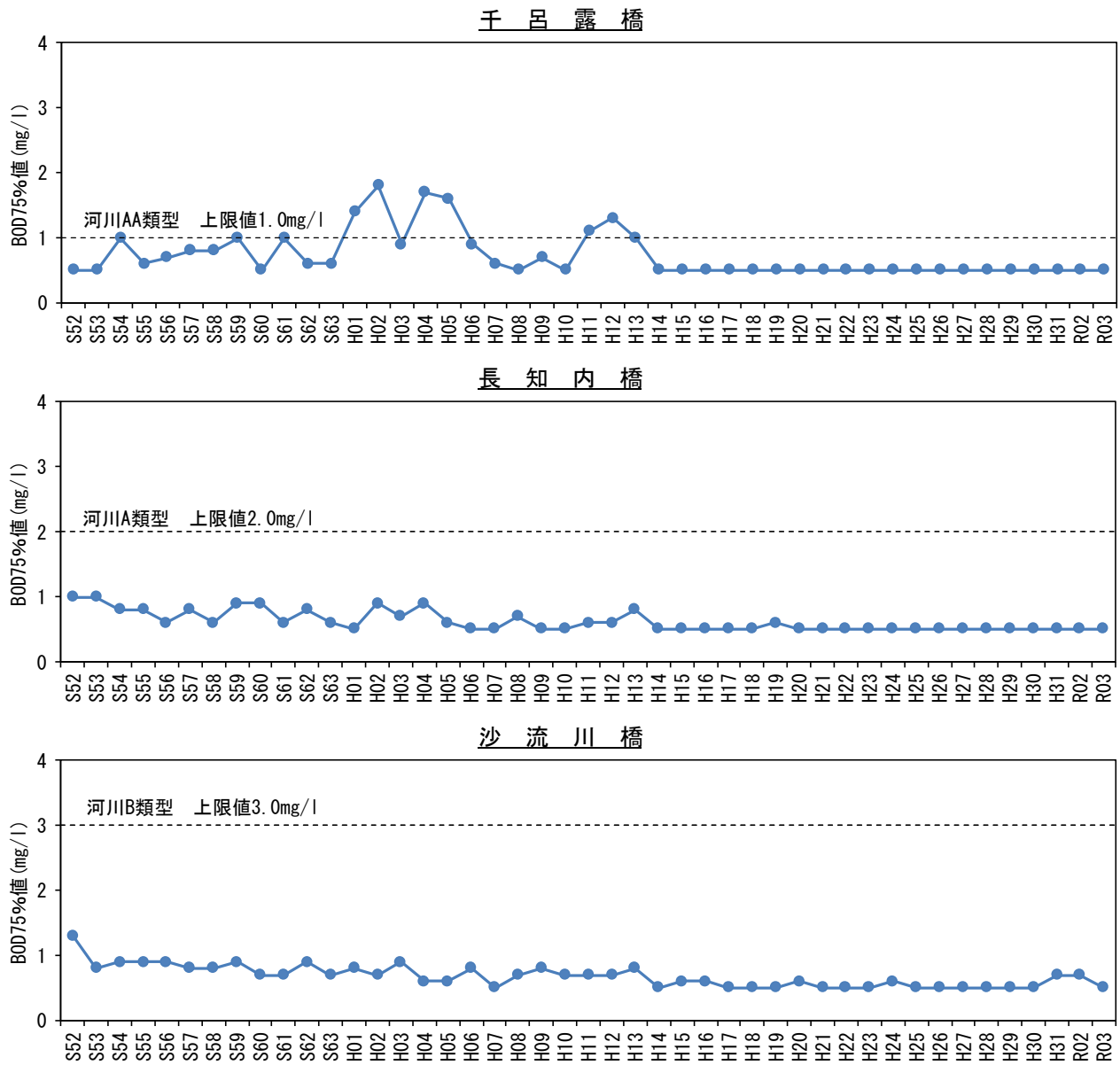


図 6-4 沙流川水系における水質（BOD75%値）の経年変化

※出典：北海道 公共用水域の水質測定結果

7. 河川空間の利用状況

7-1 河川敷等の利用の状況

(1) 河川敷地の利用状況

令和元年度（2019年度）に実施した「沙流川水系河川空間利用実態調査」によれば、沙流川水系の年間河川空間利用者総数（推定）は約 3.2 万人で、平成 26 年度（2014 年度）調査から約 1.6 万人の減少であるが、冬季を除き年間を通じて 100 人前後の利用者がみられる。

利用形態別では散策等が最も多く 57%を占め、次いでスポーツが 42%と続き、両者で 99%を占める。水遊びは 0.2%、釣りは 0.8%であった。

利用場所別では高水敷が 70%と最も多く、次いで堤防が 29%と続き、水際や水面の利用者は 1%に満たない。

令和元年度（2019年度）は平成 26 年度（2014 年度）に比べ、河川利用者は減少傾向であり、特にスポーツの利用者数が減少した。利用形態別ではスポーツと釣りの利用割合はほとんど変わらず、利用場所別では堤防の利用が減少し、高水敷の利用が増加している。

表 7-1 沙流川の年間空間利用状況

区分	項目	年間推計値(人)			利用状況の割合		
		平成21年度	平成26年度	平成31年度	平成21年度	平成26年度	平成31年度
利用形態別	スポーツ	22,213	21,133	13,616			
	釣り	510	292	262			
	水遊び	93	322	66			
	散策等	21,245	26,404	18,172			
	合計	44,061	48,151	32,116			
利用場所別	水面	0	0	170			
	水際	603	615	241			
	高水敷	38,171	36,151	22,400			
	堤防	5,287	11,385	9,305			
	合計	44,061	48,151	32,116			

※河川水辺の国勢調査（河川空間利用実態調査）による。

※平成 26 年度、令和元年度調査結果ではイベント調査結果は含まれていない。

(2) 高水敷の利用状況

沙流川は、広大な河川空間を有しており、特に高水敷は背後地の諸条件により、その地域のニーズに適応した利用がなされている。

沙流川の流域においては、軽種馬が基幹産業であり大規模経営がなされていることから、高水敷の広い空間を採草放牧地として広く活用しているところである。また、沙流川流域の日高町の市街地周辺においては、自然のうるおいとやすらぎを得られる貴重なオープンスペースとして、広場・公園・緑地等、多目的に利用されている。

沙流川での河川敷地としての利用状況は表のとおりである。

表 7-2 河川敷地の占有状況（直轄管理区間）

単位：ha、下段（）：％

河川名	河川公園		水田耕作		畑耕作		採草地		その他		合計	
	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積
沙流川	5	23.8 (14)	6	3.3 (2)	0	0.0	82	131.0 (74)	219	18.2 (10)	312	176.4 (100)

注) 令和5年5月1日調整

※出典：北海道開発局資料

7-2 河川の利用状況

沙流川は、沿川住民の多様な要請に伴い、沙流川橋周辺の河川環境整備事業、二風谷ダム、平取ダム建設に伴う周辺環境整備構想等が進められている。特に平取町では、平成 20 年度（2008 年度）から、「平取地域イオル再生事業」を行っており、沙流川流域のアイヌ文化環境を再生・保全していくための施策として「イオル（伝統的生活空間）の森」、「コタン（集落）の再現」、「水辺空間」の 3 つの柱を軸とした再生・保全の検討・整備が進められている。そのほか、日高町ふるさと集落生活圏形成推進事業計画、道央広域連携地域計画等の計画がある。

沙流川の河川空間は、アイヌ文化伝承の場、河川敷、牧場風景を望むフットパスツアー等で利用されており、特に、二風谷ダム周辺では、アイヌ伝統文化であるチャサンケが毎年行われ、流域内はもとより、多くの観光客が来訪している。さらに、平取町では、地域に息づく歴史・文化を川から発信するための「平取町かわまちづくり」が進められ、文化伝承の場やフットパス等、広域の水辺空間を一体とした活用が推進されている。また、下流域の日高町門別地区では、高水敷にせせらぎ公園やパークゴルフ場が整備され、多くの利用者が訪れているほか、毎年 10 月に町を代表する特産品である「シシャモ」が味わえる人気のイベントである「門別ししゃも祭り」が開催されている。

(1) 上流部

上流部は釣り・散歩・ピクニック・レクリエーション等を主体に、自然豊かな溪流や施設整備されている箇所等が利用場所となっている。



釣り大会に集う人々（日高町）

写真 7-1 沙流川上流部の利用状況

(2) 中流部

中流部は、二風谷地区の「にぶたに湖水祭り」（二風谷ダム湖）やチャサンケ（沙流川、アイヌ文化の舟おろしの儀式）等が実施されている。また、アイヌ文化を紹介する二風谷アイヌ文化博物館があり、町外から多数の観光客が訪れている。



チャサンケ（平取町）



二風谷アイヌ文化博物館

写真 7-2 沙流川中流部の利用状況

(3) 下流部

下流部の平取町では、「平取町かわまちづくり」により、地域に息づく歴史・文化を川から発信するため、文化伝承の場やフットパス等、広域の水辺空間を一体とした活用が推進されている。また、高水敷にはせせらぎ公園やパークゴルフ場が整備され、多くの利用者が訪れている。



せせらぎ公園



アイヌ文化の解説（フットパス）



ししゃも祭り（日高町）

写真 7-3 沙流川下流部の利用状況

※ 出典：鶴川・沙流川物語（北海道開発局）
沙流川河川環境マップ
沙流川ダム建設事業所パンフレット（北海道開発局）

7-3 内水面漁業

沙流川流域では、沙流川のシラウ川合流点から河口までの区間、オコタン川の旧 JR 日高鉄道橋から沙流川合流点までの区間において内水面におけるシシヤモ漁の団体漁業権が取得されている。

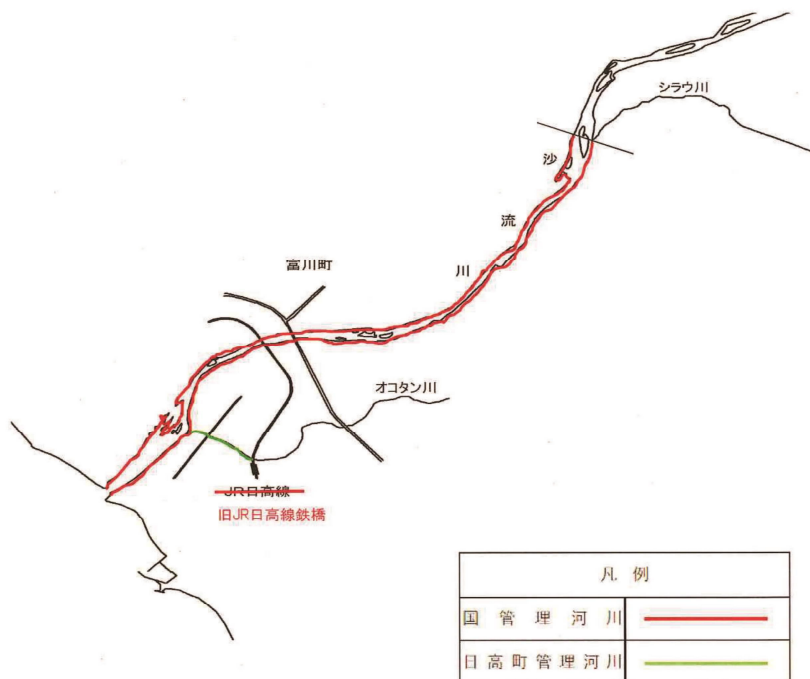


図 7-1 共同漁業権免許漁場図

※出典：令和 5 年内水面共同漁業権及び区画漁業権の設定について

8. 河道特性

8-1 河道の特性

沙流川は、日高山脈に源を発し、ほぼ南西方向に流下している。途中、芽室岳（1,754m）・ルベシベ山（1,740m）・チロロ岳（1,880m）・ピパイロ岳（1,917m）等に源を発するウエンザル川・ペンケヌシ川・パンケヌシ川・千呂露川等と合流し日高町の市街地に至る。さらに戸蔦別岳（1,960m）・幌尻岳（2,052m）に源を発する額平川等の支川と合流し、平取町本町の市街地を経て日高町富川にて太平洋に注いでおり、流域面積は 1,350km²、幹川流路延長は 104km の一級河川である。

(1) 上流部（源流部から岩知志ダム上流）

上流部は、日高山脈が日高造山運動の時代に概成された標高 600m 以上の大起伏山地で、山腹斜面は急峻な満壮年期的な地形をしており、標高 1,600m 以上の山腹にはカール地形が発達している。これより下流は、標高 200～600m 程度の中小起伏山地で、河川沿いに砂礫台地が広がる。河床勾配は 1/130～1/50 程度と急勾配である。



※写真出典：北海道開発局

写真 8-1 上流部

(2) 中流部(岩知志ダムから二風谷ダム)

中流部はおおよそ標高 200～400m の小起伏山地で、河岸段丘の発達が顕著な晩壮年期的地形を示している。河床勾配は 1/190 程度である。



※写真出典：北海道開発局

写真 8-2 中流部

(3) 下流部(二風谷ダム下流から河口)

下流部は、標高 100m 以下で、河岸段丘もみられ、平取本町から下流部には沖積平地の発達もみられるようになり、晩壮年期・老年期的地形を示す。河口までの勾配が 1/500～1/700 程度と急流で、ほぼ一定勾配の沖積地河川である。

河道形状は、高水敷の狭い複断面河道が多く、低水路は堤間内で大きく蛇行している。



※写真出典：北海道開発局

写真 8-3 下流部

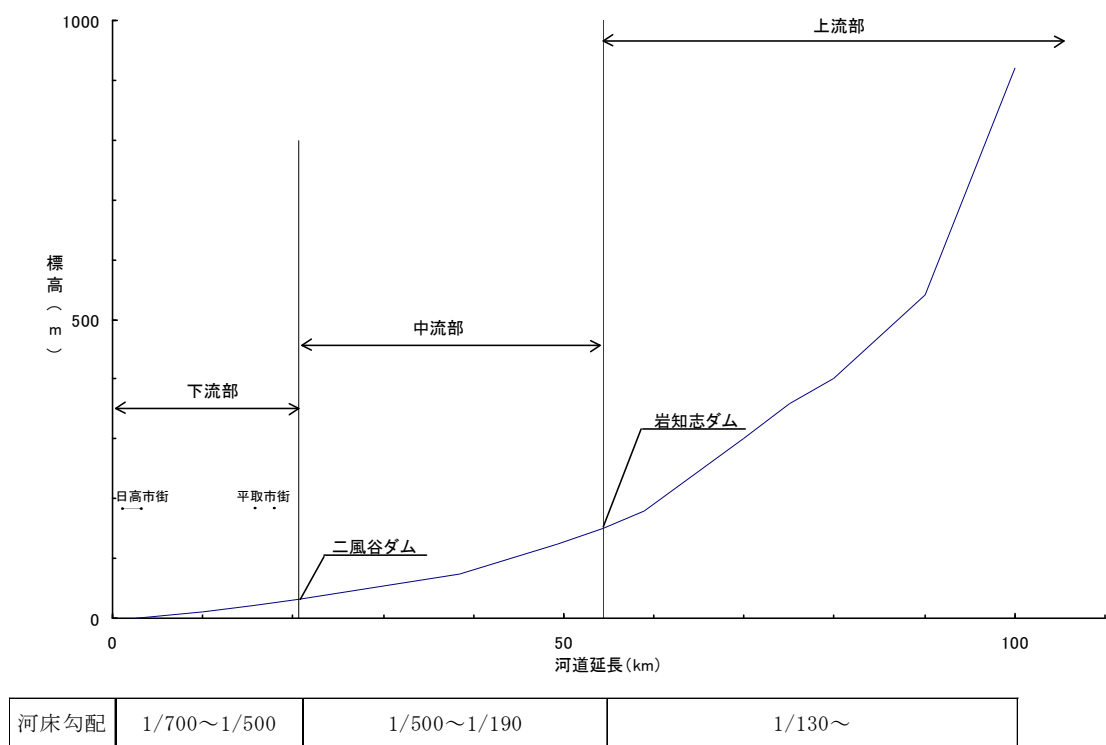


図 8-1 沙流川河床高縦断面図

8-2 河床変動の経年変化

砂利採取の行われていた昭和 40 年代～昭和 60 年（1985 年）までの間の河床低下が顕著である。沙流頭首工の撤去（平成 11 年（1999 年））に伴う河道掘削の実施により KP19.2 上流で河床高が低下している。平成 9 年（1997 年）、平成 13 年（2001 年）、平成 15 年（2003 年）と比較的短い間隔で規模の大きい洪水が発生し河口部の河床高は一時的に低下した。

その後河口部はその後数年かけて堆積が生じ出水前の状態に戻っている。

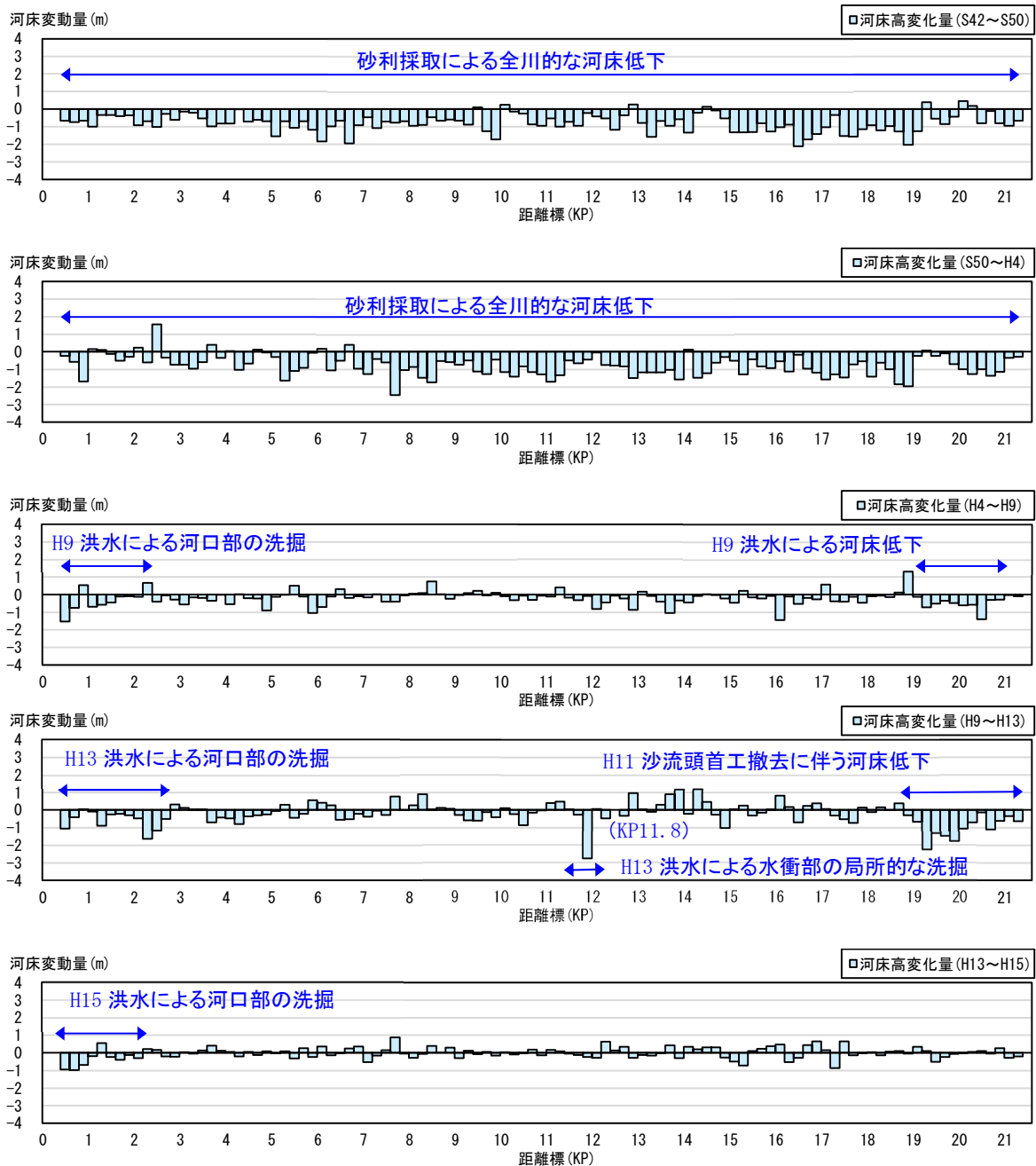


図 8-2 平均河床高の変化 (1)

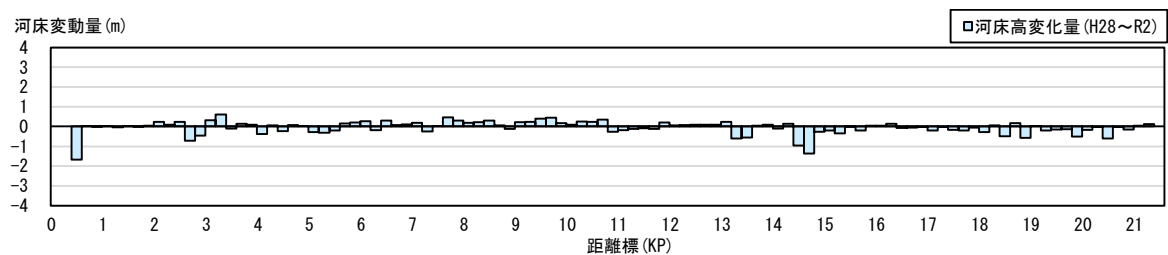
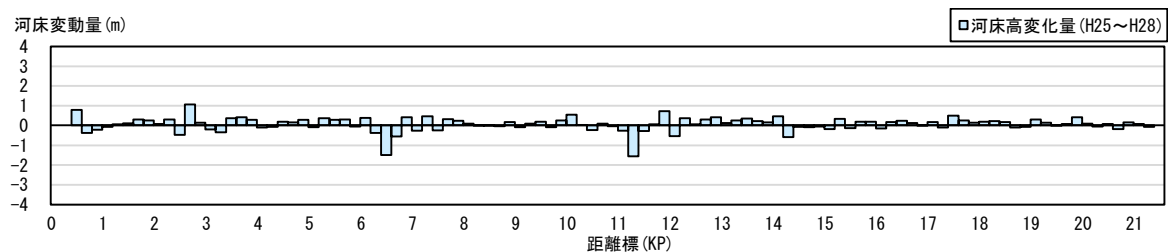
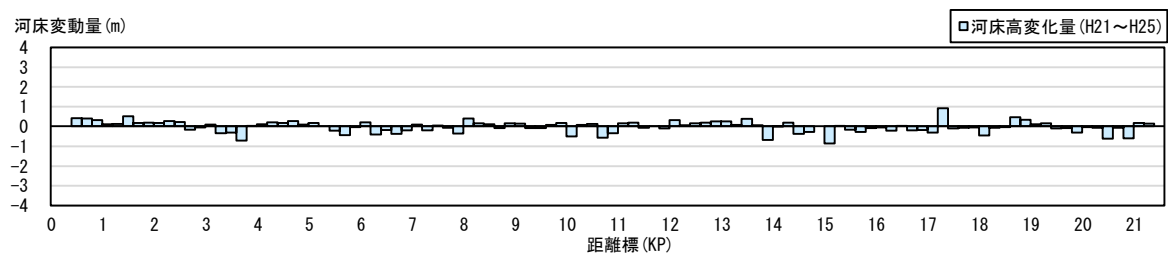
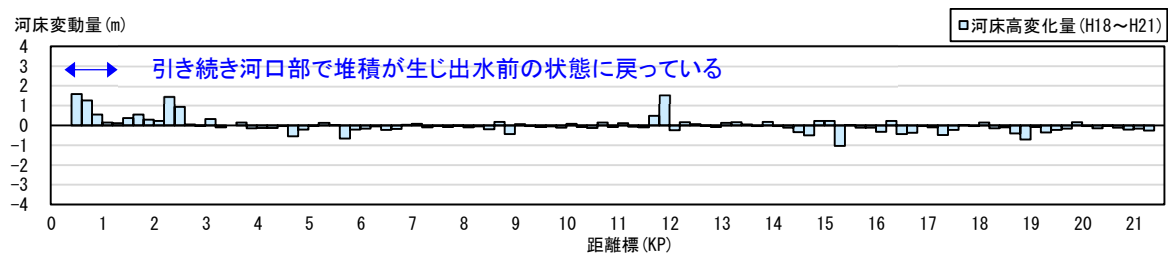
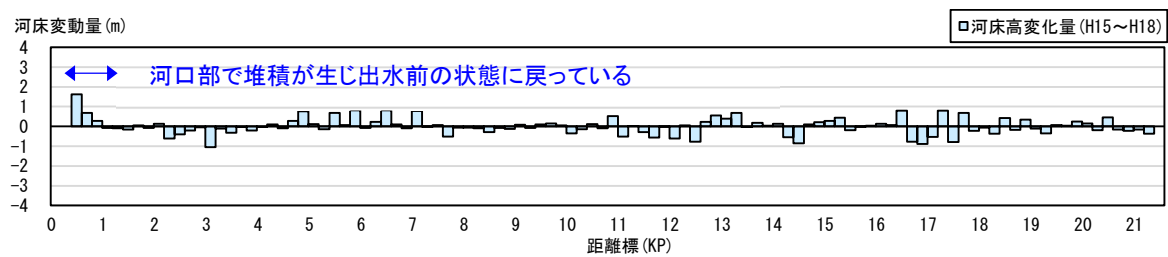


図 8-2 平均河床高の変化 (2)

※ 各グラフの「河床高変化量 (○年～◎年)」は、○年から◎年までの平均河床高の変化を表す

9. 河川管理

9-1 河川管理区間

沙流川は、幹川流路延長 104km の一級河川であり、以下の区間を国が管理している。

表 9-1 沙流川水系の直轄管理区間

区 間				
区 間	河川名	上流端	下流端	延長 (km)
河川 改修 区間	沙流川	KP＝20.8km	海	20.8
二 風 谷 ダ ム 区 間	沙流川	北海道沙流郡平取町字荷 負 168 番の 3 地先の国道橋 下流端	KP＝20.8km	10.0
	ルオマナイ川	北海道沙流郡平取町字二 風谷 141 番の 1 地先	沙流川合流点	0.4
	額平川	左岸：北海道沙流郡平取町 字荷負村 1341 番の 1 地先 右岸：同町同大字 1326 番地 先	沙流川合流点	2.3
平 取 ダ ム 区 間	額平川	左岸：北海道沙流郡平取町 字豊糠 67 番地先 右岸：同町同字 50 番の 11 地先	左岸：北海道沙流郡平取町 字芽生 83 番の 1 地先 右岸：同町同字 98 番地先	7.5
	宿主別川	左岸：北海道沙流郡平取町 大字貫気別村字ソウ シベツ 473 番地先 右岸：同町同大字同字国有 林振内事業区 180 林 班い小班地先	額平川合流点	5.3
合 計				46.3

9-2 河川管理施設

沙流川における河川管理施設等の整備状況は下記のとおりである。

(1) 堤防

堤防整備の現状（令和 5 年（2023 年）3 月末時点）は下記のとおりである。

表 9-2 堤防整備の現状

	延長 (km)
完成堤防	15.7 (69.2%)
暫定堤防	5.0 (22.0%)
未施工区間	2.0 (8.8%)
計	22.7

※延長は大臣管理区間（ダム管理区間を除く）の左右岸の計である。

(2) 洪水調節施設

完成施設 : 二風谷ダム（治水容量：17,200 千 m³）

: 平取ダム（治水容量：43,800 千 m³）

残りの必要容量 : 52,000 千 m³

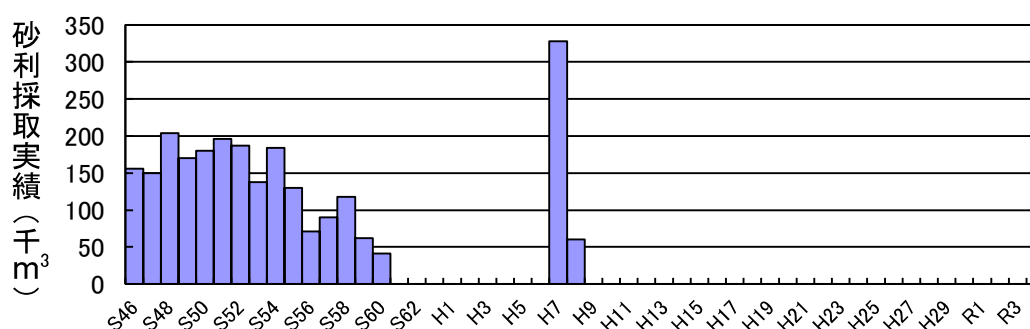
(3) 排水機場等

河川管理施設 : なし

※大臣管理区間の施設のみ記載。

9-3 砂利採取

沙流川においては、河床の低下の防止、河川管理施設及び許可工作物の維持管理のため、昭和 61 年度（1986 年度）から砂利採取規制が行われている。



※平成 7 年、8 年は沙流川頭首工から上流の河道改修計画に伴う掘削

図 9-1 沙流川水系 年度別砂利採取実績

9-4 水防体制

(1) 河川情報の概要

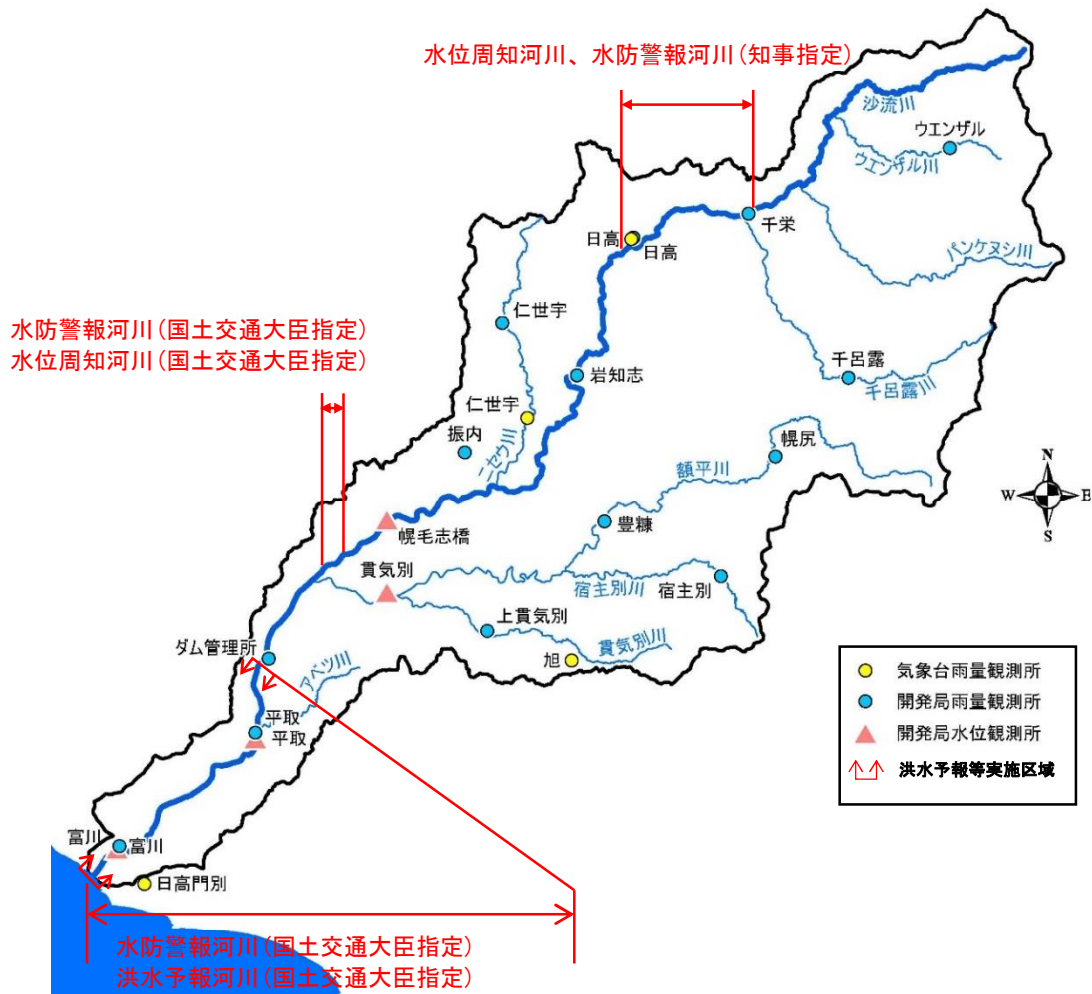
沙流川では、流域内に雨量観測所（18 箇所）、水位観測所（4 箇所）を設置し、無線等により迅速に情報収集を行うとともに、これらのデータを用いて河川の水位予測等を行い水防活動に活用している。また、近年では光ケーブル網により接続された遠隔監視カメラを用いた管理も行い、迅速な水防活動の一助となっている。

(2) 水防警報の概要

沙流川では、洪水による災害が起こる恐れがある場合に、基準となる水位観測所の水位をもとに市町村を含む水防関係機関に対し、河川の巡視や災害発生防止のための水防活動を迅速かつ的確に行えるように水防警報を発令している。

(3) 洪水予報

沙流川では、水防法及び気象業務法に基づき、「洪水予報」を気象台と共同で発表している。流域の雨量や水位の状況、水位予測等を一般住民にわかりやすく迅速に伝えるべく川の防災情報、水害リスクライン等の整備を進めている。



※国土数値情報（河川・海岸線・行政区域）（国土交通省）を加工して作成

図 9-2 洪水予報河川等及び雨量・水位観測所

9-5 危機管理への取り組み

(1) 水防連絡協議会との連携

洪水・高潮等による被害発生の防止又は軽減のため、国及び地方自治体の関係機関が連携し、住民の避難、水防活動等を迅速かつ円滑に行えるよう、水防連絡協議会が結成されている。この協議会により、重要水防箇所の合同巡視、水防団、水防資材の整備状況の把握、定期的な水防訓練等が行われている。

平成 28 年（2016 年）8 月に「鵠川・沙流川減災対策協議会」を組織し、「水防災意識社会」の再構築を目的に国・道・町村等が連携・協力して、減災のための目標を共有し、ハード対策とソフト対策を一体的・計画的に推進している。



写真 9-1 鵠川・沙流川水防技術講習会の状況

※写真出典：令和 4 年度 沙流川河川管理レポートより

(2) 水質事故対策の実施

油類や有害物質が河川に流出する水質事故は、流域内に生息する魚類や生態系のみならず、水利用者にも多大な被害を与える。水質事故が発生した場合、その被害を最小限に抑える、迅速で適切な対応が必要になっている。このため、北海道一級河川環境保全連絡協議会鶴川・沙流川部会により、連絡体制を強化するとともに、水質事故訓練等を行い迅速な対応を行うことが大切であり、また、水質事故に備え、常時から資機材の備蓄を行っている。



写真 9-2 水質事故に対する取り組み
(令和4年度油流出事故対策現地訓練より)

※写真出典：令和4年度 沙流川河川管理レポート

(3) 洪水危機管理の取り組み

洪水危機管理において、平常時から危機管理に対する意識の形成を図るとともに、洪水発生時の被害を最小限に抑えるため、浸水想定区域図を公表するとともに、水防計画・避難計画の策定の支援、土地利用計画との調整を関係機関や地域住民等と連携して推進している。

(4) 地震・津波対策への取り組み

① 過去の地震被害

沙流川流域では過去に昭和 27 年（1952 年）3 月及び昭和 43 年（1968 年）5 月に十勝沖地震が発生しているほか、近年では平成 5 年（1993 年）1 月釧路沖地震、平成 6 年（1994 年）10 月北海道東方沖地震、平成 15 年（2003 年）9 月十勝沖地震、平成 23 年（2011 年）3 月東北地方太平洋沖地震、平成 30 年（2018 年）9 月北海道胆振東部地方中東部地震が発生している。

表 9-3 沙流川流域に影響を与えた主な地震

発生年月日	地震名等	主な市町村の震度	M (マグニチュード)	主な被害
昭和27年 3月4日	十勝沖地震	【震度5】 浦河町ほか	8.2	重軽傷10名 住宅被害等148棟 ^{注1)}
昭和43年 5月16日	十勝沖地震	【震度5】 苫小牧市ほか	7.9	重傷2名、軽傷8名 住宅被害等47棟 ^{注2)}
平成5年 1月15日	釧路沖地震	【震度6】 釧路市	7.5	軽傷1名 ^{注2)}
平成6年 10月4日	北海道東方沖	【震度6】 釧路市ほか	8.2	—
平成15年 9月26日	十勝沖地震	【震度6弱】 新冠町ほか	8.0	重傷2名、軽傷9名 住宅被害等7棟 ^{注2)}
平成23年 3月11日	東北地方太平洋沖地震	【震度4】 平取町ほか	9.0	住宅被害等10棟 ^{注2)}
平成30年 9月6日	北海道胆振東部地方中東部地震	【震度7】 厚真町ほか	6.7	中等傷2名、軽傷37名 住宅被害等829棟 ^{注3)}

注 1) 出典：1968 年十勝沖地震調査報告（1968 年十勝沖地震調査委員会、1969.3）

注 2) 出典：災害記録（北海道）

注 3) 出典：災害復旧記録誌_第 3 部（北海道胆振東部地震公共土木施設災害復旧事業報告会）

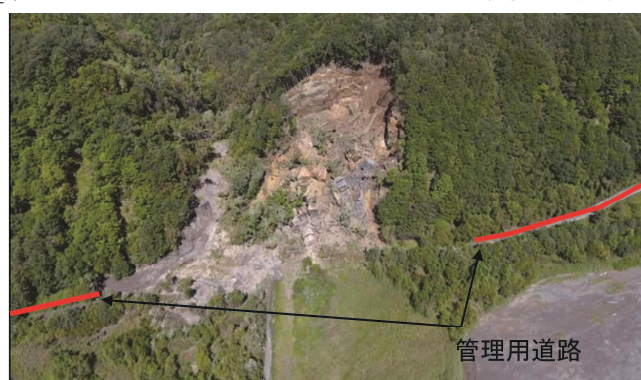


写真 9-3 平成 30 年北海道胆振東部地方中東部地震の被害状況

② 日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に係る地震防災対策

日本海溝・千島海溝周辺では、過去にマグニチュード7や8クラスの大規模地震が多数発生しており、明治29年（1896年）の明治三陸地震では約2万2千人の死者が発生するなど、主に津波により甚大な被害が発生した。

当該地域で発生する地震は、プレート境界で発生するものやプレート内部で発生するもの、揺れは小さいが大きな津波が発生するものなど、さまざまなタイプがあり、約40年間で繰り返し発生する宮城県沖地震等については切迫性が指摘されている。

また、平成15年（2003年）には5月に宮城県沖を震源とする地震、7月には宮城県北部を震源とする地震、9月には十勝沖地震が発生したことから、これらの地域での地震防災対策強化の必要性が求められた。

「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に係る地震防災対策の推進に関する特別措置法」が平成17年（2005年）9月に施行された。これに基づき、沙流川流域では日高町・平取町が、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震が発生した場合に著しい地震災害が生ずるおそれがあるため地震防災対策を推進する必要がある地域として、「日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震防災対策推進地域」に指定されている。

さらに、令和4年（2022年）には、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に係る地震防災対策の推進に関する特別措置法が改正され、日高町が日本海溝・千島海溝地震防災対策特別強化地域指定され、令和2年（2020年）4月には「日高町強靱化計画」が策定された。また、令和3年（2021年）7月には、北海道防災会議地震火山対策部会地震専門委員会において、太平洋沿岸における最大クラスの津波による浸水想定が公表された。

河川津波対策にあたっては、発生頻度は極めて低いものの、発生すれば甚大な被害をもたらす「最大クラスの津波」は施設対応を超過する事象として、住民等の生命を守ることを最優先とし、流域の関係者が津波防災地域づくり等と一体となって減災対策を実施する。また、最大クラスの津波に比べて発生頻度は高く、津波高は低いものの大きな被害をもたらす「計画津波」に対しては、津波による災害から人命や財産等を守るため、海岸における防御と一体となって河川堤防等により津波災害を防御するものとする。

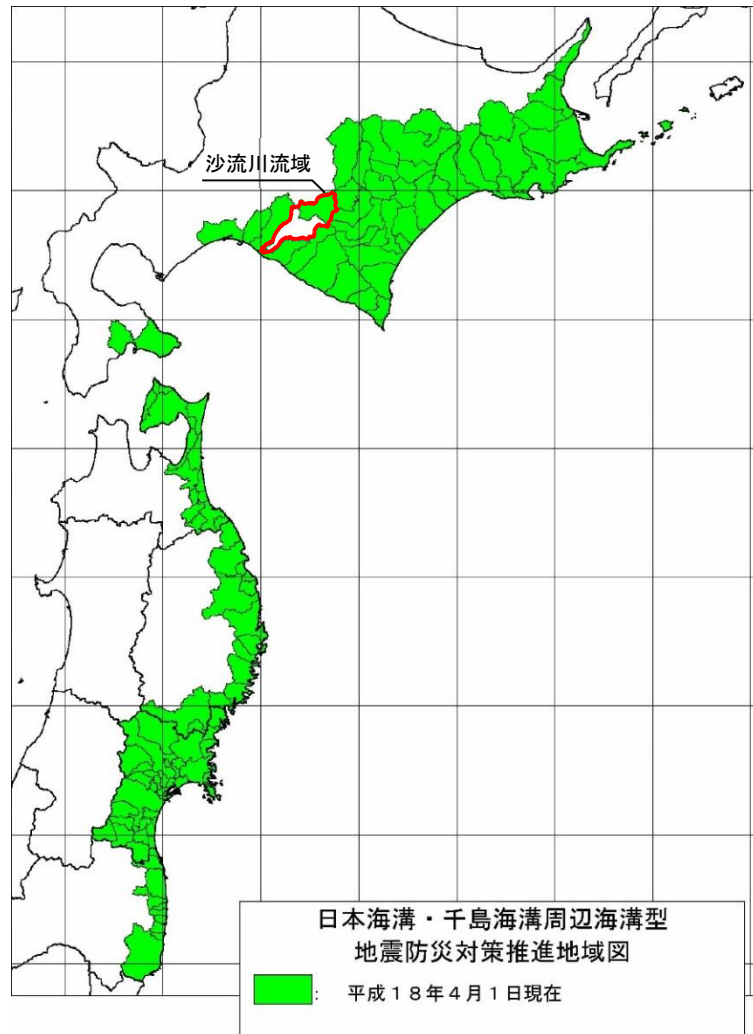


図 9-3 日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震防災対策推進地域

10. 地域との連携

河川清掃活動や河川愛護モニター制度等の活用により、住民参加型の河川管理の構築に努める。沙流川では、河川清掃など様々な市民活動が行われており、今後も市民等の川での社会貢献活動を支援するとともに、地域住民・市民団体・関係機関及び河川管理者が、各々の役割を認識し、連携・協働して、流域に伝わる文化等に配慮しつつ効果的かつきめ細かな河川管理を実施する。

10-1 地域住民、河川協力団体、市民団体等との協働

(1) 実施の基本的な考え方

河川環境の保全や河川利用について、地域住民・河川協力団体・市民団体等との協働により、地域の特性を反映した川の維持管理を実施する。

(2) 実施内容

河川清掃等において、地域住民・河川協力団体・市民団体等と協働する。

(3) 実施に当たっての留意点

地域の取り組みと連携し、河川整備や住民参加型の河川管理体系の構築に努める。



写真 10-1 沙流川河川清掃（富川地区）



写真 10-2 沙流川河川清掃（平取地区）

10-2 関係自治体との連携・調整

(1) 実施の基本的な考え方

日高町及び平取町と連携して、効果的・効率的な河川の維持管理を実施する。

(2) 実施内容

【減災対策協議会】

市町村等と連携・協力して、大規模氾濫に対して減災のための目標を共有し、減災対策の取組みを実施する。

【合同巡視】

重要水防箇所や危険箇所等において関係自治体と連携し、出水期前に合同巡視を実施する。また、河川管理施設の安全利用点検を行う。

(3) 実施に当たっての留意点

河川巡視や各種点検の結果、注意すべき箇所については、市町村との情報共有を密にする。



写真 10-3 効率的な水防活動を行うための減災対策協議会、合同巡視（沙流川）